

文應三年九月十四日
惟家置阿菴
惟忠建菩提
寺河立
并寺金口
領兩村寄

(矢部)のうち(寺)河(村)(低用)のうち(金)木(村)(菩提)所と
て、惟忠一寺御こんりう候て以後、御せん(前)様(御まいらせ敷)せ、寺(領)やう
るへきよ、惟忠仰さ(め)られ候よ承候、も何ともかんよう候、身(事)事
い御(事)候、仰さ(め)られ候す、自今以後、あ(倉)ち
ひ申(事)候、仰さ(め)られ候す、自今以後、あ(倉)ち
さ(倉)へれうそく三十(貫)御まいらせのよ承候、又(倉)か木(倉)の事、くら原
さうふん(倉)て候を、(倉)い(倉)三十(貫)文(倉)めされ候て、寺(倉)やう(倉)御
さ(倉)候間、くら原(倉)そん(倉)お(倉)て、(倉)せん(倉)と(倉)く(倉)申候とも、この(倉)せう(倉)もん(倉)を(倉)
き(倉)と(倉)て、御(倉)せい(倉)を(倉)い(倉)ある(倉)へ(倉)候、か(倉)の(倉)や(倉)う(倉)所(倉)の(倉)事(倉)、大(倉)義(倉)に(倉)れ(倉)う(倉)そ(倉)く(倉)を(倉)被(倉)入
候(倉)う(倉)へ(倉)い(倉)よ(倉)く(倉)他(倉)の(倉)さま(倉)さ(倉)け(倉)ある(倉)ま(倉)く(倉)候、後(倉)日(倉)の(倉)さ(倉)め(倉)を(倉)そ(倉)ん(倉)一(倉)筆(倉)を
も(倉)て(倉)申(倉)上(倉)候(倉)と(倉)ころ(倉)に、我(倉)等(倉)そ(倉)ん(倉)お(倉)る(倉)て、も(倉)あ(倉)い(倉)ち(倉)う(倉)い(倉)申(倉)候(倉)へ、(倉)そ
ん(倉)ま(倉)て(倉)候(倉)とも、(倉)そ(倉)ん(倉)ふる(倉)へ(倉)う(倉)ら(倉)ら(倉)ら(倉)この(倉)よ(倉)承(倉)心(倉)へ(倉)御(倉)申(倉)う(倉)こ(倉)申(倉)へ
く(倉)候、あ(倉)あ(倉)う(倉)く、

阿菴大宮司

文應十四年(つ)のえ 九月十七日
(矢部)の(倉)うち
(將)やうとの(倉)へ(倉)ら(倉)ら
御申

明應三年八月
正月廿八日
惟家置阿菴
惟忠建菩提
寺河立
并寺金口
領兩村寄

明應三年甲子
正月廿八日

宇治朝臣惟乘

進上
御奉行所

阿菴三社大宮司

文應元年七月
惟家置阿菴
惟忠建菩提
寺河立
并寺金口
領兩村寄

文應元年(酉)辛
七月十七日

從四位惟長

阿菴文書之二

三〇三

去年十一月二日之 御内書、今月廿八日下着、拜見仕候、抑被仰下題目、任 上
意旨、可抽忠勤候、此趣可預御披露候、恐惶謹言、

去月十一日之 御内書、今月二日下着、謹而拜見仕候、訖、抑被仰下處、可抽忠功
之節候、以此旨可預御披露候、恐惶謹言、

進上

阿蘇家文書下

御奉行所

三〇四

永正二年九月六日
阿蘇惟長
書狀寫
惟長菊池
政隆下戰
端ヲ開ク

*「誓文返事之案」

(肥後)

就當國弓矢、各心底之通、以

御神名委細承候、令祝着候、爲當家對政朝其外老

(大友氏)

中、無等閑之處、被取成弓箭候上者、不及力候然者、豐州、相良長每申談、調法之儀、

不可有油斷候、一味同心馳走肝要候、就中、隈符國中、其外方々可被廻了簡事、專

一候、

阿蘇十二宮大明神、其外諸神、御照覽候へ、爲當方各仁不可有等閑候、心事恐

々謹言、

(永正二年)

九月六日

惟長

○コノ次ニ、以上載スルトコロノ文書ニ見ユル花押ヲ寫シタリ、今便宜之ヲ卷末ニ収ム、宜シク參看スマシ、

〔阿蘇文書寫 第十二〕

〔長 橋 殿 御 不 存 候 事 〕
ちよ中迄也の御中
(女)

これ豊

御(心)まんきやうの事、やうて、(階)やう申へきよ、御申給ふへ候、

御(心)はな御(心)やう、よ、むらん申候、上(階)ういの事、おほせい(階)さされ候、まことに、

めん(階)くのい(階)ふり(階)候、御(心)ま(階)り(階)とう(階)の事、(階)ま(階)う(階)ま(階)ん(階)中(階)ふ(階)ち(階)う(階)せ(階)つ(階)い(階)は

へ(階)き(階)よ(階)、御(心)と(階)り(階)あ(階)い(階)せ(階)御(心)申(階)給(階)ふ(階)へ(階)く(階)候(階)、う(階)い(階)く(階)、

日付乱一

御名乗判候ハす候

爲 勅(階)紙(階)ア(階)リ(階)、裏(階)付(階)ナ(階)シ、
勅(階)使(階)日(階)野(階)烏(階)丸(階)御(階)下(階)向(階)、誠(階)祝(階)着(階)之(階)至(階)候(階)、仍(階)上(階)階(階)之(階)事(階)、被(階)仰(階)出(階)候(階)、殊(階)二(階)品(階)等(階)之(階)儀(階)、

則(階)可(階)有(階) 勅(階)許(階)之(階)旨(階)、最(階)以(階)面(階)目(階)候(階)、御(階)禮(階)御(階)修(階)理(階)之(階)儀(階)、聊(階)不(階)可(階)有(階)如(階)在(階)候(階)、於(階)只(階)今(階)儀(階)者(階)、

亂(階)後(階)候(階)条(階)、必(階)當(階)春(階)中(階)、可(階)抽(階)別(階)忠(階)候(階)、兼(階)亦(階)、御(階)心(階)經(階)則(階)可(階)致(階)奉(階)納(階)候(階)、此(階)等(階)之(階)趣(階)、宜(階)可(階)預(階)

御(階)奏(階)聞(階)候(階)、恐(階)惶(階)謹(階)言(階)、

天文十三年

拾二月十八日

阿蘇大宮司從三位惟豊判在

阿蘇文書之二

三〇五

元和三年二月廿二日
六月廿二日
久文書案
天文書案
日阿文書案
豐阿文書案
寫阿文書案
惟阿文書案
御奉納心經
勅命奉納心經
惟修叙位
ヲ納理奉
獻修理奉
言上旨
天日阿
十文月
蘇八日
文惟豐
案寫請
勅使肥丸
光康下
ニ下向ス

廣橋殿

○左ノ文書ハ、既ニ原本ニヨリ阿蘇家文書上第三一三號文書トシテ收メ
タリ、

時ノ上卿 廣橋大納言殿御文案

阿蘇大宮司殿

兼秀

天文十三年九月廿三日
兼秀編
副狀寫

爲 勅使、日野烏丸^(光康)下向候、仍三位之事、被仰出候、同被成 綸旨候、御面目之至
候、別而被抽忠節候者、可然存候、巨細 勅使可被仰傳候間、不能詳候、恐々謹言、

九月廿三日

御判ハウリ

阿蘇大宮司殿

切紙

廣橋殿

惟豐

天文十三年八月廿三日
惟豐請
文案寫

爲 勅使、日野烏丸御下向、祝着之至候、仍三位之事、被仰出、同被成 綸旨候、尤
以面目候、必可抽忠節旨、勅使可有御達候之條、不能詳候、恐々謹言、

十二月十八日

御判ハウリ

廣橋殿

日野殿

惟豐

天文十三年八月廿三日
惟豐請
文案寫

爲 勅使御下向、祝着至候、殊上階之事、被仰出候、尤以面目候、御禮御修理等之
儀、必當春中可抽忠節候、爲其證跡、腋刀一丸貫進上候、倍々 天氣可然様、可預
御奏聞候、恐々謹言、

十二月十八日

御名乗ハウリ

日野殿

天文十八年六月廿三日
惟豐請
案寫

爲 勅使、日野烏丸^(光康)御下向之砌、上階之事、被仰出候、殊
謹言上仕候、抑去甲辰年、爲 勅使、日野烏丸^(光康)御下向之砌、上階之事、被仰出候、殊
二品等之儀、可有 勅許之由、面目之至候、翌年御祝儀可申登之處、且者遠國故、
且者神領錯亂已後、節々及未斷候之条、烏菟^移候、頗相似緩怠候歟、就中、御修理之
儀、存其旨候之處、于今延引、背本意候、雖然、眞實無聊尔趣、具令啓上候、此等之段、
宜預御 奏聞候、恐惶謹言、

六月廿三日

惟豐判在

廣橋殿

阿蘇文書之二

天文十八年六月廿三日
惟豐請文
案寫
惟豐請文
神領錯亂
惟領錯亂
神領錯亂
料爲納修
延引納修
陳謝ス

天文十七(八)年六月廿三日
禁中、御進上ノ案文
先年爲 勅使、御下向、御辛勞之至候、其砌上階事、被仰出候、殊二品等之儀、可有
勅許之由、面目之至候、翌年御禮可申登候之處、神領錯亂以後、節々及末斷候之
条、于今延引、相似私曲候歟、就御修理義、存其旨候、經年不通之儀、曾無聊介趣、具
令啓上候、天氣宜様可預御奏聞候、恐々謹言、

天文十七(八)年六月廿三日(己)

日野烏丸殿 (光康)

先年爲 勅使、日野烏丸御下向之砌、上階之事、被仰出候、殊二品等之儀、可有
勅許由、面目之至候、翌年御禮可申登候處、于今延引、聊無如在趣、令啓達候、天
氣宜様可預 御奏聞候、恐々謹言、

六月廿三日(己)
御判ハウリ
廣橋殿 (兼秀)

天文十八年六月廿三日
惟豐請文
案寫
惟豐請文
神領錯亂
惟領錯亂
神領錯亂
料爲納修
延引納修
陳謝ス

ちよくーとして、せんふんひのゝうらま丸御けううのみきり、^(光康) ちやううい^(上階)の
事、お母せいふされ候、めんやくのいふりふ候、とさら御まもりとうのき、その

惟豐遠國
故修理料
引納ス
陳謝ス

むをそん一候つれ共、おんこくゆへゑん^(遠國)にん^(延引)れき、すこーも^(聊爾)うーあきよ
し、申あけ候、これよくーくハ一御申給ふへく候、うーく、
ちらゝかき
あは^(長橋殿)は^(局)の御つ^(衆)ちよ^(女)中^(衆)まの御中
おれりハウリ

○左ノ文書ハ、既ニ原本ニヨリ阿蘇家文書上第三一四號文書トシテ收メ
タリ、

天文十三年十一月三日
惟豐請文
案寫
惟豐請文
神領錯亂
惟領錯亂
神領錯亂
料爲納修
延引納修
陳謝ス

切紙
阿蘇大宮司殿 義隆
爲勅使、中納言家下向候、御面目之至候也、恐々謹言、
(鳥丸光康)
(天文十三年十一月十三日)

阿蘇大宮司殿

切紙
大内殿 惟豐

爲 勅使、日野烏丸下向、面目之至候、就其御音問、祝着候、猶以後音細々可申候
阿蘇文書之二 三〇九

向ヲ祝セ
ルヲ謝ス

村山惟民
禁中等へ
差出ス書
札ノ案文
ヲ調フ
烏丸光康
福王寺ニ
宿ス

永祿十三年
八月十三日
惟將阿菴
寫狀別
滿願寺
當坊職

阿菴家文書下

也、恐々謹言、

(天文十三年)
十二月十八日

惟豐

三一〇

大内殿

天文十三年

彼

禁中へ之御狀認様法名友閑祖父村山宮内少輔惟民相調候法名閑仙父能登守

惟廣、惟豐様依御意、日烏丸殿(野殿)御小宿福王寺ニ致參上得御意、天下之覺家々たきてを以

て相認候御案文等、被申聞趣、此分よて候、進上仕候、

元和六年(三)巳丁六月廿二日 卯乙

村山丹波守家久

御案文ウ才六

元和三年巳丁六月廿二日 卯乙

村山丹波守

進上

別當坊職之事、被得禪候、肝要候、老師數年旁御心懸之筋目、永々以連續、有限寺
役并如法經修行、殊社役等之儀、任先規可被相勸者也、仍證狀如件、

永祿十三年
八月廿二日

惟將花押

滿願寺殿

滿願寺別當房職筋目之儀、任無其紛、至陸奥守殿、被申上候之哉、尤肝要候、能々
以懇望落着專一候、不可有御油斷候、恐惶謹言、
(佐々成政)

六月廿九日

惟光花押

滿願寺殿

至薩

兼日被加不便之由承候、幸至極候、□□□以御故實今度落着之儀、可爲外聞實
儀候、猶巨細用口上候也、恐惶謹言、

六月三日

惟光花押

昌寺□堂

○コノ次ニ、以上載スルトコロノ文書ニ見ユル花押ヲ寫シタリ、今便宜之
ヲ卷末ニ収ム、宜シク參看スベシ、

阿菴文書之二

三一

六月廿九日
阿菴惟光
日書狀寫
滿願寺別
當坊職

六月三日
阿菴惟光
書狀寫
故實

〔阿蘇文書寫第十三〕

肥後國阿蘇大明神宮進きてまじは物々次第注文之事

一三十三年ニ一度當國廻いさんふ(棟別)むきるつをと申て神の御具足をあらため申候まじの事條々如件

元亨三年
阿蘇社進
納物注進
寫物
三十三
每三
國ノ肥
料ヲ棟
神具ヲ
ルヲ以テ
具體ノ神

一男躰七たいのふん

御せん 御ふく 御かふり 御ゆえ 御そや 御をうせ 御こゝ物

御あふき 御くひ

一女躰五たいのふん

十二ひとへの御る 御まをり 御かゝ見かき乃御かつら まき忍の

御てをこ 御くゝ 御をさ見 御せぬき 御まゆはく 御まゆすき

御まろい物御へお御あふらはる御あふき御はめきまかゝる

一からくら十二くち 御まろい 御くひ 御たつあ 御をらひ

一御あくの御をち十二あ(殿) 御さら一やふ四十あて十二一やの分

已上四百八十
御わき四百八十まい

女體ノ神
具體ノ神

田男
田女
水火玉面
作牛
田樂鼓
國衛米
初米
河尻

一御あつら(甘葛)此御をち木のをち 切す十二

一御きゝ見 一やふ二てうはゝ 御應はたる物 うらハぬの

已上二十四てう

一御とちやうにき一やふ一きんはゝ 已上十二さん

一御見す一やふかゝはつゝ十二まやふ以上六さん

一切お物をくへくるぬり一やふ三せんはゝ已上廿六せん

一御こゝ四ちやう 一御をこ五ふりきんきんぬり物

一まゝ二かいら 一たをとこたかゝくたをんか

一水火玉めん二めん になうといふ

一作牛一ひき

一傳樂鼓一かけおあゝくてんろく九人まやうそく(綾筒)あやいかさこれおハミ

一お大まんやう茂せめ申て三十三鉢んニ一度かへ申ところ也

一同社(國衛米)おくうまいからひお初米注文之事

かまゝりけふん八十こくをほふゆりやう度の御まりをさう

この米ハ御まやう殿のゑくとしてけんちうをとけこうのさいちやうふ

阿蘇軍 健佐郡 山越ノ糧

馬用途

引注連用

披拂刀

肥後國中 初米進納

總官出仕 衣裝料 權大宮司 初米

田作祭料

うけとらせて

一阿蘇(健軍) けけまや(甲佐) かうさ(郡浦) こうれうら(桶) ふはくたけ(酒) ふ御まを進

一(甲佐) おうさとのふん一石三斗(これ山越への)

一御馬用途 二十四貫文

一引注連用途 六貫文、已上卅貫文、これ(春)のふん

一披拂刀 ちのふん、かゝる三十三、ようとう六百文、ふゆのふんかゝる三十三、たかゝるようとう六百文、已上やう度のふんかゝる六十六、ようとう一貫二ひやくもん

一當國中初米進とたてまけは所々の注文

一(山鹿) やまう 一(雄鳥) たんとと 一(球磨郡) ままこり 一(天草) あまくさ

以上四ヶ所 此れ(惣官)の御まゆゆのいまやうれうそく

一(権) こん大くう(宮司坊) とと申候初米所々

一(木葉) このを 一(北) 山さ 一(稻佐) いなさ 一(和仁) わに

一(小田) ちを 一(小田) たを 一(江田) 田作祭料 一(石) しろい

一(玉名) たまを 一(道間) ちをさま 一(高瀬) たかをせ 一(伊倉) いくら

踏歌祭料

分 春神主祭

分 冬神主祭

分 竹原霜宮

籠料足

御嶽ニ進 納ノ初米

一(高野) たかをち 一(天野) たのを 一(白間野) しろまを 一(南關) なんとのせき

一(踏歌祭料) ちのせき 已上十七ヶ所 此れ(作)の田はくりは御まつりれうそ

一(八代) かんぬいの御まつりのふん 已上これ(下神人)もいんにんの役として御

一(八代) ちをとりとけ申候ところ也

一ふゆかんぬい御まつり

一(海東) ういと 一(南小川) ちをえおる 一(北小川) さおる

一(神官) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(竹原) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(籠) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一御まを初米

一(合志) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(衆徒) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(召) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(郷) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(下) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(次第) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(司權) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(大) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(大) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(大) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

一(大) ちをえんこんくちんの役として御まつりをとけ申也

うし、一大夫(馬)繫(所)屋敷(敷)一所(不動堂)ふとうきう
 正月一日五升入侍、一三こんぬきのまくちのゐる一系(若宮)け、わくとやふき
 申候かや一(茅)さ(竹)きけ一そくふきまもとあじ一かさ

元亨元年辛酉三月三日

于時文明二年壬辰八月日書移、

阿蘇社進具注

肥後國阿蘇大明神宮奉進物次第注文之事
 一三十三年ニ一度當國平均ニ棟別於取テ神之御具足ヲアラタメ申候次第

男躰七躰之分

御釵 御服 御冠 御弓 御征矢 御博士(佩刀) 御腰物 御扇 御履

女躰五躰之分

十二一重御衣 御護 懸之カツラ 蒔繪之御手筥 御櫛 御鏡
 御ハサミ 御毛拔 御眉作 御眉墨 御白粉 御ヘニ 御油壺
 御爪切刀 御扇

正平三年三月十五日
 阿蘇神社文體神寫

一唐鞍十二口 御鞆 御轡 御手繩 御腹帶
 一御供御鉢十二銅御サラ一社ニ四十宛
 十二社御分已上四百八十御折敷四百八十枚
 一御甘葛御鉢木鉢染物數十二
 一御壘一社二帖ッ、御縁ハ織文 裏者布 已上廿四帖
 一御戸帳錦一社ニ一段ッ、已上十二段
 一御簾一社ニ片間ッ、十二社已上六間
 一金物机黒染一社三前ッ、已上卅六前
 以下脱ス、又年代不分明、
 御ふくの御ためこ
 一にーき一たん
 一ねとぬき一かさね
 御とちやうの御ためこ

一宮二宮
戸帳料

- 一にいき一たん
- 一きぬ一かゝく
- 御ふゝまの御へり
- 一二の御みやの御とあま(も)
- 一にいき十六おもて

はり

- 一まゝへりのきぬともこ
- そこの御みやの御へり
- 一たひ二たけ
- 一きぬまゝへりの御ため

十一月十日

十社神衣
ノ丈

一十まやの御服御ふけ
そくたいの御ふん、御ひゝゝれの御たけ四やく、御そてのまやく四やく
く二すん、ねりぬきの一かき、まゝき、御をうま、御ふけ三やく、おもての
あや、うらひこうをいのきぬ

女體神衣
ノ丈

一によゝいの御みやの御ふん、ねりぬきの一うさねまき、御うまき、あや、
うらひこうをい、御ふけ四やく、御そて四やく二寸

任先例注文、

正平十五年庚子三月十三日

阿蘇三社大宮司宇治朝臣

惟澄

右ハ折紙のうらおもてふかけ

ゐその下くう

- 一のまやハ 御と一ハ 三十四五程こわさり候、
- 三のまやハ 御と一ハ 六十程こわさり候、
- 五のまやハ 御と一 三十程こわさり候、
- 七のまやハ 御と一 五十程こわさり候、
- 九のまやハ 御と一 三十程こわさり候、

ゐそ十二の御神たい南郷までつくり申候ときのこと

文安五年九月十八日

阿蘇文書之二

阿蘇三社
大宮司宇
治惟澄

文安五年
九月十八
日阿蘇三
宮神體注
宮神體注
下

南郷ニテ
神體ヲ造

文安五年九月廿九日
阿菴社神體注文
寫
二宮神像

阿菴御社御神躰之様注文

二御宮

御たけせりさ二丈やく八寸三ぬん、うゝのひろさ一丈やく四寸三ぬん、さ(座褥)とく乃ひろさ一丈やく六寸五ふん、御うゝより上八寸九ぬん、御手のもちやうはくりつぎの御るの下ふりさまで御さ候、右は上までとより候、御をゝへえろく御さ候、はくりつぎの御るの色いふきのごく御さ候、御年の卅四五やと御さ候、

一御ぬくのやうもをうまの色いくまをひなりさ五丈やく、おし乃なるさ三丈やく六すん、おしのでの長さやうをうふ七丈やく、うゝのきぬ乃やう、うらいのしめ、おもていあや、其うへのきぬうらひ白し、中のもよき、上のかうぎ、其上ふうら面共ますし、其うへは下はすし、上の糸りぬき、そのうへ下はすし、うへ糸りぬき、よて御座候、

四宮神像

四御宮

御さけ乃たうさ二丈やく四寸三ぬん、御うゝのひろさ一丈やく二寸三ぬん、さとくのひろさ一丈やく六寸三分、右の御ひさ茂御まき候、ひさりのひさを御立候、御手はやうのつくりはぎの御るの下に御さ候、御ちの下はとより候、御をゝへ白し、つくりつぎの御るの色いうすあうく御さ候、御くしはゆるて御さけ候、御年廿やと御さ候、御ふくのめしやう二御宮のごし

六宮神像

六御宮

御きけ二丈やく三分、御うゝのひろさ九寸、さとく二尺四寸三分、御手の持やうつくりはぎの御るの下に御さ候、御ちの下は御さ候、御くしはひんはらのとくさうの御うゝはかゝり候、つくりはぎの御る乃色いすそいありく、切さは白し、ひさのごくのもん御さ候、御をゝへはえろくはとより候、御年廿やと御さ候、御ふくのめしやうは二宮のごし

八宮神像

八御宮

御きけ一丈やく三寸五分、かゝのひろさ六寸二分、さとく乃ひろさ八寸二分、ひさりのひさ茂御さて候、右のひさを御まき候、左右のつまさき御見え候、御手乃やうはひさりのひさの上お御おき候、御をゝへ白し、おくし

十宮神像

やうの六御宮のとし、つくりはぎの御るの色は白し、すそのあうく御さ候、御年十七八をと御さ候、御ふくのやうの二御宮のとし、
 十御宮
 御ふけ一玄やく三寸八分、うのひろさ六寸五ぬん、さとのひろさ八寸、つくりつぎの御るの色は上は白く、すそはあうし、御をふへは白し、御くのやうの六御宮のとし、御さ候、御ひさのやうひふり、我御きて候、御手の持やう、つくりはぎの御るの下ひふりの御ひさの上は御おき候、御年十七八をと御さ候、御ふくの二御宮のとし、

國造宮神像

國造御宮

御ふけかむりともふ二玄やく一寸二分、かふのひろさ一玄やく三分、さとのひろさ一玄やく四寸六分、御をふへは白し、御手のもちやう、つくりつぎの御るの下御ひさのうへは御さ候、つくりはぎの御るのいろうすあり、御さ候、御年卅四五をと御さ候、御ふくのうららくろし、おもては白あや、そのうへうららくろし、おもてはむらさなあや、御さしぬき、おもてはむらさき、うららくろし、そのやうあまふへ御さ候へともふるく御さ候あひふ

金凝宮神像

金凝御宮

見分申さす候、
 御ふけむむ共二玄やく五寸三分、うのひろさ一玄やく二寸、さとのひろさ一玄やく三寸、御手のつくりはぎの御るの下、ひさのうへは御さ候、御をふへは白し、つくりつぎの御るのいろうすくろを御さ候、御玄やくの一玄やく五寸五分、御年の五十をとり候、御ふくさしぬき、國造御宮のとし、

文安五年九月廿九日
 寛正五年六月吉日 阿蘇大宮司惟忠阿蘇御田出仕次第寫 阿蘇家文書上 第二七一號

肥後國一宮阿蘇社条々ドコノ文書疑フベキ點アレ

大明神垂迹緣記事

右日本書紀云、景行天皇十八年六月丙子、到阿蘇國、其國也、郊原曠遠、不見人、居、天皇曰、是國有人乎、時有二神、申阿蘇都彥阿蘇都媛、忽化人以遊詣之、曰、吾

元應元年十一月十五日
 社條阿蘇注
 社條阿蘇注
 阿蘇大
 神垂迹緣
 阿蘇都
 阿蘇都媛

高田行宮
ノ靈木

關宗岳ノ
靈沼

白川
苦水

中岳
關宗神宮

阿蕪社ノ
根本造營

阿蕪家文書下

三二四

二人在何無人耶故号其國曰阿蕪云々秋七月辛卯朔甲午到筑紫後國
御木居於高田行宮時有僵樹長九百七十丈焉百寮踏其樹而往來云々天皇
問曰是何樹也有一老夫曰是樹麼木也嘗木僵之先當朝日暉則隱杵嶋山當
夕日暉亦覆阿蕪山云々
筑紫風土記曰肥後國關宗縣と坤廿餘里有一禿山曰關宗岳頂有靈沼石壁
為垣計可縱五十丈橫百丈清潭百尋鋪白緣而為質彩浪五色經黃金以分間
天下靈奇出茲華矣時々水滿從南溢流入于白川衆魚醉死土
人号曰苦水其岳之爲勢也中天而傑峙包四縣而開基觸石典雲爲五岳之
最首濫觴分水寔群川之巨源大德巍と諒人間之有一奇形杳々伊天下之無
雙居在地心故曰中岳所謂關宗神宮是也云々
肥後國風土記曰昔者纏向日代宮御宇天皇發玉名長渚濱幸於此郡徘徊四
望原野曠遠不見人物即歎曰此國有人乎時有二神化而爲人曰吾二神阿蕪
都彦阿蕪都媛見在此國何無人乎既而忽然不見因号阿蕪郡斯其緣也二神
之社見在郡以東云々
當社根本造營役人事

阿蕪郡三
座

右延喜式云阿蕪郡三座健磐龍命神社、阿蕪比咩神社、國造神社云々、

建仁二年五月十四日 宣旨狀中云

号阿蕪正一位健磐龍命自令十二宮顯現給以降正朝鎮護之誓厚云々、

右日記者伯二品爲安樂寺參詣令下着宰府之時遠州以御使衾江七郎左

衛門尉阿蕪大明神御事有公家日記者可注給之由依被尋召之即被注

出之畢仍爲阿蕪社御遷宮以元應元年十一月十四日遠州有御下向着御

當亭之時賜御隨身寫本日記之間奉相副本緣記之處也執筆衾江云々、

元應元年乙未十一月十五日 大宮司惟時

大宮司惟
時

明應七年
四月吉日
野部侍番
役次第寫

〔阿蘇文書寫 第十四〕

阿蘇家文書下

野部之御侍御番次第事

一番

四太夫
五太夫

二番

八祝
天宮祝

三番

六太夫
九祝

四番

十祝
藏原河内守

五番

擬大宮司
權擬大宮司

六番

今村左馬介
同石見守

喜利子掃部□

七番

山部和泉守

八番

野中山城守
今村民部丞

九番

瀬田因幡守
權大宮司越前守

十番

古閑和泉守
岩下因幡守

十一番

矢村祝
同和泉守

十二番

井手四郎衛門尉
同出雲守

十三番

今村百房丸
北里又四郎

十四番

田嶋安藝守

阿蘇文書之二

同常陸介

十五番

長野次郎衛門尉
藏原長門守

十六番

小嶋山城守
同主計介

十七番

小嶋大和守
中嶋三河守

右所定如件、

明應七年戊午四月吉日

中司判

家中本方領
新方所領
注文寫

家中本方之事御公領分

一所

もち山

大

一所

きとうはる

大

一所

おうわ

大

一所

ふるその

中

一所

かりおの

中

一所

大その

中

一所

くまのさこ

下

一所

かいわ□

下

一所

ふくわ□

下

一所

みやをら

下

家中新方之事

一所

かきをさ

大

一所

かうたう

大

一所

まふ地

大

一所

かう田

中

一所

おうや

中

一所

いづりさ

中

一所

たよりい

下

下城さ京亮給分

關若狹守給分

いま村さ京亮

北里六郎二郎給分

下城さ京亮給分

下城さ京亮給分

五大夫

一所 下 六太夫
 一所 下 さゝ原
 一所 下 さいのくま

承元二年十月廿二日
 宗治
 日字治惟
 なか起請
 文寫

鎮守西宮
 大明神

阿蘇新大
 宮司對
 スル誓詞

宗治これなり申うくるきやうもんれ事これあふれるとこれいいて
 ちれさ十月廿二日きち日ふやうえんをいひさふめてかけあくもを
 とろしきおらに大ほんてうわうさいやくてんす下ニ日ほんのち
 守八まんたいほさのわう上ちんすかもけえやうまのれをひらのきを
 園牛頭天王(稻荷)大見やうえんとりわきてたうこくちちんすあ
 んこめてんわういなり大見やうえん(當郷)ちんす(西宮)大見やうえん
 十二くさわら七十よあ、たうかうのちんすにこれやたい見やうえん
 きをんやをさ、あうてい六十よさうたいせうのしよえむをとあへ申
 右事れゆへん、えんさいくしとの、これなうと、たやれこけちれち、あ
 やうにゆけられ候も、又々公事にゆけ候日ても、畢竟大くしとのをん事、を
 らくろをもたも日よりゆるさんおのるこんに候えんともたも日候へ、か
 みくんとんれかみく、のをち、これなうか見ニあうりかふり候へ、

承元二年十月廿二日

宇治花押

三月十八日
 日惠良惟
 武起請文
 寫誠ヲ誓

せんとのふるまひの御めんかうふるへく候、
 一きやうこうにおき候て、それと候ても人をもても、いさうふちうをら
 くろのきあるましく候、
 一きよひをそむき申ましく候、
 一かやうに申入候うゑ、さうかいをもちい申ましく候、うさ給る事候へ、
 いそきく、申入候へく候、もしこのてういゆり申入候へ、大さやうえ
 んの御をゆをまかりうふるへく候、よてせいもんの状くさんのと、
 三月十八日
 惟武花押

應永十五年三月
 日字治惟
 朝起請文
 寫弟寄合
 兄弟寄合
 ツテ文書
 フテ文書
 渡ス惟郷ニ

一自然無心元子細等申仁候者、えんそ致かへ見す、申候口をさきとて、き
 うめいあるへく候間、は事にさんけんろけんあら、めんく、申談、さいく
 候、

阿蘇家文書下

包あるへく候、もこの条偽申候者、惣日本六十余州神祇冥道、殊當國守護神阿蘇十二所大明神、甲佐三宮大明神の御罰おはかりうふ候へく候、仍起請文如件、

應永十四年亥五月三日

惟朝花押

(南坂梨) 小太郎ニ御をいふん候へき田地や(しき)ちうもん

一町一反

四反二丈

二反三丈

五反

六反

以上三十反

やまきのふん

一所

一所

中和のこれよりく田地一丁四反これあり
のさとの内まぐりのむら

以上二ヶ所

一丁

一所

けくうまち

とくさけの 長野六郎太郎

まかまきかかしかかう小二郎ニ御をいふん候へき田地屋敷ちうもん
(用) 作(分) しようさくふんの事

二丁二反

九反

七反

以上三丁八反

(姓) 百さうやまきのふん

一所 かきのきこれにけく田地

二丁一反一丈これあり

(野里分) のさとのふん

一所 たきまけ

一所 ちらきの

一所 ありに
以上三ヶ所

永享十二年四月十日 御教書請以下條々手日記 阿蘇家文書上 第二六二號
(年 月 日 未 詳) 健軍社文書預ヶ狀寫 阿蘇家文書上 第七二號

建武二年
四月十二日
家請入

(再拜) さいをい

きて申候き玄やうもんの事

右、くわんを、もーともー候て、このふなたう一人もかくー申候を、
上(梵)やんでん(天)ぞい(帝)玄(釋)やく(釋)たをー(本)決(重復)まいらせ(本)まいらせ(本)候て、日本ちんすてん(鎮守天)せ
う(大)たい(神)玄(賀)ん(茂)か(下)も(上)け(上)玄(稻)や(荷)う(祇)いな(園)な(日)き(吉)たん(三)ひ(王)よ(熊)い(野)三(權)王(現)く(安)ま(樂)の(安)こ(樂)けん(安)あん(樂)ら
く(寺)て(天)ん(滿)ま(天)んでん(神)玄(神)ん(神)へ(當)ー(國)て(造)を(大)た(明)う(神)お(部)く(類)の(眷)ち(御)ん(御)す(御)あ(御)り(御)か(御)う(御)さ(御)た(御)け(御)た(御)け(御)や(御)ふ(御)
ち(藤)さ(崎)き(山)こと(上)に(國)を(造)た(大)う(明)三(神)玄(部)や(類)う(眷)れ(御)お(御)く(御)さ(御)う(御)たい(御)さ(御)や(御)う(御)玄(御)ん(御)の(御)御(御)ふ(御)る(御)い(御)く(御)る(御)
そ(罰)く(犬)、そ(塚)う(墓)て(墓)を(墓)日本六十よ玄ゆう(墓)れた(墓)いた(墓)い(墓)せ(墓)う(墓)の(墓)玄(墓)ん(墓)き(墓)、そ(墓)や(墓)う(墓)た(墓)う(墓)れ(墓)お(墓)ち(墓)、い(墓)ぬ(墓)り(墓)う(墓)に(墓)う(墓)か(墓)八万三千(墓)れ(墓)け(墓)の(墓)あ(墓)か(墓)こと(墓)に(墓)は(墓)う(墓)り(墓)か(墓)ふ(墓)る(墓)へ(墓)く(墓)候(墓)、よ(墓)て(墓)き(墓)

熊野權現
安樂寺天
滿天神

阿蘇山
國造大明
神

玄やうもんの玄やうくたんのこと、

建武二年 五月十二日

いぬりう入道花押

一御相續之事

惟朝 惟信 惟勝 愛徳丸

よ(書)あ(文)ひ(二)申候て、惟郷ニ御文書おわ(文)さ(二)し申候あ(文)ひ(二)さ(二)、(二)それと玄て人々い
かやうに申候とも、よ(書)あ(文)ひ(二)申候て可申披候、

一此内自然於御兄弟の御中、無心元事候者、めん(祇)茂もて、玄んそ(祇)茂かへ(祇)見す、
その主お申候て、よ(書)あ(文)ひ(二)申候て、事茂さ(祇)よ(祇)め申へく候、

惣日本余州大小神祇冥道、殊仁當國守護阿蘇十二宮大明神、甲佐三宮大明神
の御罰おめん(祇)の身上(祇)は(祇)う(祇)りか(祇)う(祇)ふ(祇)候へく候、仍起請文如件、

應永十四年 丁亥五月三日

愛徳丸
惟信花押

末脱セシ興上包惟朝

應永十四年
五月三日
惟郷ニ文
書ヲ讓ル

應永廿六年五月廿六日
北外梨二
惟照名連
署九請文
寫起請文

再拜々々天罰起請文之事

右、元ハ當社の御祭禮不可有懈怠条々事

一 御祭禮役田乍持申、相當候する御祭不可闕申事

祭禮役田ノ給人御祭ノ役ヲ闕ケバ所職關給分ヲ沒ス

一 於給人中、自然御祭於可被闕申人者、縦親子兄弟、又者雖爲他人、可申上候之間、依其各所職給分雖被召上候、不可異義申事

御祭足

一 御祭足之事、如年々收納土貢、無懈怠可勤仕申候、聊雖少分候、不可抑留候事

神事社役

一 或社職之内、或給分自所分可收申候、御米足之事、不可未進事

一 於御神事社役等者、任先例舊法ニ可言上仕候、更々不可存新儀事

一 於社家人々、自然御祭被闕申候者、無隱可申上候之間、於給人無沙汰子細候する時、自社家被申候共、不可有遺恨候事

御嶽ニ運上ノ供物社殿ノ修理造營

一 御嶽運上可申庄内供物等事、任舊例可致其沙汰事

一 御社其外之修理御造榮事

不
役田於知行輩者、各有無沙汰事

北御宮四所大明神

右、於此条々若令違犯者、

惣日本六十余州大小神祇冥道、殊者阿蘇十二宮大明神、北御宮四所大明神、御罰各可罷蒙身上候、仍如件、

應永卅年五月廿六日

板梨子筑前守惟照花押

早幸^(奈)良治部少輔惟憲同

小倉美濃守惟次同

小嶋五郎三郎家守同

野中出雲守經次同

今村隼人允家秀同

阿蘇品下野守宗氏同

瀬田彦三郎宗光同

井手長門入道道清同

今村神五郎村經同

三宮近江守胤光同

先二大夫愛得經則同
 先二大夫乙房經德同
 横田孫房經賴同
 今村入道宗光同
 今村太郎家俊同
 大戸孫太郎經景同
 同 塩一丸同
 近珎子助二郎朝成同
 三ヶ嶋弥八經通同
 擬大宮司殊三郎經有同
 倉原犬房丸同
 湯浦九郎三郎同
 岩下增章經家同
 同 三郎經勝同
 小塚増童經清同

小里將監入道々漢同
 今村六郎二郎高家同
 今村太郎四郎宗家同
 久家百熊丸同

天正四月十八日
 阿菴家文書起

惟賢阿菴
 惟前相良
 義陽二賴
 家ニ復歸

惟賢罪ヲ
 謝シ惟光
 誓ニ服從ヲ

惟賢薩摩
 ニ逗留ス

阿菴神領
 内ニ移居

起請文

一世上不慮之成立ニ付而壽命之危を爲延御暇乞不申如遠國罷越候事心外
 候然者先年御神慮之所深被存取惟前相良義陽談合候て以宗運致披露
 阿菴家へ歸伏候事等ニ至子と孫とまで非可致忘却事候拙子存分弥其分
 候然處乙酉年從此方角打入之時分様躰我も人も夢中之様候うゑ風
 夢覺く令驚申候自今以後何篇祖母様（阿菴惟光）光さぬ御下知之まゝるへ
 く候

一某遠國（薩摩）ニ逗留仕候以御神慮到來惟光様世ニ御立之時者悴家ニ無其
 紛儀候他家之栖居万事心苦敷事迄候家之名を失ハ一と存候之条自然之
 時者被召出御神領之内ニ外聞實儀可然様ニ被召置候者自他國之覺後可

惟賢島津
家ニ對シ
惟光ノ爲
ニ盡力ス

惟賢ハ祖
母并惟光
遵フ下知
ニ

九州惣廟
宇佐八幡
氏神阿蘇
上宮三社
下宮十二
宮本宮北

然候（變）さるゝ、さも候ハ、主人共親共可奉馭外不可有他心候事
 一世中之轉反（薩摩）如反掌候之条、万一從此國其國分別之時者、何さ多拙子抛萬事
 相調、御神領如前々、惟光御格護候之様ニ申拵、御奉公可申候、其變事あらば
 候者、火下水底までも、光公御同前ニ可爲成立候事
 一 嫁娘之義ニ付而、童約束之事共候、向後於致首尾ハ、御奉公忠貞可抽余人
 候、兎角後吉凶共ニ光公奉守御身躰、可仰神慮候事
 一 萬事ニ付キ、祖母さ多光さ多御下知之外、不可致余之申事ニ同心候、阿蘇家
 者余家ニ相替候、御 神慮無純熟事ハ、一圓不事成儀眼前ニ候之条、怖入候、
 若此ケ条於僞申候者、
 神文野牛王也
 奉始上者、梵天、帝釋、四大天王、三界所有之天王、天主、日月五星諸宿曜等、下者堅
 牢地神、内界外界之龍王、竜衆、殊者王城、鎮主、賀茂、下上、祇園、稻荷、松尾、平、熊野、
 金峯山王子眷屬、山王三七和光、愛宕權現、別者九州惣廟宇佐八幡、氏神阿蘇
 上宮三社、下宮十二社、本社、北宮、甲佐、健軍、郡浦、天滿天神、御照覽、向後此等之
 箇條於僞申者、神罰冥罰罷蒙身上、子々孫々現世ニ者、受白黒之二病、來世ニ
 者可墮在無間者也、仍起請文如件、

天正十八年 庚寅 卯月

新里 宇治惟賢花押

惟光様 人々御中

天罰起請文

右、元者

惟賢御 神文之上者、爲私雖不及言上候、無二之意分、以法（寶）印裏申上候、
 一 至 惟光様相應之御奉公、可致當末之事
 一 惟賢氣任之儀出來之時者、一篇ニ光様仁可抽忠貞之事
 一 世上如何躰之轉反（變）付而山野之末堪忍仕候共、一方ニ 光様可奉守主人之
 事
 右之條々於僞者、

梵天、帝釋、四大天王、日月、五星、諸宿曜等、殊者王城諸神、賀茂下上、祇園、稻荷、松
 尾、平野、山王七社、王子眷屬、愛宕、鞍馬、別九州惣廟宇佐八幡、當國守護阿蘇上
 宮三社、下宮十二社、本社、北宮、甲佐、健軍、郡浦、天滿天神、御知見、當末共此箇條

天正十八年五月廿八日、竹崎長三、秀外、起請、文寫、惟光ニ奉、公ヲ抽ヅ、惟賢復歸、惟光ノ忠節、シ、盡ス、世ノ上、ト、主、人、ト、仰

阿蘇上宮
三社十二
社下宮十二

於虛言者、神罰冥罰罷蒙身上、子と孫と、現世ニ者受白黒二病、末世ニ者可墮
無間、仍起請文如件、

天正十八庚寅
五月廿日

竹崎長門入道

長秀花押

西源介

惟貢花押

竹崎与左衛門尉

惟廉同

市下帶刀允

惟兵同

仁田水長門守殿

於阿菴御嶽請文案

右、元者

- 一 神事社役等不可背先例事
- 一 御相續候間、對^(阿菴)惟忠申無他事可爲一味同心事

竹原惟貞
惠良惟楯
連良惟楯
案惟楯
阿菴惟楯
ベニ同
心ス

和談成立
以テ兼ナ
シモテ
疎意ナ

- 一 今度和談目出存候間、對惟兼様申候ても不可存疎略事
- 一 自然誰々より雖被語候、不可承引候、則可申事
- 一 於背御意候者、不申案内候て、拜領之所と不可宿借事
- 一 若荒說之時者、無腹藏可申承事

竹原

惟貞判

惠良

惟楯

○コノ次ニ、以上載スルトコロノ文書ニ見ユル花押ヲ寫シタリ、今便宜之
ヲ卷末ニ収ム、宜シク參看スマシ、

〔阿蘇文書寫 第十五〕

規式事

○コノ文書以下二通、疑フベキ、
照アレドモ、姑クコ、ニ收ム、キ

永享三年正月九日
規式阿蘇宮寫
并末社寫
法式末社寫
末社寫
阿蘇宮寫
支配宮寫
ベシタ宮寫
ルノハ

- 一 阿蘇宮山并末社之法式迄、緣記舊記爲一本宛、從往古阿蘇宮有之所也、至末世、宮外謀書写本有之者、速可致燒失事
- 一 阿蘇宮者、因爲本社、法式惣阿蘇以下至末社寺迄、依阿蘇宮可爲支配事
- 一 神事祭禮出仕之宮人衆徒諸役人等、因自由闕間敷事
- 一 神殿拜殿祈禱殿廻廊鳥居已下、依同山至末社寺迄、依本社盡美麗、或大殿新立仕間敷事
- 一 同山已下至末社寺迄、於致新儀企者、本社可任指圖事
- 右者、定古法也、於永代可相守之狀如件、

永享三年正月十九日

阿蘇大宮司宇治朝臣惟郷

名ノ裏ニ花押

定規式事

永享三年六月十日
規式阿蘇社
六十歲以上

- 一 神事御祈禱社役不可解怠事
- 一 山上參詣道者外者、十歲以後六十未滿之女性、衆徒行者各々住坊仁不可宿

下ノ女
住坊ニ宿
スノラズ
山ノ法式
寺社奉
山入峯
山伏

置事

- 一 山之法式不乱、定置寺社奉行共迄、諸事可相尋事
- 一 入峯自今以後無怠、國家繁榮可爲丹祈也、山伏者衆徒雖爲寺中、入峯其外行者可爲支配事
- 一 科人於有之者、院內仁不隱置、寺社奉行共迄可申事
- 右、各々衆徒行者等仁可申付所如件、

永享三年辛亥年六月十日

太宮司

惟郷花押

村山源三郎殿

應永廿八年三月廿八日
惟郷阿蘇
權大宮司
職ノ安堵

今度被致忠節候間、權太宮司職事、知行不可有相違候、但彼職之事者、神事社役等、無懈怠致沙汰、可有知行也、若被背先例候者、堅可致其沙汰之狀如件、

應永廿八年三月廿五日

惟郷花押

阿蘇一大夫殿

阿蘇一大夫
文正十一年正月十一日
惟郷阿蘇
寫家證狀

神領嗣目之儀、公方ニ言上候處、不可有相違之旨、所被仰下寶也、然上者、御嶽

阿菴御嶽
領社家領
供僧免田
掛持ノ分

領社家領供僧免田掛持之分衆徒へ打渡候へと申付之、弥神事祭禮社役等、
無緩可被沙汰所如件、

文明十一年正月廿五日

惟家花押

權大宮司殿

文明十五年
二月廿五日
阿菴
惟家
證狀
勸力
供僧

勤力供僧之事、權大宮司播戶守申子細候間、肥前公下向之間遣候、寺役社役公
役等之事、無懈怠可勤候、仍爲後日狀如件、

文明十五年 癸卯 二月廿二日

惟家花押

權大宮司播戶守殿

右折等也當所裏ノ末ニアル也、

權大宮司
播磨守
文明十六
年三月廿
八日阿菴
惟忠書狀
寫一
阿菴一家
譜代ノ人
々々惟忠
ヲ一
味同心
權大宮司
并年預職

又 御神事祭禮等、如舊例□弥可被致忠節候、
今度弓矢我々無誤候處、重朝、惟歲、惟家より不快候、無是非候、當家一家譜代人
々、我等不可捨之由、一味同心ニ被申候間、即如所存候、大慶候、仍權大宮司新左
衛門、此方忘重恩罷退候哉、然ハ權大宮司職年預職、如代々貴方知行不可有相

ノ安堵

違候、今度此方以同心現形候間、如此申出候、恐々謹言、

三月廿八日

惟忠花押

文明十六年 辰甲

權大宮司播戶殿

文明十八
年十二月
廿三日阿
菴惟憲證
狀寫惟憲
權大宮司
能世ノ滿
願寺救照
院ニ入レ
返實ノ請

伯父權大宮司能世之代、池田八段之事、滿願寺救照院ニ爲質券、被進置候之条、
面々可請返之由、雖被申候、滿願寺當別當宥弁、菟角難澁候、當時弓矢時節候、諸
篇無爲之儀可然候間、能世、能安如代、先以被指置候者、闕所出來之時、一方ニ代
所可申談之由、申候之處、領掌候、馮敷存候、於已後不可有等閑之狀如件、

文明十八年 丙午 十二月廿三日

惟憲花押

權大宮司殿

長享三年
五月十日
阿菴惟
日憲證狀
池田

就池田之事、滿願寺別當被申子細候間、先以無爲之儀可然由申候處、被任此方
義候条、馮敷悅喜申候、其後者可然依無闕所、兩方ニ無申出子細候、非忘却候、闕

所出來之時者、可申談候、御神事等之事、弥馭存候、委細尙自兩人可被申候、恐々謹言、

長亭（守）三年巳酉
五月十四日

惟憲花押

權大宮司殿

明應三年八月
三日阿菴下
日阿菴下
三阿菴下
年阿菴下
應阿菴下
三阿菴下
年阿菴下

阿菴下宮社福樂供僧職之事、半供子息宮童丸知行不可有相違候、神事祭禮任先規可被勤狀如件、

明應三年寅申
三月十八日

惟乘 巳上表

權大宮司殿 裏ノ末

永正四年八月
三日阿菴下
年阿菴下
正阿菴下
四阿菴下
年阿菴下
八阿菴下
月阿菴下
三阿菴下
日阿菴下

淨土寺下原檢斷之事、衆徒就訴、如前々所免之也、弥神事社役之時者、其元山上兩所相交供僧拾五人、之員數不闕様、何處可被沙汰所如件、

永正四年八月三日

惟豐花押

權大宮司殿

永正三年十二月
三日阿菴下
年阿菴下
正阿菴下
三阿菴下
年阿菴下
十阿菴下
二阿菴下
月阿菴下
三阿菴下
日阿菴下

加冠名字之夏

權太宮司治部大輔能憲

永正十三年丙子十二月吉日

阿菴三社大宮司宇治惟豐花押

大永三年十一月
廿三日阿菴下
年阿菴下
永阿菴下
三阿菴下
年阿菴下
一阿菴下
月阿菴下
廿阿菴下
三阿菴下
日阿菴下

近年依慮外之儀相隔候、無是非候、然者、瀬田尾取向候砌、度々寄々心底之趣申遣候、納得之由、自去方被申候、最簡要候、同者早々至現形者、代々筋目不可有相違候、恐々謹言、

太永三年（守）のひつ、
霜月廿一日

惟豐

權大宮司殿

大永三年十月
三日阿菴下
年阿菴下
永阿菴下
三阿菴下
年阿菴下
十阿菴下
月阿菴下
三阿菴下
日阿菴下

權大宮司
ニ本職ノ
安堵ヲ告
促ス

前日申旨候キ、納得誠令悦喜候、同者急度現形簡要候、本職等之事、不可有相違候、如此之儀、延引之時者、いゝ候、無申存候、恐々謹言、
大永四年きのえさる正月十三日
惟豊花押

權大宮司殿

土包權大宮司殿

惟豊

大永四年
二月十四日
日阿蘇惟
豐書狀寫
權大宮司
ノ現形

爲連々申候、首尾昨夜至其境現形候哉、尤肝要候、去陣中以來、豊州老中入魂之次第、定不可有其隱候、猶從年行所可申候、恐々謹言、

二月十四日

惟豊花押

(大)大永四年きのえ

權大宮司殿

大永四年
十月十八日
日阿蘇惟
豐書狀寫
南郡ノ退
治

去年以來任調法之辻、去春現形、誠神妙之至候、社職安堵之旨、當日雖無餘儀候、安藝守打替之事、依少所難澁之条、于今延引、聊非疎畧候、然者、南郡退治取向候間、彼道遣不然之候、必弓箭以成就之上、可有落着候、其間事御堪忍、弥可爲忠節

候、恐々謹言、

大永四年甲

十月十八日

惟豊花押

權大宮司殿

六月廿三日
日阿蘇惟
豐書狀寫

歸住以後、以使者此等之祝儀可申候處、方々躰依取亂候、無其分候、曾非由斷候、其方儀旁令推量候、弥堪忍、悦喜可申候、委細松木藏人助可達候、恐々謹言、

六月廿三日

惟豊花押

權大宮司殿

帶刀殿

豊州立柄、悉屬靜謐候、尤可然候、併當家治世之基候、被添心候案申候、仍進退落着之儀、得其意候、今日入田へ細々申遣候、返事到來之時、可申候、恐々謹言、

卯月廿七日

惟豊花押

權大宮司殿

四月廿七日
日阿蘇惟
豐書狀寫
豊州ノ立
柄

三月六日
阿菴惟豐
書狀寫
金凝宮ノ
奇瑞ノ

三五二
阿菴家文書下
金凝之御宮御奇瑞之由、前日注進候、驚入候、然者、急度被捧御法味簡要候、其謂
從年行所可被申候、恐々謹言、

三月六日

惟豐花押

權大宮司殿

一大夫殿

七月廿七
日阿菴
豐書狀
權大宮
等ノ小
ノ軍功
褒ス物

先日方角手仕之砌、小者共被疵之由候、誠粉骨之至、不及申候、前日使僧指遣候、
其刻可令申候處、然々無存知之故、菟角不申候、非心疎候、益々働時分者、可預御
馳走之段、無申計候、恐々謹言、

七月廿七日

惟豐花押

權大宮司殿

小陣越前守殿

文明十八日
十年八月
文菴惟忠
阿菴下
塔狀寫
樂坊山
相續ノ

阿菴山新樂坊職事、任先師相續旨、居住事不可有相違候、仍爲後日狀如件、

文明十六甲辰十二月十八日

惟忠花押

肥前公殿

裏ノ端末 已下三通折紙

文明十八日
十年八月
文菴惟忠
阿菴下
塔狀寫
樂坊山
相續ノ

阿菴下宮社勤力供僧職事、任先師之相續旨、知行不可有相違候、弥勤行等無懈
怠可被勤也、仍爲後日狀如件、

文明十六甲辰十二月十八日

惟忠花押

肥前公殿

文明十八日
十年八月
文菴惟忠
阿菴下
塔狀寫
樂坊山
相續ノ

阿菴下宮社供僧職事、任先師之相續旨、御給候、目出候、仍爲後日狀如件、

文明十六甲辰十二月十八日

惟憲(花押)

肥前殿

丹波守

文明十八年七月十八日
阿蘇家
惟藤氏
寫藤狀
健軍宮御
供取次第ノ

五月廿日
阿蘇家
惟藤氏
寫藤狀
御田植ノ
供米

男成善左
衛門尉

阿蘇家文書下

就健軍宮御供取次之次第、相並神官權官申旨、理運左右之條、仰
御神慮、任御
鬪神官可取次也、此外神夏社役等事、如(阿蘇)惟鄉以來、可勲仕之、若背此法度之趣、先
例違亂之族者、可有其成敗之者也、仍爲後日之狀如件、

文明十八年 丙午七月十八日

宇治朝臣惟藤花押

健軍社家中

就御田殖供米之儀、近年六借敷候條、直被召次候、非例之儀、誠如何ニ候、然者、池
田事、從滿願寺格護故と申候間、被仰斷候之處、御先祖能世代、被置質物、其後寄
進證文、惟郷様御裏判御進上之條、爲御披見被遣候、此時者至彼寺重々難被
仰候間、如前々御分別肝要之由、蒙仰候、猶細々男成善左衛門尉可達候、心事、恐
々謹言、

五月廿日

惟玄花押

村山刑部少輔
惟益同

權大宮司殿

西彈正忠

惟充同

高森伊豆守

惟員同

(小陣)
惟住同

追而そらきその、村同あひまうその田地五反三丈被遣候、

就此方之時宜、兩度御懇承候、畏入存候、仍池田之打替候事御申候間、致披露候
之條、水口村爲打替被遣候、弥御祭禮等、無懈怠之様、御催促肝要候、萬吉、恐々謹
言、

明應三年きのえに
二月廿四日

(村山)
惟貞花押

權大宮司殿

(竹崎)
惟滿同

惟像同

就池田之儀、兩度申入候之處、御懇答、怡悅之至候、御社領無其紛由、御入竄尤候、
雖然、累代自滿願寺格護之在所候、以御承伏被相付之、肝要存候、自然於當庄相

阿蘇文書之二

三五五

明應三年
二月廿四日
阿蘇家
惟藤氏
權大宮司
狀寫
池田ノ
村替
水口
與フ

天正十一年
四月十五日
阿蘇家
惟藤氏
日阿蘇氏
家阿蘇氏
狀寫
池田

故實

阿蘇家文書下

三五六

應御所用之剋者、爲兩人、故實等之儀、毛頭不可有緩候、爲御存知候、恐々謹言、

卯月五日
天正十一年癸未

(甲斐) 親英花押
惟尙同

權大宮司殿 御宿所

十月三日
阿蘇氏家
連署狀

滿願寺領
井手村
口能

返々、以時分出頭之由、可蒙仰候間、不及口能候、旁可被得其心候、至滿願寺
可被成御下知事、不可有御由斷候、以上、

就滿願寺領井手村堺之儀、前々記録、以御披見可令付憲法旨之由、被仰出也、御
口能之段、最候、雖然、被糺掟之儀候間、不可有私曲事候間、重而可令捧取張之由
候、誠肝要候、當時爰許御繁多之儀共候間、以時分、三人出頭之由、可蒙仰之由候、
御請之趣、慥被成 御上覽候、各故實無由斷事、御使可有傳達候、恐々謹言、

十月三日

惟續
惟種

權大宮司殿

御報

十月十一日
阿蘇氏家
連署狀

阿蘇社ノ
遷宮

西坊

依仰申候、

抑御社柱立之事、可爲來月十日候、御神躰御出之事ハ、如何にも可被撰吉日
候、以後日重而可申候、兼亦、前々被仰候御供人之事、各支度可有御奔走候、此狀
西坊へも可有見さ御申候、恐々謹言、

十月十一日

惟豐花押
惟義同

右二枚重上書

中司御中

裏 松崎伊賀守

高森 十郎

右、此本書ハ、松崎卯平次先祖之書翰ニ付、依令懇望、贈遣之、明和七
年庚寅五月朔日也、

五月二日
阿蘇氏家
連署狀

關職ノ事、諸神の祝方申され候間、被遣候、御供田の事ハ、適々種子をおろされ

阿蘇文書之二

三五七

候間、作半ふるへく候、去年の御うりの事にて候程に、せうそく參て候、當年の御うりかく候、免田の事も御まゝ候へく候、恐々謹言、

五月二日

裏
權大宮司殿
進之候

惟元花押
惟豐同

高森
松崎

五月廿四日
阿蘇家
連署
日阿蘇氏
家臣連署
狀寫ノ
御出植ノ
神米ノ

就御田殖御神米之事、言上之趣、具致披露候、御祭禮進之候事候之条、別雖被仰出候、難成事候之間、當年之事者、從上可有御才弁之由候、最可然候、以此上御祭禮、如舊例可目出候、來年之事者、不可有如此候、如何様可被仰談之由、上意候、爲御存知候、恐々謹言、

五月廿四日

惟玄花押
惟住同

權大宮司殿
御報

(村山)
惟益同
惟岑同

三月廿二日
日阿蘇氏
家臣連署
狀寫ノ御
勅使ノ御
引物ノ御
一段ニ
錢五文ノ
一段

就 勅使御下向、種々御引物等、先以被成御分別候、兼所々段錢御馳走候者、可有御悦喜之由候、然者、一段ニ十五文切ふるへく候、被得其心、可然候、今度者神講(免)面田、無殘所堅固可被相調事肝要候、爲存知候、奉行衆急度可被指出候、不可有御由斷候、恐々謹言、

(天文十三年)
三月廿二日

惟充花押
惟民同
親成同
惟久同

權大宮司殿
四大夫殿
十祝殿

西彈正忠

村山宮内少輔
甲斐左近將監
仁田水出雲守

十五日阿蘇
氏家臣連
署狀寫
一和尙供
僧代ノ事

又御檢見早々事行候尤日出候、

一和尙供僧代之事、先度委細雖承候、旁取乱候之条、御返事不申候、重而御狀候
間、請 上意令申候、來十九日佛名會よて候、彼供僧代て脱カ可被勤方御定候、彼御法事、相
由承候、得其心候、先以其様御了簡候て、彼供僧代可被勤方御定候、彼御法事、相
闕候ハぬ様ニ御調法、可日出候、供僧免之事ハ、御釵之斷已後、可被仰定候、爲御
心得申候、恐々敬白、

十二月十五日

惟貞花押

惟滿花押

權大宮司殿
御報

村山美濃守
竹崎筑前守

六月廿六日
真村山惟
阿蘇家當
主ノ登山
中ヨリ衆
歸ス

猶々、人々手跡判之事共不紛候哉、此上ニ不可有御不審存候、

就 當上様御登山、衆中被任 上意屬無爲候、千秋萬歲候、祝着察存候、仍一日
以厨家方、從惟弘之書狀等進候、但自彼方々惟弘へ被進候、依無狀候、少々御不
審之由共承及候間、北坂梨方より惠良方同名越前守へ遣候狀、爲御披見進候、
以□悉皆可披候哉、爲後日候之間、各御披見肝要候、其後此方へ可返給候、御領
中所々方々へ披見之通、可蒙仰候、此便ニ可給候、恐々敬白、

六月廿六日

惟貞花押

權大宮司殿

今村殿

二大夫殿

御宿所

村山美濃守

五月廿三日
真村山惟
日村山惟
書狀寫

尙々、幸藏坊既御請文共候ハ、御めより、その事、人々存知之前候哉、

如御意一日御參上、長々御逗留、依公用乍早晚無沙汰候、所存之外候、御懇ニ示

阿蘇文書之二

三六一

經坊
幸藏坊

大德坊

半供僧

阿菴家文書下

三六二

給候、畏入候、抑經坊之事、幸藏坊御給之由、仰候哉、折節無存知候而、瀬田方へ相尋候、彼方被申候分者、經坊之事、上より無御計所候間、於于今も、上より可有御計事あるまゝ、き子細候間、經坊之事、幸藏坊へ被遣候とハ、不蒙仰由候、如此之虛言無勿躰事候、然者、以前自其被仰付ざる方可然候、殊大德坊古刑部御祈念共、憚被申候哉、於于今も、御懇ニ承由候、千万畏入候、御次之時ニ可得御意候、尙々、經坊事、上より無御進退在所候間、菟角不蒙仰候、可有御心得候、幸藏坊事、兄弟惟家之御供ニ候御歎候間、一日參候時も、上意相滯候つる、色々被申候間、御赦免候、左候而、愁訴被申上候間、半供僧被給候哉、其余者存知不申候、如此無正躰事被申候、誠如何、候、能々可被仰聞候、恐々謹言、

五月廿三日

惟貞花押

權大宮司殿

御報

上包同裏村山美濃守

十月廿日
仁田水惟
益書狀
小野ノ
年貢

御日記憶御使ニ相渡申候、爲御存知候、就小熊野御年貢之儀、古張公私爲御披見被差遣候、尤目出候、具以御上覽、被得其御心候之条、珍重候、諸給人中へも堅申達候、満足此事候、細碎御使可被

達候条、不及口能候、万吉、恐々謹言、

十月廿日

惟益花押

權大宮司殿

御報

上包同但トアリ
仁田水越前守

六月廿二日
惟書
日惟書
狀寫
石合方へ
ノ使者

尙々、今度御懇志之至、難申盡候、前日者石合方に御禮御使として罷出候、乍次申入候處、別而御丁寧之至、畏入候、殊石合方御會尺一段被添御心候、於私も御湧敷候、其謂具致披露候、定御禮可蒙仰候、旁期後喜候、恐々謹言、

六月廿二日

惟玄花押

權大宮司殿

御宿所

就御進退之儀、兩度用便書候、無參着候哉、不預御返事候、無御心元存候、於于今者、被任御本意、賢慮尤可然候、至入眼者、每事可申合候、聊不可存隔心候、猶期後信候、

十二月十日

親廉花押

阿菴文書之二

三六三

大永三年
十二月十日
入眼
廉書狀寫

大永三年みづのゝとの
權大宮司殿 御宿所

六月十六日
惟右書
狀寫
矢村祝方
大山寺

矢村祝方、大山寺親類故、相尋入魂之儀共候哉、道爲被承付被存肝心、自今以後、吉凶可申談旨候、其謂申入候之處、遮而御神名之一通仰聞、實儀大慶存知候、愚意之趣、以寶印悉顯心底候、今者無緣故、衆方へ隨其時申談、懼候、乍恐先祖以來、有一筋目儀候處、依若輩一途不申談事、不堪忍候、さてハ永々相尋得其意、聊も不審之儀共候者、尋合、即時相果候而、可申談候、猶諸慶重疊、直可申承候、恐々謹言、

六月十六日

惟右花押

權大宮司殿

參

御報

〔阿蘇文書寫 第十六〕

正平七年七月
日相模守
行時書狀
寫ノ來
惟時ノ
屬ヲ褒ス

初御方被參候、神妙候、其上者、當知行之社領、不可有子細候、依忠重恩賞可有候、一族以下同致軍忠者、恩賞可有候、一向於鎮西渡可申候、

正平四年七月十八日

相模守行時花押

阿蘇三社(惟時)大宮司殿

御方依被參候、(筑前)下座郡、(豐後)大佐井郷、子細不可有候、

正平四年七月十八日

相模守行時花押

阿蘇三社(惟時)大宮司殿

正平四年七月
日相模守
行時書狀
寫ノ來
筑前下座
郡豐後大
佐井郷ノ
安堵

(正平廿四年)十二月三日 名和顯興書狀寫

阿蘇家文書上 第一八五號

(正平廿四年)十二月三日 名和顯興書文寫

阿蘇家文書上 第一八四號

正平廿四年十二月一日 宇土道光請文寫

阿蘇家文書上 第一八三號

正平二年六月一日 賴時契約狀寫

阿蘇家文書上 第一一一號

○左ノ三通ハ、右賴時契約狀ト同文ニツキ省略シタル旨記載アリ、

阿蘇家文書下

正平二年六月一日	左中將尹房契約狀寫	阿蘇家文書上 第一一二號
正平二年六月一日	朝直契約狀寫	阿蘇家文書上 第一一〇號
正平二年六月一日	氏宗契約狀寫	阿蘇家文書上 第一〇九號
(年未詳)十月廿七日	田原政信請文寫	阿蘇家文書上 第一六五號
正平九年十二月七日	平行宗寄進狀寫	阿蘇家文書上 第一五一號

二月十二日 平行宗 書狀寫 三重 豐後 井田郷

豐後國三重郷事、若令相違候者、以井田郷爲彼代、可有御知行候、恐々謹言、

二月十二日

行宗花押

惠良筑後守殿

上包謹上

惠良筑後守殿

兵部大輔行宗

正平五年十月廿一日 芝原性虎去文寫

阿蘇家文書上 第一三八號

興國二年 四月廿二日 天皇綸旨 日向高知 案寫 尾三田井 安堵跡ノ

日向國高知尾三田井入道明覺跡、柴原又三郎入道性虎當知行不可有相違者、天氣如此、悉之、以狀、

五月八日 征西大將 軍宮令旨 案寫 三田井明 覺跡ノ充 芝原性虎 招約シ給

興國二年四月廿三日

右中辨在御判

參御方可致軍忠、今明於馳參者、三田井三郎入道跡、可被宛行也者、
(懷良親王) 征西將軍宮令旨如此、仍執如件、
(執達兼)

五月八日

勘解由次官 在御判
(五條賴元)

芝原又三郎入道館

右、一枚也、綸旨令旨ノ裏共ニ云、

於正文者、令所持候、御沙汰之時者、可令持參候、

正平五年十月廿一日

沙弥性虎花押

○コノ次ニ、以上載スルトコロノ文書ニ見ユル花押ヲ寫シタリ、今便宜之
ヲ卷末ニ收ム、宜シク參看スベシ、

〔阿菰文書寫 第十七〕

應永廿五年五月十五日
喜書狀
三日齋藤
寫鄉安堵
惟鄉進禮
御判ノ禮
物ヲ進ム
竹陰庵

如仰去年御判御拜領、目出存候、其子細自是申入度候之處、遮而御音信、恐悅無極候、就其上様御禮御申、先以目出存候御進物等、則備上覽候了、御機嫌可然候、其段竹陰庵可被申候歟、雖不甲斐候、京都事者、連々可示給候、此御音信、恐悅候、每事期後信候、恐々謹言、

(應永廿五年) 五月十三日

加賀守基喜花押

謹上

阿菰太宮司殿

御返報

應永廿五年五月十五日
喜書狀
三日齋藤
寫喜書狀

就阿菰大宮司御禮事、預貴札候、恐畏存候、上進物等則披露仕候了、上意殊目出候、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

(應永廿五年) 五月十三日

基喜花押

板倉美濃入道殿

應永廿四年五月十四日
喜書狀
十日齋藤
寫喜書狀

九州探題
阿菰大宮
司職ノ吹
塔ノ吹舉

九州奉行齋藤殿狀

就阿菰太宮司職安堵事、預御吹舉候、嚴密申沙汰仕候、此段能々可有御披露候、恐々謹言、

(應永廿四年) 後五月十六日

加賀守基喜花押

謹上

板倉美濃入道殿

探題奉行

應永廿四年五月十五日
喜書狀
十日齋藤
寫喜書狀

就阿菰太宮司職安堵事、預御吹舉候、嚴密令申沙汰候、委細之旨、竹陰庵主可被申候間、不一二候、恐々謹言、

(應永廿四年) 閏五月十六日

加賀守基喜花押

謹上

大友殿

貞治六年
五月廿五日
素心書狀
寫素心書狀

雖未申通候、依徹書記重縁之事候、初申入候、久不識居住候處、依漏檀方候、上洛之間、喜入候、抑公方御申事等、連々可承候、又大將下向之事、可爲急速候、多分山名衛門亮殿、御定候、委細書記可被申候也、恐々謹言、

(右殿) (師義) 十二月廿五日

素心花押

(惟村) 阿菰殿御中

幕府山名
州探題ニ
選定ス

上包謹上 阿蘇殿御中

素心狀

裏齋藤筑前入道狀
貞治七年二月十五日到來

應安元年十一月一日齋藤素心書狀寫

鎮西ノ沙汰延引

雖未申馴候、徹公和尚異于他存候間、啓案内候之處、預懇勸御返事候之条、恐悅存候、京都事雖不甲斐、敷候、可蒙仰候、不可存疎畧之儀候、鎮西御沙汰、于今延引候、雖然、御堪忍上裁殊感申給候、巨細和尚可有御演說候、仍省畧候也、恐々謹言、

十一月一日

沙弥素心花押

謹上

阿蘇殿

上包同下ノ條
應安元年十二月廿六日到來

應永二年十一月十五日齋藤素心書狀寫

阿蘇惟村ノ申請

九月十日御札、以此御僧并讚岐殿到來、條々委細拜見仕候了、抑九州之事、時剋到來、無是非次第候、如仰先年在國之時、以面拜蒙仰候、一条々、太畧運合申候、雖然、重堅可有御成敗之由、被仰定候之旨、目出存候、
一公方へ被進候御狀、奉行所へ付遣候、仍可申披露候之由、被申候、次御安堵之事、是又不可有子細候、殊更貴方様之御事、今までハ一切無御等閑之段、連々

今川了俊ノ職補下向
了俊惟村ノ歸國セシ

聖信惟村ニ至德二年ノ御判ヲ送ル

惟村安堵御判ノ充
所信駿河ニ下向ス

公方よても申上候、又惣之奉行中よても、於九州者、無二之御忠之由、披露申候了、此時分如此御申候之間、愚身此間申候事、相應之間、畏入候、其子細委彼御兩人申候、定可被申候歟、
一此便宜御安堵等之事、可申沙汰之處、探題駿河國拜領候て、昨日十四下向候、我々も可共仕候之由、自(義滿)御所蒙仰候之間、一兩日之間、可罷立候、所詮九州之事者、年内無余日、明春二月成候者、可有御沙汰之よて候、仍探題も其時分上洛可然と被蒙仰之間、長々面々御在京も御痛敷候、其上京都之不審共をも申候、ハハめ下申候、
一先年我々吉野陳より罷上候之時、蒙仰候、御安堵之事、申沙汰仕候て、至徳二年八月五日御安堵、并管領御施行、松田丹後守爲奉行申成候キ、其後ハ御無音、又我々下向之時分も、御座之堺無心元候、進候ハハする人うらも如何と存候て、于今不進候、仍此便宜御心安候之間、下進之候、隨分御芳志不忘申存候之間、於向後も不可存等閑候、

一今度被成候御安堵ニ、阿蘇三社太宮司殿へと可被成候之由承候、其段可申候、我々ハ既駿州へ下向仕候、縱暫雖在國仕候、愚息弥四郎男者、公方奉公之

氏神白山

者候之間、留置候、彼兩人懸御目候之間、諸事可被仰付候、堅申置候、尙々、此御安塔、目出候、御施行等如此被載候之間、無是非、此段可有御心得候、尙々、條々申度事共候へ共、今明罷立之間、計會仕候て、令省畧候、今度重可申入候、
一御判形之事、存知仕候、愚狀給候、恐悦候、自由之至候へ共、當社三社、殊氏神、白山も御照覽候へ、自元無等閑候之上、委細蒙仰問、殊更向後も不可有疎畧候、不被殘御意蒙仰候者、殊以畏入候、

一今度御注進御安塔以下事者、大禪門より被執申候、便宜之時者、此趣可有口説候、諸事期後信候、恐々謹言、

(應永二年)十一月十五日

沙弥聖信花押

謹上

阿蘇三社太宮司殿

上包

御返報

謹上 阿蘇三社大宮司殿

沙弥聖信

裏齋藤との、入道狀

至徳二年九月十一日
信齋藤聖寫

尙々、此条々御ひろうあるへく候、天神八幡、取分阿蘇太明神も御せうらん候へ、身のとうらんかんきよくかく申入候、

便宜悦令申候、抑上洛之後、不便宜得候て、不申入候条、背本意存候、京都へ御

聖信惟大村
ニ宮阿蘇
安塔御職ノ
郡肥後南
御沙汰判
御教書
案文ト
送ルヲ

聖信阿蘇
氏ノ京都
代官ヲ勤

時衆

申の条々申沙汰候て、御安塔并當國南郡の事落居候間、態使者をあへ候處、近日舟の便宜あるへく候、其時をまち候、先案文を愚身書候て、加判形を候て、兩通進之候、御安塔ハ御所(義滿)の御判よて候、南郡の事ハ管領(斯波義將)の御教書よて候、若此御文字わるく候ハ、重承候て、御所の御判よて申さ仕候へく候、先此事ハ御ひろうあるましく候、公方の御沙汰も、當御方の御事ハ、御忠さにとまき御事ハ候之間、御申の事ハ、(急)きんそくハ御沙汰あるへく候よ、内々御意よて候、愚身も御在所(急)めされて、おの、御ようういとうの事、可然所よて候よ、申上候程ハ、御心安事ハ、おほまめされて候間、御めんやくのいさり、我々までも畏入候、何と候ても、九州の事ハ、貴方の御力よて御沙汰あるへく候、連々申て候、内々御心得あるへく候、一身の事ハ、以面拜可申入候とく、うい、御ようハ立申事ハあるま候、京都よて公方様の事ハ、ういふん御代官を仕候へく候よ、申入候キ、於于今心中よさ、候間、何事よて候とも、く、御判を給候て、申沙汰仕候へく候、探題(了後)よりも同前あうら、貴方様御事不可有等閑儀由、く被申付候間、就公私候て、深御殿人の所存よて候、僧よても、時衆やう

筑前國ノ
阿蘇社領

いの人までも候へ、委御状をあそされ候て給候へく候、此御教書共をう
へく候へく候、

一筑前國御社領の事、いま不道行候より承及候、いにも秋月違儀を申候
らんと相存候、所詮此事ハ自私自利も探題へ申入る子細候、彼御吹擧をめさ
れ候て、御上あるへく候、御教書一通まで落居あるへく候、此事も御ひろ
の相構へあるましく候、さともかくも御大事の時分まで候間、大方ハ
探題の計まで候へとも、如此違儀事ハ、京都の爲御沙汰と、落居あるへく候
上ハ、所詮探題より御注進にあつうり候て、京都の御沙汰を仰被申候へと、
御ひろう候て、いそぎ京都へ御申候へく候、其下候て、道まで申さ仕候て、
御教書をとりのへ候へく候、此事ゆめへ御ひろうあるましく候、

一南都郡の事も、いにもふん玄やうを御よくかり候ぬと存候へとも、先公方
の御さゝ如此無等閑御沙汰候、又愚身も申さ仕る事まで候間、案文を
うつし進之候、此段をひそりに御ひろうあるへく候歟、

相良前頼
吉野ヨリ
九州惣奉
行ニ任セ
ラレシト
ノ説

一相良前頼近江守九州惣奉行之事、吉野より蒙仰之由、其聞候、仍宇土河尻邊に罷
越候てある、定御合戦あるへく候歟とて、公方様ハ御陣の事、無心元事よ

被仰候、雖然、貴方様の事、如此無二之儀御意御坐候間、子細候ハ、愚身在國
之時も、御意通委承候間、只今程の凶徒もてあつうりあるましく候より、申て
候程よ、さてハ御心やすく候より、公方様も内々御かんまで候、うまへてへ
一御ちうさく候て、弥御めひをうあるへく候、か様の事すいふん御代衆を
仕り候、うけうハきこしめしおよめるへく候、このふんよく御申ある
へく候、

京都ノ大
風水

一愚身上洛之時拜領之物、いま不到來候、此冬舟のひんきあるへく候、相構
へく候、申さ候て、とつけ給候へく候、當年ハ京都大風大水まで、いどやく
そんなう候程よ、在京候哉、可有御察候、此段よく御心得候て、御ひろ
あるへく候、万事のこ入存候、
一新足若博多邊へいされ候ハん事、かんきあるへく候ハ、米を拜領仕候
へく候、

博多

一今度上洛仕候て、少家をひとりつる事候、所詮面々貴方様の御合力をあ
おき申候、内々此事も御心得候て、可有御申候、尙々貴方の事、万事のこ入
存候、於身候て、又御殿人一人候とおぼえめさるへく候より、よく御申

あるへく候、

一尚々、それまでも聞しとく、らくゆひともおゝく候程よ、さやうの事ニ大宮
司殿も御玄ゆんくわいある事もあるへく候、是ハ又よそよりハ出来ま
しく候、さゝ我々をうをいちうより申出候へく候、うまへてふいの事とお
得しめし候へく候、若尚御ふ玄んも候ハ、程へさゞ申候へとも、探題所
存如此内々候よきこしめし候と、うけ給候て、私より探題へさつね申候
へく候、あけてもくれても、如此事無心元存候、乍恐探題の所存をも、又貴方
の御意をも存知申て候程よ、とうあき事ゆへニ、ふしきの物とも候て、申ニ
つきて御うらさも出来候ぬと、返々心くるしくあけうしく存候、うまへて
し、そうをい中より申出候ハん事を、御さゞに入らるましく候、
一御ゆるひの事、其後いろう、御定候らんと、うけ給さく候、如此条々返事よく
ハしくうけ給候て候よ、よくく御披露あるへく候、恐々謹言、

(至徳二年)
九月十一日

沙弥聖信花押

荒瀬入道

謹上

荒瀬入道殿

追申候、

足利義満
春日社ニ
詣ス

十月廿五
日小早川
常嘉書狀
寫
菊池兼朝
ノ出勢

十一月二
日小早川
常嘉書狀
寫
常嘉惟郷
ノ出津ヲ
止メシム

(義満)
御所南都へ八月廿八日御まいり候、(良基)(兼嗣)二条殿、近衛殿御同道候、今月二日、京都
へ御下向候、路次之間式、重探題へまゝ申候、さゝめて注文らへ、歟、重恐
々謹言、

自是申入候之處、御同心承候、恐悦候、

抑菊池(兼朝)方勢遣候之由承候、無勿躰候、折節菊池代官來候之間、堅申付候、巨細御
僧ニ申候、尚々、於身不可有等閑候、毎事期後信候、恐々謹言、

(應永廿九年)
十月廿五日

(小早川則平)
沙弥常嘉花押

謹上

阿蘇(惟郷)太宮司殿

御報

上包オナシ、

先日進狀候、又御使ニ委細御返事申候了、抑可有御出津之由、申候之處、聊御物
忿之由、承及候、とても御代官へ申候上ハ、不可有御出候、其子細探題よりも蒙
仰候、隨而被屬探題御手、弥々可被致御忠由、御狀を給候て、京都へ可注進仕候、
次菊池嗽々致沙汰候由承候、彼方へ堅申候、於身不可有等閑候、毎事期後信候、
恐々謹言、

阿蘇家文書下

(應永廿九年) 十一月二日

阿蘇太宮司殿

上包オナシ、裏ニ惟郷トアリ、

(則平) 常嘉花押

三七八

(應永卅一年) 三月廿八日

澁川義俊書狀寫

阿蘇家文書上 第二四六號

貞和四年七月廿五日

足利直義雜掌奉書

阿蘇家文書上 第一二一號

明德四年十月五日

阿蘇大宮司惟政申肥後國當社本神領所々并神用米等事任御教書之旨可被沙汰付惟政代若有子細者可被注申之狀如件

明德四年十月五日

(今川貞臣) 陸奥守花押

菊池肥後守殿

阿蘇郡条々明德三十一

明德五年三月廿一日

一神領社役輩事任先規自大宮司方可有其成敗仍令談合可致沙汰
一先規關東成敗地軍役輩事自當方可爲沙汰間此事宜任先規可致沙汰也
一參當方輩号本知行所事大宮司申談兩方申趣支證狀等可有注進依理非令

本知行所

成敗以其下可令遵行候其間ハ於相論地者大宮司方申談可點定也
一當郡內事一圓自公方可有成敗知行由依風聞太宮司方被歎申条尤其故候歟任先例每事可有沙汰也

花押

山内常陸介殿

山田伊賀守殿

阿蘇大宮司惟政代申肥後國鈎野日並村等事於社家分者沙汰付下地於惟政代可被執進請取之狀若有子細者可被注申之狀依仰執達如件

明德五年六月十九日

(今川貞臣) 陸奥守花押

菊池肥後守殿

(年未詳) 十二月三日

沙彌崇輝奉書寫

阿蘇家文書上 第二四三號

(應永廿九年) 六月十八日

定勝書狀寫

阿蘇家文書上 第二四一號

應永廿五年五月十三日

阿蘇大宮司惟郷進上料足

阿蘇家文書上 第二三六號

阿蘇文書之二

三七九

明德五年六月十九日

阿蘇大宮司惟政代申肥後國鈎野日並村等事於社家分者沙汰付下地於惟政代可被執進請取之狀若有子細者可被注申之狀依仰執達如件

菊池肥後守殿

(年未詳) 十二月三日

(應永廿九年) 六月十八日

應永廿五年五月十三日

阿蘇文書之二

應永五年五月十九日
家御教書
幕府小早川親著兼朝等退散ノ軍ヲ對陣

御教書案文
鎮西錯亂事、方々注進狀之趣、難被糺決者也、每事致穩便沙汰、可仰。上裁之處、或楯籠要害、或令出陣云々、甚不可然、所詮、所對陣軍勢等、悉令退散、各以代官不日可申披子細、就彼落居、可有成敗之旨、可被相觸親著兼朝等之由、所被仰下也、仍執達如件、

應永廿九年五月十六日

(高山滿家) 沙弥

小早河美作入道殿

○コノ次ニ、以上載スルトコロノ文書ニ見ユル花押ヲ寫シタリ、今便宜之ヲ卷末ニ收ム、宜シク參看スベシ、

〔阿蘇文書寫 第十八〕

さいをい

きて申き玄やうもんれ事

右、大宮司殿者、^(惣)うらわん^(官)乃御身ふてた^(候)は^(候)へ^(祝)は^(祝)う^(祝)里^(祝)の身とて

い^(光)を^(光)ろ^(光)か^(光)又^(光)思^(光)は^(光)ひ^(光)ら^(光)す^(光)へ^(光)き^(光)ふ^(光)て^(光)候^(光)を^(光)ぬ^(光)う^(光)へ^(光)事^(光)ニ^(光)み^(光)ゆ^(光)ふ^(光)さ^(光)よ^(光)と^(光)り^(光)候^(光)て^(光)い^(光)、

さ^(脱カ)よ^(脱カ)里^(脱カ)も^(脱カ)を^(脱カ)ろ^(脱カ)う^(脱カ)又^(脱カ)思^(脱カ)ひ^(脱カ)ら^(脱カ)せ^(脱カ)候^(脱カ)を^(脱カ)す^(脱カ)又^(脱カ)か^(脱カ)や^(脱カ)う^(脱カ)又^(脱カ)は^(脱カ)う^(脱カ)里^(脱カ)を^(脱カ)給^(脱カ)を^(脱カ)り^(脱カ)候^(脱カ)ぬ^(脱カ)れ^(脱カ)い^(脱カ)、

い^(脱カ)よ^(脱カ)御^(脱カ)を^(脱カ)ぬ^(脱カ)う^(脱カ)又^(脱カ)思^(脱カ)ひ^(脱カ)ら^(脱カ)せ^(脱カ)候^(脱カ)を^(脱カ)す^(脱カ)又^(脱カ)か^(脱カ)や^(脱カ)う^(脱カ)又^(脱カ)は^(脱カ)う^(脱カ)里^(脱カ)を^(脱カ)給^(脱カ)を^(脱カ)り^(脱カ)候^(脱カ)ぬ^(脱カ)れ^(脱カ)い^(脱カ)、

御^(脱カ)す^(脱カ)へ^(脱カ)の^(脱カ)よ^(脱カ)は^(脱カ)て^(脱カ)も^(脱カ)を^(脱カ)ろ^(脱カ)か^(脱カ)の^(脱カ)き^(脱カ)あ^(脱カ)る^(脱カ)は^(脱カ)い^(脱カ)く^(脱カ)候^(脱カ)、人^(脱カ)の^(脱カ)ひ^(脱カ)う^(脱カ)事^(脱カ)を^(脱カ)申^(脱カ)候^(脱カ)を^(脱カ)ん^(脱カ)ふ^(脱カ)ゆ^(脱カ)せ^(脱カ)候^(脱カ)ハ、

あ^(二宮)う^(二宮)き^(二宮)きて^(二宮)は^(二宮)ゆ^(二宮)る^(二宮)あ^(二宮)り^(二宮)十^(二宮)ふ^(二宮)く^(二宮)、き^(二宮)ゆ^(二宮)を^(二宮)ら^(二宮)七^(二宮)十^(二宮)よ^(二宮)り^(二宮)や^(二宮)む^(二宮)ら^(二宮)と^(二宮)う^(二宮)乃^(二宮)一^(二宮)よ^(二宮)大^(二宮)明^(二宮)神^(二宮)

之^(二宮)御^(二宮)を^(二宮)ち^(二宮)我^(二宮)、み^(二宮)ゆ^(二宮)ふ^(二宮)さ^(二宮)う^(二宮)身^(二宮)ふ^(二宮)か^(二宮)ふ^(二宮)り^(二宮)候^(二宮)へ^(二宮)、よ^(二宮)て^(二宮)き^(二宮)一^(二宮)や^(二宮)う^(二宮)も^(二宮)ん^(二宮)件^(二宮)こ^(二宮)と^(二宮)一^(二宮)、

文永五年九月廿二日

山部光房花押

光房祝職
ルニ補セラ

文永五年九月廿二日
山部光房起請文

文永五年九月廿二日
山部光房
文書起請

金凝祝

阿蘇家文書下
かゝははりて申あき候(當宮)きうくはをう望むねな望り、これより乃ちうきへ申候(金)もん時(問注)ももんちうをけうはけり候もんよ、みけふさほけて候(金)ハ、かあこりのをう望(祝)ハ、かきわさてかへるれいなと申候へとも、かのをう望をハ、先かへされはひらせ候へく候、よて後のき先よせうもんくさんれことし、
文永五年九月廿二日
山部光房花押

文永九年七月八日
山部光房
文書起請

やまへ乃けきよかまこまで申候、かなこ望乃けり望の事
くまいぬまるよあて給候へきむね、乃れき申候候もて、まうるへくもこれたあて給候ぬ、よてきいくのと、御こと、もとよ望たろく又思まいらせす候うゑ、これよ望のちハ、いよ、けきよかま、おん、にい、望候きいくとのきんきち乃御すゑまでも、いせちたろく又思まいらせ、おめい候おむきはいらすること、いせちあるへあらす候、も、これいけを望申候ハ、あふききてまける十二とんきい明神乃こをけ茂まり望うふるへき狀如件、
文永九年七月八日
くまいぬまる花押
やまへ乃けきよ同

文永九年七月八日

やまへ乃けきよ同

弘安六年十月十五日
山部光房
文書起請

くちこたへ
日本ノ鎮
守八幡大

さいをい、申請きまやうもんれ事
件乃元ハ、祝ハ、お大(宮司)くんま、御まんきいにてまきかいゐいらせ候事、せんれいハ、候うへ、なうけくにけねやすふたいてハ、たうとの、御事と申候を、おむき、御めいにきかいゐいらせ候ま、候、も、又おほせを、おむき候ハ、きとひ一れ祝はてゐりありて候とん、せうたいめされ候とん、ひと事ハ、も御くちこきへ申ま、候、も、これてう、いけり申候ハ、日本乃(鎮守)ちん(幡)八まん大(普)おさ(薩)り、きう國のちむ才あり十二宮きいさやうまんの御をけ、おう、てハ、六十よおれま、んきみやうきうの御をけかふ望候へき狀如件、
弘安六年十月十五日
やまへ乃けねや才花押

やまへ乃けねや才花押

正應二年九月廿三日
山部光房
文書起請

さいをい、申うくるきまやうもんれ事
みきくわんハ、たいさうま殿の御事をふちうをらるるにたもひまいらせ候もん人に、ろくけかまつるへからす候、ままてみと、てもたもふまま、候、も

阿蘇家文書之二

玄このてういゆを申候ハ、あふきたてまりるあふ十二とう大みやう玄ん
の御をゆを、やまへのむねなりクみのうへふ、まかりかうふるへき玄やうた
んのことし、正をう六ねん九月廿三日

二のもうまやまへの

むねなり花押

應永廿六年
五月廿六日
阿蘇社
日阿蘇社
祠官連署
起請文寫

祭禮役田

祭役ヲ闕
クモノ、
處罰

祭禮ノ料
足

再拜ノ天罰起請文事

右、元ハ當社御祭禮不可有懈怠条々事

一御祭禮役田乍持申、相當候する御祭不可闕申事

一於社家中、自然御祭於可被闕申人者、縦親子兄弟、又者雖爲他人、則可申上候

□依其咎所職雖被召上候、不可異義申事

一御祭足事、如年々收納土貢、無懈怠、可勤仕申候、聊雖少分候、不可抑留仕候事

一或社職之内或給分、自所々可收申候御米足之事、不可未進仕候事

一於御神事社役等者、任先例憲法可言上仕候、更々不可存新義候、

一於給人中、役田乍知行候、御祭禮無沙汰人々候者、可申上候之□於社家御祭

御嶽ニ運
上ノ供物
社殿ノ修
理造營

阿蘇十二
宮大明神
北御宮四
所大明神

可闕申候時者、自給人方被申上候共、不可有遺恨候事

一御嶽可運上申候庄内供物等事、任舊例可致其沙汰事

一御社其外之修理御造、榮之事、役田於知行輩者、各不可有□沙汰事

右、於此条々若令違犯者、

上者梵天、帝釋、四大天王、下者堅牢地神、惣日本六十余州大小神祇冥道、殊者

奉仰阿蘇十二宮大明神、北御宮四所大明神御部類眷屬御罰、各可罷蒙身上

候、仍起請文如件、

應永卅年五月廿六日

一 太夫 高經花押

二 大夫 宗世同

三 大夫 宗時同

四 大夫 宗忠同

五 大夫 宗重同

六 大夫 高治同

七 祝 高俊同

國造祝
金凝祝
諸神祝
擬大宮司
權擬大宮
天宮祝

右末ハ脱シタル歟、

八 祝 高光同
九 祝 宗秋同
十 祝 宗秀同
國造祝 宗親同
金凝祝 經遠同
年 預 宗通同
諸神祝 宗信同
擬大宮司 經定同
權擬大宮司 次愛同
天宮祝 忠時同

八月十四日
山部經
放生會
精進
金凝宮ノ
鑑

加様事令參候て可令申候之處、此御放生會精進仕候之間、御文よて令申候、憚存候、兼又、方々祝職事定候て、既宮尾四郎成國造候上者、次日於金凝宮御鑑者、權大宮司のもとに如元被返付候て、おれよて是より可給候之處、國造御鑑を左近入道殿後家臣御前ニ、二大夫申との候つるによて、たさへをうれ候之

早良

間、金凝宮御鑑を、其代こたさへをうれ候事、可然とも不覺候、されいと申候て、始終可有相違事候はず、人乃非例をもてたさへられ候へいとて、大宮司御方仁まいり候はんする御鑑をたしとめられ候事、不可然相存候、所詮、明日者御祭よて候、別の御使をもて、おめわさされはいらすへくや候らん、又國造金凝を宮尾四郎二の職をかへらるへきとに候はず、所詮、猶以金凝御鑑を御方こたしといはいらせ候はん、國造を子よて候ものこ給はり候て、御こくなんと國造の御宮よはいらすへくや候らん、いりさほにも候へ、別の御使候はずして、被歎^難候ぬと相存候、適明日大營御神事よ候、御をうらひ候はん、重々可然と相存候、隨て二大夫□承候者、下流庄屋臣御前早良ニ御立のとき、二大夫猶もまいり候て、可申訴訟望承候、別ニおれよてくるいかるまいき事よて也とも、同候者、御鑑を給候者、可然相存候、又大方に定かやうに次第、權大宮司被申候歟、仍恐々謹言、

八月十四日

山部經次花押

○充名ノトコロ、切取リテナシ、

文明十六年十月十一日

阿蘇下宮北宮經坊造物
用途進上折紙寫

阿蘇家文書上 第二九〇號

應永九年四月三日
應永九年四月十三日
應永九年四月十三日
應永九年四月十三日

讓与 先北宮祝能郷

肥後國阿蘇社領内權大宮司職事

右、彼職間事、所讓渡能郷也、有限恒例社役等、任先規無懈怠令勤仕、可知行者也、仍爲後日之狀如件、

應永九年四月十三日

權大宮司能繼花押

應永九年四月十三日
應永九年四月十三日
應永九年四月十三日
應永九年四月十三日

ゆはてわす金武名權大宮司と一はあつり職之間之事

右、任次第相傳旨、子息房丸も永代ゆはてりわす所、仍如件、

應永廿年八月十一日

能運花押

享德二年十二月十三日
享德二年十二月十三日
享德二年十二月十三日
享德二年十二月十三日

讓与 藏人少輔能安

肥後國阿蘇社領内權大宮司職同年預之事

右、彼職之間事、所讓渡能安也、有限恒例社役等、任先規無懈怠令勤仕、可知行者也、仍爲後日之狀如件、

享德二年十二月十三日

權大宮司能世花押

也、仍爲後日之狀如件、

讓与 加賀守能憲

肥後國阿蘇社領内權大宮司職同歲祢預職之事并北蘭村一町六反半、玖

珠郡之内遣水名辻尾尻村口蘭村

右、彼職所領間事、所讓渡能憲也、有限恒例社役公役等、任先規無懈怠令勤仕、可知行者也、仍爲後日之狀如件、

永正貳年六月一日

權大宮司 宇治能續花押

享祿五年四月二日 阿蘇權大宮司能憲外二 阿蘇家文書上 第三〇八號
享祿五年四月二日 阿蘇權大宮司能憲外二 阿蘇家文書上 第三〇七號

註進

鎮西肥後國正一位阿蘇大明神御寶池恠異事

阿蘇文書之二

嘉慶二年九月廿三日
嘉慶二年九月廿三日
嘉慶二年九月廿三日
嘉慶二年九月廿三日

永正二年六月一日
永正二年六月一日
永正二年六月一日
永正二年六月一日

ニ讓ル

阿菴大明神寶池ノ怪異ノ本地

上宮法施崎

阿菴家文書下

三九〇

右、當神者、忝尋本地本高、大慈大悲尊一十一面觀世音菩薩、論垂迹之廣(健)、龍命大明神九頭一身應化也、是則

天照皇太神 六代孫子 神武天皇第二王子也、振靈德於沙界、顯効驗於都鄙、凡一天照臨之尊神、九州無雙之大權也、依之天下重事欲出來時、則靈神先令顯現種々、惟異於御寶池給、仍前々奇瑞、惟異度々、註進不違記錄矣、

爰今年今月八日午時、上宮法施崎西渚流黃燠石上、仁、白鷺一羽下居留、但出來方知、三々日夜之間無飛去、是不思議瑞相也、所以者、何峯象補陁落山、而寶巖寶

石高聳巍々、池通阿耨達池、故慈雲如波浪、而白濱眇々、唯此砌飛翔者、尊神示現靈應許、全非衆鳥栖處也、何故白鷺遊戲當嶺耶、是則希有瑞、惟也、依之常住僧呂(但)、弥倍甚深法味、參詣道者、鎮捧渴仰禮奠、彼鳥及三々日、指南方相交雲霧而飛去訖、此等滿山衆徒見知之、粗令言上處也、若此条僞申者、

奉仰

阿菴十二宮大明神御罰各可身上罷蒙候、

嘉慶二年九月廿三日

阿菴山衆徒等

權少僧都永位花押

權少僧都幸清同

權律師義俊同

權律師契珍同

阿閣梨玄宣同

阿閣梨了秀同

阿閣梨俊賀同

阿閣梨惟慶同

阿閣梨了譽同

律師 有弁同

阿閣梨幸珍同

阿閣梨永睿同

阿閣梨俊存同

阿閣梨了良同

阿閣梨契圓同

阿閣梨了中同

阿閣梨憲舜同

阿闍梨契增同

至德四年閏五月日
阿蘇山衆徒等注進

註進

阿蘇大明神上宮ノ奇瑞

肥後國鎮守正一位阿蘇大明神上宮奇瑞事

右、阿蘇者、本地十一面現身說法之靈場、垂迹十二宮（健）磐龍命之藁祠也、峯湛八德之水、池壘五色之浪、仙嶺之山、既象補陀落山、何勞趣生身觀音於南海千里之中、應化之池、又通無熱惱池、孰強尋甘露靈水於西土万里之間、是則天照太神六代之孫子

法施崎ニ新穴出現

神武天皇第二之王子、惣一天照臨之尊神、別九州無雙大權也、爰自去五月廿五日、上宮法施崎中央新穴御出現、濁水砂石令涌沸、其高假令一丈有餘、爲躰如淤鯨鯢万里之波濤矣、同潤五月三日卯越俄新穴變火坑、自御甑黑煙火石指登蒼天、棚引未申方、其後連日白煙巍々、而無斷絕、譬白雲凝太虛似出山岳岫、追日增盛、以徃文永弘安御鳴動、中比建治曆應御神變、近來者正平文中之瑞相、不可過之歟、雖爲末代、吾神威光嚴重、而万民合掌、希代勝絕寶所也、仍令見知衆徒等、殆註進言上、若此条僞申候者、

文永弘安御鳴動、建治曆應御神變、正平文中瑞相

奉仰 當所十二宮大明神御討於各可罷蒙之狀如件、

至德三年潤五月 日

阿蘇山衆徒等

法印 俊 容花押

權律師永位代

權律師幸清同

權律師義俊同

阿闍梨玄宣同

阿闍梨了秀同

阿闍梨俊賀同

阿闍梨惟慶同

阿闍梨了譽同

權律師有弁同

大法師幸鎮同

阿闍梨俊存同

阿闍梨了良同

阿闍梨契圓同
 阿闍梨了中同
 阿闍梨憲舜同
 大法師契增同
 阿闍梨契金同

正平六年七月三日
 阿菴山衆徒等起請

敬白 猥規式誓文事

私法ヲ企テ守ル
 舊儀

舊儀事

神事祈禱ヲ怠ラズ

一 神事勤行御祈禱以下(懈)解怠之事、失本意候、于今以後、不怠可奉抽御家繁榮之丹祈事

寄進ノ寶物願文ヲ隱密ニスル事

一 從方々寄進之寶物願文等有之時者、寺社御奉行迄言上之所、是又令隱密事、非古(法カ)方候條、良刻(即)可致言上事

右僞於申上者、
 奉仰 阿菴十二宮大明神御罰、各可身上罷蒙候、

正平六年七月三日

大德坊 万福院 福滿坊 學頭坊 長善坊 妙境坊 成福院 實門坊

阿菴嶽衆徒等
 *大德坊 大法師良舜花押
 *万福院 大法師俊睿花押
 *福滿坊 大法師契興同
 *學頭坊 權律師增弁同
 *長善坊 權律師義幸同
 *妙境坊 權律師了義同
 *成福院 權律師永珎同
 *實門坊 法橋覺尊同

進上 高森殿

定

規式事

正平七年閏二月三日
 阿菴山衆徒等起請
 阿菴山ニ居住ノ風説上ノ十歳以上

右、當山者、清淨結界之靈地也、衆徒者、淨行持律之僧侶也、而近比重月經日、女(性下同)居住之由、有其聞、冥之照覽難測、顯之誹謗難遁、尤不可不誠、於向後者、上宮參詣

六十歲未
滿ノ女尼
ノ徒止
住坊ニ
宿スル
禁ズ

阿菴家文書下

道者之外者、十歲以後六十未滿之女、姓臣女共、雖爲一夜、衆徒各々之住坊、仁不可宿置、若背此規式者、自他相尋、無親疎、隨于見聞、山上山下、令披露、可被處罪科、更以不可有隱密之儀、若存僞者、

梵天、帝釋、四大天王、惣日本國中大小神祇冥道、殊當所十二宮大明神御部類眷屬、滿山護法、天童御罰、衆徒等各可罷蒙也、仍規式誓文之狀如件、

正平七年壬二月三日

阿菴山衆徒等

*大德坊

大法師良舜花押

*万福院

大法師俊睿同

*福滿坊

大法師契興同

*學頭坊

權律師增弁同

*長善坊

權律師義幸同

*妙境坊

權律師了義同

*成滿院

權律師永珍同

*寶門坊

法橋覺尊同

*万樂坊

權律師弁昭同

万樂坊

正平十三
年八月廿
九日阿菴
山衆徒等
起請文寫
檢斷ノ事
寄進地ノ
不精進ノ
比丘比丘
宮等ノ上
禁ズ

再拜

立申 起請文事

一 檢斷事可被任先規事

一 甲乙人當山寄進地、可被任先例事

一 於不精進比丘比丘、臣遁世往來仁者、堅可禁制上宮推參事

以前、条々雖爲一事、不可背先規候、凡衆徒等自元不存不忠之上、向後又背先

例之率法、搆新儀不可存曲折候、若令僞申候者、

日本國中大小神祇眷屬諸神部類神等、殊奉仰

阿菴十二宮大明神御罰、各身上可罷蒙之狀如件、

正平十三年八月廿九日

阿菴山衆徒等

*新樂坊

大法師圓惠

*大德坊

大法師良舜花押

*大寶院

大法師永位同

*万福院

大法師俊睿同

阿蘇家文書下

三月十八日
阿蘇家文書下
衆徒等
署寫連
菊池武吉
地ノ高瀨田

- *福滿坊 大法師契興同
- *成道坊 大法師了清同
- *學頭坊 大法師增弁同
- *長善坊 大法師義幸
- *妙境坊 大法師了義花押
- *成滿院 大法師永珎同

菊池七郎武吉高瀨十二町田地寄進狀、同坪付己通上令進上之候、委細雜掌親慶可申入候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

三月十八日

阿蘇山衆徒等

- 權律師義幸花押
- 權少僧都了義同
- 權少僧都永珎同

進上

上包

下田掃部兼殿

進上 下田掃部兼殿

阿蘇山衆徒等

建武二年
四月三日
菊池武吉
寄進狀寫
阿蘇御嶽
所ニ肥後
大野別符
寄内ノ地ヲ

奉寄進

阿蘇御嶽大明神御寶殿

肥後國大野別符内中村田地拾貳町坪付在事

右、所趣者、爲每年恒例三十講祈所、限永代奉寄進之事實也、然則以此法味餘勳、

爲金輪泰平四海靜謐、別者亡父菊池武時寂阿出離生死頓證菩提、殊者藤原武吉現當

二世所願成就、乃至法界利益周遍也、仍爲末代龜鏡、寄進狀如件、

建武二年四月三日

藤原武吉
裏ニ花押

奉寄進

肥後國阿蘇御嶽御寶殿三十講祈田坪付事

合田地拾貳町

下池尻一町

土々孫二郎作

橋爪七段

同人 同

阿蘇文書之二

建武二年
四月三日
菊池武吉
寄進地
阿蘇御嶽
付寫地
寶殿御嶽
講料田

下金田三段 同人 同
 兵庫町一町二段 濱淨法
 倉光一町四反四、内 六郎二郎作
 一町二反二、 善法二郎三郎作
 一反二、 鬼丸作
 一反 又四郎作
 福增二丁二反 大進房沙汰
 樋渡七段内 同
 枝三反 同
 樋渡四反 寺
 福增分九段二丈 同
 奈木町一反一、 同
 佐奈伊岸下一反二、 同
 上河原田六反三、 同
 □□四段 同

正平十七年十一月廿八日阿蘇山衆徒等料足日記
 阿蘇山本堂造立供養料
 阿蘇庄小國内穴田惣官分

□□段 同
 □俣二段二丈 同
 新開一丁久松作 同
 □新開三反 同
 □田三反^(枝) 右近入道作
 木船前四丈 道善作
 以上十二町
 右坪付如件
 建武二年四月三日

藤原武吉
花押裏ノ紙ノ繼目ニアリ、

阿蘇山本堂造立供養新足日記
 一地頭御分
 當庄小國內穴田四町五年得分御寄物進之十石
 一惣官御分

阿蘇家文書下

筑前比伊
郷

爲筑前國比伊郷之御得分物大小釘之新足、以同國下座郡之人夫所有運上
當山也、

惟國分

十貳貫文 惟國御分

惟時分

十貳貫文 惟時御分是者永珍
存知之

本堂修理
ノ料足

一本堂小破修理時

北郷竹原
領家年貢

北郷竹原領家御年貢五ヶ年御寄進
付太小釘

本堂供養
ノ料足

一御供養新足

百貫文 舞童裝束新

六貫文 帷新

十石 舞師習禮中食新

咒願 導師 舞師引出物 御馬鞍

御釵 衣等 惣官御沙汰候、此等條々聊令僞申候者、

日本國大小神祇冥道、殊

當所十二宮大明神御罰、各可罷蒙之狀如件、

正平十七年十一月廿八日

阿蘇山衆徒等

*學頭坊

權律師增弁花押

*長善坊

權律師義幸同

*妙境坊

權少僧都了義同

*成滿院

權少僧都永珍同

阿蘇山御寄進地所々之事

一所 井手牟田

一所 淨土寺

一所 山田寺 如法道場新所

一所 竹原領家米十五石、是、如法經供米

一所 阿蘇品領家米十五石、是、如法經供米

一所 太山寺

一内陣行法用途湯浦梨子ヨリ拾貳貫文

每月初卯 仁王講新所

湯浦梨

太山寺

阿蘇品

竹原

山田寺

淨土寺

井手牟田

進地

阿蘇山寄

起請文寫等

山衆徒阿蘇

廿日一月九

應永廿九

年十一月

應永廿九

灰塚
天狗堂
久住野
大神護寺

泉毘沙門
堂
南鄉市下
二子石崎
高森竹崎
村山

阿蘇山年
行事ノ黒
印

一所 灰塚 一所 天狗堂 一所 久住野
 一所 大神護寺 一所 久住野
 一所 一和尚供僧 那羅延坊知行
 一所 德滿供僧 得善坊知行
 一所 泉毘沙門堂 萬福院知行
 一所 大般若供米 大寶院知行
 是ハ南鄉市下二子石崎、高森竹崎、村山沙汰

應永廿九年十一月卅日

阿蘇山年行事 黒印

右條々別所之事、先凡注文進上仕候、若此条衆徒等偽申候者、
 奉仰日本國中大小神祇、殊者九州鎮守當所十二宮大明神、滿山守護々法天
 童御壽、各衆徒等可罷蒙候、仍壽文之狀如件、

呈禿毫啓達候、今度被仰付御祈禱、得其旨申候、學頭兼備許極、開白可爲致之處、
 親俗之忌御座候、條、拙僧可爲勤修候、衆徒等可申付候、以此趣、惣官惟忠尊前、
 宜預御披露候、万吉々々、恐惶謹言、

永享二年
三月十八日
成滿院
重書狀寫

永享二年
三月十八日
御寺奉行
村山源三郎殿

成滿院
增重花押

應仁二年
十二月三日
十日阿蘇山
珍書狀寫
成滿院永
阿蘇山萬
福院學頭
坊萬樂坊
遺嗣

以治部卿言上之事、當山万福院學頭坊、万樂坊、右寺孫之儀、万福院者遺詞^(嗣)之附
 弟御座候、故、相定申候、學頭職之事者、智行兼備之器量、候、等於御座者、可相極覺
 悟候、萬樂坊事者、似合之僧御座候、申付候、此等之条趣、
 公方惟歲公叶御機色候、様々、奉頼候、猶又治部卿可宣達候、誠恐閣筆、

應仁二年
十二月三日
寺社御取次
村山伊豆守殿

成滿院
永珎花押

下田掃部殿

淨光院
署狀寫連
日七月廿五年
衆徒等連
署狀寫連

追而
 令申候、彼地ニ仕付候、庄下之事、又被指置候、分、別番候之間、省略候、
 就下原檢斷事、六借敷候、然間、爲、上使小陣伯州御越候、寄之事候、條、淨光院被
 罷下申合、屬無爲候、仍今度之事者、悉皆任御方之御意候、兩三人以御得心、永代

淨土寺下
原ノ檢斷

阿菴家文書下

四〇六

淨土寺下原不可有檢斷之由承候、衆中祝着存候、左様爲御禮、自當年歲末御祈
禱可進卷數候、恐惶謹言、

永正二年

七月廿五日

*福滿院

權少僧都契鎮花押

*極樂坊

權少僧都契勇同

*万樂坊

權少僧都契壽同

*歡喜院

權少僧都長契同

今村殿

權大宮司殿

四太夫殿

永正四年
七月廿五日
衆徒等
署寫連
淨土寺
原不入ノ
證斷檢
堀屏城誘

就下原檢斷、去年以來相支候、然間、申合屬無爲候、千秋万歲候、仍於淨土寺下
原、永代檢斷不入之由、證狀御登さ候、肝要存候、

一神夏社役、堀屏城誘、御所作段錢段米之事者、有來候儘可被仰付候、

一從中司懸所三度之雇、家作之時、似合之御用者、可被仰付候、

一御法夏之時、雜事功錢等之事、不可被仰付候、

一自上様他國ニ御用之時、庄之夫あるへうら專候、

一在陣等之時、不可有送夫候、

一科人候する時者、召取、其方へ渡可申候、左様之儀候者、隱密ニ年行夏及可承

雜事功錢
庄ノ夫役
送夫

候、爲後日之候之間、令啓候、恐惶謹言、

永正四年丁卯

七月廿五日

當年行事

豪宣花押

今村殿

了覺坊

宣帳

權大宮司殿

四太夫殿

御宿所

上包
今村殿

權大宮殿(司殿カ)御宿所

阿菴山衆徒等

四太夫殿

享祿二年
七月廿五日
阿菴山
頭坊長宣
書狀寫山
遠國登山
者ノ祈禱

猶々、近年從遠國登山仕候ニ、御祈禱被仰付、面目無申計候、

御書具拜見仕候了、

抑爲 御當家弥御靜謐之御祈禱、万座來秋可思召立御願書、千秋万歲簡要
存候、涯分可致奔走候、則成滿院申談、懇可申上候、返々大儀之御立願、可目出
之由、存候之處、被仰出候、千万目出存候、如何様以參上、万吉可申上候、

山上 御鳴動、自今朝靜御座候、加様之御發願之謂候哉、此之由御披露可目出

阿菴文書之二

四〇七

阿菴山上
ノ鳴動

阿菴家
謐ノ祈禱

阿蘇家文書下

候、恐惶敬白、

享祿二

初秋朔日

矢部

進上

御奉行所

上包

進上 御奉行所

學頭房

長宣花押

法印長宣

學頭房

所 矢部奉行

阿蘇山衆徒屋帳寫

折紙

阿蘇山衆徒坊舍、藺次戒教不同門葉統領有之也、

統領搦別末也棟梁匠番

屋帳之事

成道坊

禮德房

大寶院

淨光院

福滿房

善性坊

福性房

万福院

成滿院

了覺房

長善房

新樂房

妙境房

萬樂房

實門房

成實坊

娛樂房

得善房

大德房

學頭房

阿蘇文書之二

四〇九

四〇八

- 阿菴家文書下
- 勸力供僧格護之分
- 一 居屋敷一町
- 一 益田一町
- 一 萱原八段
- 一 所七丈
- 一 代分一町
- 一 同七丈

天文十一年三月吉日

伍樂坊

事あけく候間、本マ、てい無 状のてまか入申候、
 一日たほせまされ候不んきうくやうのれうりくのちうもん事、ちさん
 つらまつて候て、御洗ふかへ候ところま、かひけいまよとまな茂さす
 候間、まちいんやうけんさんせられ候、この人ままわく御きつ鉢候て、き
 こしめされ候へく候、これのまやうも、まわいん候て、まやう鉢んま

もをよひ候へ、とにきくさんのちからとして、かひいかまき事のまは
 く候へ、こん鉢んた得しめしきれ候へ、かこぬり入候、もあかと
 へ御むけ候とも、かひの御ききうのせん一にても候へ、御まよまやうま
 やう候へきれうりくの事、御ふきやうにた得せつせられ候て、このあき
 ちうくやう候へ、かこま入候、さいの御事茂、やうけんさんせ
 られ候間、たほせつせられ候て、いりやうにも候へ、とくとまき候
 一きうの事、いまままめ申さす候、せんもまやうまよとして候間、ま
 いとしてまらいかさく候、よろつ御うちのをりのまのま申かまたと
 ころまて候へ、こんねんのうちに、かまのまのまやうをま申せ候、
 御いまかまられ候へ、かこま入候、このむ鉢くわく御申候へく候、
 恐々謹言、

八月四日

(草野)
澄算花押

まいり候てこそ、かやうの事を申さく候に、かまのまこま候て、かくこ
 ならず候不んに、山應 やはりにゆいてまて候不んに、つらひまて申候事、ま

阿菴文書之二

阿蘇御嶽
本坊成滿
坊職ノ安
堵

ろのちあに事御わさり候らん、うま給さく候、さてハ御(嶽)の(本坊)をうま
成満坊職安堵やうまんをうまきあんと(堵)の事、すてに御ささ候へきよ候て、御ませけり
まなまの事、まて候し、つねふたとろり申候てこそ候つれ、(宮)十二く大まやうまんも御ちぎん候へ、御まよへ申候はんとも、たもひもよま
候ハす、まて御まうまうふあつり候はんとも、あゑてもて申さる事候ま
ぬを、やうのう御まよへ申て候あとも、又さんし申候もの候らんとも、
入ぬいらさて候、御所よりめされ候て、た得せとふされ候とくハ、やうのう御
さけぎんちうの事、御つりひをも御まうまうあるところふ、せひをさしを
き候て、た得せにまさうふへきよ、まやむ申さるうへハ、いろきまんちう
して、いよ、御まきうまいささとた得せうふりて候、いりやうまへく候
や、御つりひをもてますへられぬいらさ候はんするやらん、た得せにまさう
ひ候へく候、くハ、くハ、まんせうまさり申入候へく候、恐々謹言、

二月五日

やうのう花押

あり殿

やうのう

長享二年
二月廿六日
宣舜
同懷順
日僧宣舜
署狀寫連

灰塚

成滿院

内談ノ座

淨光院

又明日路次之間頼存候、委ハ御使へ令申候、

(肥後)

如仰仲陽之御吉兆、千喜万悦申舊候了、抑就灰塚之篇目、預御札候、御意之趣
具承披候、尤仁被存候、乍去公私御取乱時節、候間、被捨万事、無爲仁御祈簡肝
要令存候、仍一日比就彼篇目、成滿院より被進狀候哉、書狀之趣、自最前存知不
申候、其已後貴殿様より返狀到來候砌、於内談之座、被書狀之案文、同前仁披見
申候事、六借敷候間、各以談合福藏、誓文をさせられ可然之由、議定候て、内談
之座より、以使淨光院へ被申候趣者、福藏對淨光院、權大宮司殿、依緩怠之子細
共候、灰塚之事、六借敷候間、此番改非可致誓文申候間、無爲ニ御思案肝要之由、
衆中より淨光院へ意見候間、則領掌共候、然者、則成滿院より案文被認福藏ニ
誓文させられ候て、淨光院へ被進候、此上者、貴殿様も今程御世上時分之事候
間、無事ニ御思案、誠以肝要令存候、乍憚無御等閑申承候間、愚存之分申入候、巨
細之趣者、明日其方へ可參候間、以面拜可申述候、恐惶謹言、

懷順花押

宣舜同

二月廿六日

長享二年

申成

阿蘇家文書之二

四一三

權大宮司殿

御報

長享二年二月廿二日
阿蘇山良坊樂極
日阿蘇山良坊樂極
伍極樂坊
勇極樂坊
幸懷連署
狀寫ノ弁
灰塚ノ弁
濟司

竹内弁濟司

如仰仲春之御吉兆、雖申舊候、尙以不可有盡期候、珍重、幸甚、抑灰塚之
弁濟司相定候、目出候、自是古曾可令申候處、被測御心候而、御懇蒙仰候、千万
祝着候、御意分懸而、衆中仁披露可申候、定而可被畏存候哉、殊為後日之
御成敗、請文由承候、御案文より以堅請文申させ候へく候、仍一昨日今村殿之
御内者、五郎左衛門と申者之使と候て、竹内弁濟司罷登候、其返事申候分者、
權大宮司殿様申定候之間、誰々申され候共、彼方より被付催候する哉と申候、
案中御懇示給候、千万祝着候、万吉恐惶謹言、

長享二年戊申二月廿二日

良勇花押

幸懷同

權大宮司殿 御返報

上包同裏

極樂坊 伍樂房

正平七年四月廿七日
阿蘇山起請
住等起請
文寫久

敬白

規式誓文事

阿蘇山ニ
女性居住
ノ風説
六十歳以上
六十歳未上
滿ノ女姓
尼ノ久住
止宿坊ニ
ヲ禁ズル

右、當山者、清淨結界之靈地也、久住等常住不斷之行者也、而近比重月經日女姓
居住之由、有其聞、冥之照覽難測、顯之誹謗難遁、尤不可不誠、於向後者、山上參詣
道者之外者、十歳以後六十未滿之女姓、尼女共、雖為一夜久住等之各々之住所
仁不可宿置、若背此制法者、自他相尋、無親疎、隨于見聞、山上山下、令披露、可被處
罪、更以不可有隱密之儀、若偽申者、
梵天、帝釋、四大天王、惣日本國中大小神祇、冥道、殊當所十二宮大明神御部類眷
屬、滿山護法天童御罰、久住等各可罷蒙也、仍規式誓文之狀如件、

正平七年二月四日

阿蘇嶽久住等

*道場坊

禎明花押

*鏡一坊

行明同

*奈羅延坊

明快同

*妙圓坊

道真同

*極樂坊

了明同

*幸寶坊

明真同

*了實坊

了濟同

*「慈昭坊」 增真同
 *「圓連坊」 明覺同
 *「了忍坊」 圓榮同
 *「鏡歡坊」 增祐同
 *「鏡珍坊」 了存同

進上

高森殿

○コノ次ニ、以上載スルトコロノ文書ニ見ユル花押ヲ寫シタリ、今便宜之ヲ卷末ニ收ム、宜シク參看スベシ、

〔阿蘇文書寫 第十九〕

阿蘇社年
 中神事次
 第寫朝幣
 料正月

一ノ宮
 二ノ宮
 三ノ宮
 金凝ノ宮
 鶴原社
 中矢村宮

泔酒

餅

七十二所
 ノ神名

一 正月一日朔幣料六斗下斗、從金武名下行一法燈山部、御甘酒七斗五升下斗、御神樂一斗
 二 升、人料清酒八十八人ニ一升宛、瓶子一具、送物御あつらのちりな給ル人
 數、殿上之供僧六人、御供添之御灯後前二人、樂所ニ一座四人、添祝 公方分
 御酒瓶子片方下行、御供神官役、一ノ御宮五升盛、二ノ御宮五升盛、三ノ御
 宮ヨリ金凝ノ御宮、諸神之御宮十一社ハ三升盛、鶴原中央兩社矢村御宮ハ
 二升盛、諸神ノ祝ヨリ同時御宮一斗五升、

酒之頭人山部一太夫

一 同時御泔酒
 一 二ノ御宮五升宛、三ノ御宮ヨリ金凝御宮、諸神之御宮十一社ハ三升宛、鶴
 原中央矢村御宮ハ二升宛、諸神祝滿桶ニ一斗五升、御甘酒共ニ一斗八升、
 一 同時神官役トシテ御餅一二ノ御宮三百枚宛、三ノ御宮ヨリ金凝御宮、諸神
 御宮十一社ハ百五十枚宛、鶴原中央矢村御宮ハ百枚宛、諸神御宮、諸神祝役
 一 同時一太夫職トシテ鳥瓶子之御泔酒廣（搦數）う（二歌）七十膳神（酒）御ヲ七重
 積、七十二所之御神名ヲ奉讀、同鳥瓶子之弊之土器七十三膳之御甘酒ヲ奉

御鏡

備、出仕之宮人ハ廻廊之坐敷ニテむろういーき一膳宛、神官權官供僧五重積、神人樂所三重積、檢校ハ五重積、添祝三重積、御灯三人三重積、御供添之御灯二前三重積、御酒^{二獻}提請取供僧^一御酌之役仕ル、御供添ノ神人三前三重ツミ、酒三提、檢校王別當敷頭三人、神官權官之酌ノ役出仕ナキ宮人ハ、廣ういーき下行ナシ、朔幣請御酒ハ八十八人下行、

一同時爲神官役御鏡一二ノ御宮五升ツキ二枚宛、三ノ御宮ヨリ金凝御宮、諸神御宮三升ツキ二枚宛、鶴原中央矢村御宮三升ツキ二枚宛、爲一太夫役御菓子盛物御鏡ノ上ニ盛、

鳥瓶子ノ時、御神名ヲ奉讀、一和尚供僧役、

一元三御祭田、祢宜田八段三杖、法灯山部一太夫、神ノ御膳廣ういーき七重ツミ七十二膳、宮人ハ廣ういーき五重ツミ一膳宛、清酒一升宛、

一同月初卯之御神樂田五段ニツイテ御神樂勤ス、^{法灯山部}一太夫、^(真下同)

一同月中卯乙卯御神樂米下斗一斗宛、大宮司殿ヨリ御年具樂所ノ別當ニ下行、

一^{修正會}同月七日御神樂田五段ニツイテ御神樂勤ス、^{法灯山部}一太夫、

一同月十三日踏謡節會、下宮社之分國衙米六石六斗、在廳ヨリ權大宮司ニ納

元三御祭
田祢宜田

初卯御神
樂中卯乙卯
御神樂

修正會

踏謡節會
國衙米

かすへ餅
うち餅
餅ヲ數フ
ル役人

樂所ノ歌

踏歌祝記
一卷
牛玉ノ紙
杖
打餅

ム、爲^(頭カ)役トかすへ餅うち餅出仕之宮人ニ九積一膳宛、清酒三々九度、餅數ユル役人神人王別當、目出タシ、あらふぬのとうちこえて去年より、今年ハ雨玄、ゆふ風長閑、まらせ給ふものあり、宮司答テ云、ささふらう、又とーれ、とその答云、東方より稻童丸參りて、御たうら物うそへ奉ル、南方より自在丸參りて、御たうら物かそゑ、さておける、西方より米童丸參り、御寶物うそゑ奉ル、北方より田主丸參りて、御寶物うそへさてまつる、さやううる餅のかそへやううあ、ひとつと申、いとつ、むとつと申、三ツ三返、

大宮司殿ヲ奉始、神官權官供僧、神人樂所公文段所民百姓ニ至ル、郷々村々、蘭々、八次之藏、千万阿蘇ニあそらまん、次ニ樂所ノ哥、

をー川のく、をーれもとなる若柳、根も葉もくきもい、いなるもの、二返、

次踏謡祝記一卷、宮司^一之役祝記之本有別紙ニ、

國造神護^一修正始ル、大心やうとやう九積、牛玉の紙杖、同稔杖、打餅酒ハ當給人役、

北御宮
金凝神護
寺

次北御宮ニ酒盛物、鉢り杖、打餅、北宮祝役、
次金凝神護（寺）□大ひやうとひやう九積牛玉ノ紙杖、鉢り杖、打餅、酒ハ當給人
役、

す、山
鹽塚
御贄ノ狩
藏

次す、山塩塚當給人役、次下宮御陣ニ奉蹈納、
一此時之御贄之狩藏ハ鷹山くさたり野、井うけの魚ハ新宮之三町畠之役ト
シテ、真口ノ魚三喉、ぬき七懸奉納、

一御酒ハ清酒三々九度、出仕ノ宮人ニ下行、出仕ナキ方ハ下行不仕候、参り、
ちの御祭り、

郡浦ノ御
贄

一春主ノ方同月乙丑ニ郡浦ヨリ参ル御贄□使入足三升盛之饗剩付共ニ二膳、二升盛
ノ饗二膳、一升盛ノ饗二膳、同時九積剩付共ニ二前五ツ、ハ、ミ、二前三ツ、ミ、二
前新足十文コキ緒一、白木弓一張、是ハ郡浦ノ大明神ニ阿蘇之御社ヨリ御
まいらせ候、上代ヨリ如此、

二月
朔幣米

一二月一日朔幣幣米六斗下斗、自金武名下行法灯山部二太夫、御供神官役御甘酒、一
二之御宮五升宛、三ノ御宮ヨリ金凝諸神ノ御宮迄ハ三升宛、鶴原中央矢村

御宮ハ二升宛、諸神祝満桶一斗五升、

同時御餅一二ノ御宮三百枚宛、三ノ御宮ヨリ金凝諸神御宮百五十枚宛、鶴
原中央矢村御宮百枚宛、

御神樂一斗二升、御甘酒七斗五升、人數八十八人ニ一升宛、瓶子一具、送物御
甘酒塵ヲ給ル人數、殿上ノ供僧□人、御供添之御灯二人、樂所一座四人添祝
公方分御酒瓶子片方下行、

一 同月初卯之御神樂田五段ニツイテ御神樂ヲ勤ス、法灯ニ太夫

一 同日春神主之御祭禮米十二石、爲小熊野役、權大宮司方へ納ル、

一 灯油ノ代一貫二百文、在廳ヨリ十二社北ノ御宮御あうりとして、權大宮司
ニ納ル、

御酒下行之事

一 六斗四十一束ノ馬草ノ代、國ノ御祭ノ時、在廳ノ方ニ權大宮司方ヨリ下行、

一 六斗まんさいりけと申テ、神官權官ノ方ニ下行、

一 六斗せんさいりけと申テ、馬屋うちれ酒在廳ニ下行、

一 一斗五升郡浦之贄之御使ニ下行、

酒下行
馬草代
まんさい
かけ
せんさい
かけ

竹原霜宮

一六斗春冬ノ御祭ノ時、市下ノ[□]ノ使ニ下行、
 一七斗五升御甘酒
 一米七斗五升御供米
 一用途一貫二百灯油ノ代
 一同月中卯御神樂米ニツイテ、樂所ノ別當御神樂ヲ勤ス、
 一同初午ニ下宮ノ御祭禮、竹原ノ霜宮祝役、

下野御狩

御供御甘酒一二ノ御宮五升宛、十社諸神ノ御宮三升宛、鶴原中央兩社矢村
 御宮二升宛、人料饗膳二升盛一膳宛、清酒[□]一升宛、
 一同月初卯ニ下野御狩有、御祭ノ次第有別紙、御贄備之時、祭足^{下斗}三石三斗三升
 并御贄ノ眞口三十三喉、郡浦御社ヨリ參ル、下野御狩ノ時、注連^{下斗}下シ注連上
 酒入家見日晴ノ間^{下斗}のとの散米一石二斗、

富安ノ市

一同月中ノ卯ニ富安之市立、

歳神

一同月初巳日歳神起シ奉ル時、三太夫ヨリ瓶子片方^{シトキ}黍一枚、肴、御服、御社ニテ

歳禰大明神

一重奉ル、天宮祝年^称預ヨリ瓶子片方、黍一枚、肴、御社ニ參ル、其后歳禰大明

禰祝所

神歳禰祝所へ御幸之時、タカ^高カ^菜ノ莖立ニ大豆ヲ入テ、御肴ニテ御酒一獻、黍

寄子

一枚奉備、御服一重、次ニ三太夫所ニテ一日一夜ノ御祭、御供三升盛一膳、八
 數ノ御さい^(菜)一前、黍一枚、花ノ飯一枚奉備、七ノ祝寄子御供三升盛一膳、八數
 之御菜ハ猪鹿二盛、魚二盛、豆腐二盛、ダンゴ二盛、但一盛ニ三ッ宛、小串焼雉
 ノ^(別)ベツソク土器二ツ、

八ノ祝寄子御供料三升盛一膳、八數ノ御菜一前、黍一枚、花ノ飯一枚、土器二
 ツ、三太夫天宮祝六太夫神人樂所御供ニテ酒一獻、次ニ吸物ニテ一獻、豆腐
 ノ焙串ニテ一獻、三々九度、次御家顔ニテ一獻、三太夫六太夫天宮神人歸申
 候、次ニ樂所^(後)かう庭ニテ食、御神樂勤ス、宮番神人ヨリ一人、添ノ祝兩人、

午ノ日二太夫、右同前、四太夫寄子御供三升盛一前、八數ノ御菜一前、黍一枚、
 花ノ飯土器二ツ、五太夫ヨリ子御供三升盛、右同前、

未ノ日一太夫所ニテ御祭、右同前、六太夫寄子、天宮寄子、右同前、
 申ノ日天宮所ニテ御祭、其日之朝鷹山おやま河ニ御ミ^ソ木御迎ニ參ル人

數、三太夫四太夫五太夫天宮四人ハ二人宛出ス、御供一升、黍一升、天宮所ヨ
 リ持參ル紙二枚ミ^ソギ包ミ申紙也、歸ニ竹原眞福寺ニテ弓二張ハル、矢四
 ツ作ル、羽ハ紙也、御迎ノ者ニ眞福寺ニテ稗^粥糺振舞申候、扱塩井川ニテシホ

鹽井川

竹原眞福寺

鷹山こやす河

天宮所ニテ神體ヲ作ル

千原

芝持

年賦ノ次第

イカ、セ申候、其後天宮所ニテ御神体作り申候、ミソギ長八寸、御シヤクニ
 ッ長サ一尺二寸、御衣天宮祝奉着、其後中立木ニテ千原ノ饗、法灯權擬大宮
 司、祭田ウイもと一町役田ヨリ、千原ノ木ニテ御供三升盛二膳、八數ノ御
 菜二前、黍二枚、花ノ飯二枚、御アツラ瓶子一具、(千原)ちりら(下)のおろ(饗)きやうぜん
 六十五膳、御酒三々九度、的場ノ饗膳、年祢預饗四膳、修理檢校饗四膳、
 諸神祝饗四膳、擬大宮司饗四膳、權擬大宮司饗四膳、供僧十五供ヨリ
 饗四膳宛、合テ八十膳、内二十膳三太夫請分、二十前天宮請分、四十膳ハ神
 人樂所添ノ祝、芝持ノ中ニ一膳宛下ス、此内敷頭二前請取、(美濃)ミノ次郎一前ウ
 ケトル、其後天宮所ニ御幸行、右同前、かう庭ニテ樂所ニ粥、夜食ニダンゴ入
 糝、夜明ニ食、

酉ノ日、四太夫一日一夜ノ御祭、右同前、
 戌ノ日、五太夫一日一夜ノ御祭、右同前、
 年賦之次第、一太夫二太夫三太夫四太夫ハ酉ノ日、五太夫六太夫七ノ祝
 八ノ祝、天宮祝、戌ノ日、御供三升盛二膳、八數ノ御菜二前、シトキ黍二枚、花ノ飯二枚、あ
 つら瓶子一具宛、座ノ酒三々九度、酒飯有リ、

亥、日田作ノ御祭

法灯年祢預

亥日田作ノ御祭

鳥追ノ飯

田作御祭ノ役人

肴豆布ノ焙串ニテ三々九度、
 田作御祭ノ時之役人、
 ありたう一の役、天宮祝

五穀ノ枕トシ、木ノ葉ヲ御坐トシ、
 マワラセ、タマフハ、ルハ、ク
 尋サセタマハ、ルハ、ク

溝(淺)さらへ、三太夫役

花ノ役人、七ノ祝八ノ祝

太刀ノ役人、八ノ祝

弓ハ七ノ祝役

おひとりヲ結フ、七祝役

かむら矢ハ八ノ祝役

田(打)うち比、鍬の柄、三ノ次郎役

籾ノ種、ミノ次郎役

苗種ミノ次郎役

種蒔、三太夫役左蒔

鳥逐、八ノ祝役

苗引、小宮司年神蒔

一ノ畔、七ノ祝八ノ祝

二ノアセ、擬大宮司權擬大宮司役

苗クハリ、敷頭役

牛ニ成夏、四太夫役

牛ニ水飼、五太夫役

大富ノ役、土器神人かむら

種蒔 鳥逐 苗引

江口ノ水、五太夫役

(祈) 主、檢按二郎貫主

大富ノ使、公文

千町万町、公文役

檢注、六太夫公文役

(傳) 馬ノ役、諸神祝擬大宮司役

初午下宮ノ御祭

一同月初午ニ下宮ノ御祭禮、竹原霜ノ宮祝役

御供御甘酒如例式、同宮人ノ出仕之坐、御酒三々九度、同饗膳二升盛、出仕ナ

キ方ニハ御酒饗膳下行、

常樂會

一同月十五日、常樂會舞童有之、

三月朔幣米

一三月一日朔幣米六斗、自金武名下行、法灯三太夫

御供神官役、御泔酒七斗五升、御神樂一斗二升、人料八十八人ニ一升宛、瓶子一具送物、

公方分瓶子片方、一二御宮御供御甘酒共ニ五升宛、三ノ御宮ヨリ金凝諸神ノ御宮ハ、御供御泔酒三升宛、鶴原中央兩社矢村御宮二升宛、泔酒之塵ヲ給ル人數、殿上ノ供僧六人、御供添ノ御灯二人、樂所一座四人、添祝一獻ニ三盃ツ、諸神祝^{滿桶}一斗五升、

三日ノ御祭禮

一同月初卯之御神樂田二段二丈、中ニ付テ御神樂ヲ勤ス、

一同月三日之御祭禮米六斗、自金武名下行、法灯^{三太夫}天宮祝、御供神官役、御甘酒七

斗五升、御神樂一斗二升、人料請八十八人ニ下斗一升宛、瓶子一具送物、滿桶

一斗五升、同天宮職トシテ、鳥瓶子之御甘酒七十三^{二瓶}ノ弊ノ土器、草餅七十二

膳、御殿^ニ盛テ七十二所ノ御神名ヲ奉讀、一和尚供僧ノ役トシテ讀テ

奉備、泔酒ノ塵、右同前、

一同月中卯乙卯御神樂米、從大宮司殿御年具一斗、樂所之別當ニ下行、

法灯樂所別當

櫻會

一同月十五日、櫻會御祭禮米一石、金武名ノ役、法灯^權大宮司、御供神官役、御泔

酒七斗五升、御神樂一斗二升、人料ナシ、參リ立ノ御祭諸神祝滿桶一斗五升、

一二ノ御宮御供泔酒五升宛、三ノ御宮ヨリ金凝諸神御宮ハ三升宛、鶴原中

央兩社矢村御宮二升宛、御甘酒ノ座ヲ給ル人數、殿上之供僧六人、御供添ノ

御燈二人、樂所一座四人、添祝、同時爲供僧役、法華八講アリ、

饗膳之注文

二太夫御^口供二膳饗十膳 六太夫饗十膳

南坂梨原
田神人

十ノ祝子饗十膳

天宮之祝子饗五膳

德滿供僧饗五膳

次郎貫主饗五膳

檢校饗五膳

南坂梨原
田神人饗五膳

四月

一 四月一日御祭禮、右同前、

法灯四太夫

一 同日初卯ノ御神樂田二段二杖中ニツイテ御神樂ヲ勤ス、

頭人四太夫

一 同月中卯御神樂米、大宮司殿ヨリ御年具一斗_{下斗}下行、

頭人樂所別當

一 同月四日風逐之御祭

法燈風之祝

風逐ノ祭
風神ノ祭
風口ノ祭
風尾
泉八箇村
ノ狩人
井手ノウ
ナカシ

風口之御供、風神土器三膳、十二社ニ十二膳、神人饗膳一升盛、風口之祭ノ時
請ル御泔酒十五社ニ奉備、風尾之御供御泔酒、風口ニ同前、次ニ人料之次第
清酒出仕之宮人ニ三々九度、饗膳一升盛一膳宛、初獻ニくじうさい肴と申
て、蕨ノ穂ニ小豆ヲ添テ煮テ、うちゑきニ盛ル、次ニ宮人ノ外ニ泉八ヶ村之
狩人八人、同泉ノ使共ニ末坐ノ中ニツク、井手ノウナカシ仕物一人、本座ニ

南坂梨ノ
田所
北坂梨ノ
名本
井手ノ山
ノ案内者

風祝

ツク、次ニ南坂梨田所一人、本坐ノ末坐ニ着、次ニ北坂梨ノ名本一人、本座ノ
末座ニ着、次ニ竹原ノウナカシ一人、本座ノ末坐ニツク、次ニ井手ノ山ノ案
内者二人、後座ニツク、本膳一太夫二太夫、權大宮司内者五人ツク、其外社家
十七人ハ三人ツク、中司三人ノ内者列々うさひ、内者ハ何モ後座、主人ノ薦
次ノマ、同時中司三人仁請きやう、七十五人請御酒七斗五升、風祝ヨリ三
人之使頭請取ル、

一 同月佛生會在リ、

五月

一 五月朔日御祭禮之儀式前ニ同、

法灯五太夫

一 同月初卯御神樂田二段二丈中ニ付テ御神樂ヲ勤仕ス、法灯同人

一 同月中ノ卯乙卯御神樂米御年具一斗、自權大宮司樂所之別當ニ下行、

頭人樂所別當

五日ノ御
祭禮

一 同月五日之御祭禮米二石五斗、從惣官中司三人ニ下行、御殿之御供神官
役、同御殿之御泔酒中司役、一二ノ御宮御供五升盛、泔酒五升宛、三ノ御宮ヨ
リ金凝諸神御宮ハ、御供三升盛、泔酒三升宛、鶴原中央兩社矢村御宮ハ、御供

二升盛泔酒二升宛、御甘酒ノ塵ヲ給ル人數、殿上之供僧六人、(直會)あうらいの粽
一人ニ三ツ宛、御供添ノ御灯二人ニ三ツ宛、樂所一座四人三ツ宛、添ノ祝一
人ニ三ツ宛、塵一献ニ三盃ツ、

大明神二階殿□之樓門ニ御幸之時、くゝての御供中司三人ノ役同御粽中司役、
一二ノ御宮くゝての御供五升盛粽二十宛、三ノ御宮ヨリ金凝諸神之御宮
御供三升盛粽十ヲ宛、鶴原中央兩社矢村御宮御供二升盛粽十ヲ宛、

同時御泔酒鳥瓶子七十二ノクホテ菴ノ御器、七十二所ノ御神名ヲ奉讀□奉備、御
神名ヲよむ事、一和尚、供僧役、甘酒ノ塵ヲ給ル人數、殿上之供僧六人、御供添
之御燈二人、樂所一坐四人、添祝、此人數御供
御料打ヘキニ盛
テ備ヘシ御酒一獻ニ三盃ツ、

人料酒粽
ノ下行

一人料御酒粽下行之夏

公方分清酒瓶子片方粽十ヲ
裏手ノ分清酒一升粽六ツ

神官權官廿人、清酒一升宛、粽六宛、 以上百二十
供僧十五人、御燈三人、合十八人、清酒一升宛、粽六ツ宛、 以上百八

本神人十人、清酒一升宛、粽六宛、 以上六十

御供添ノ神人三人、同下神人七人、白酒一升宛、粽五宛、 以上五十

御供添ノ御灯二人、白酒一升宛、粽五宛、 以上十ヲ

樂所十六人ノ内一座四人、清酒一升宛、粽六宛、以上廿四

余十二人、白酒一升宛、粽五アテ、以上六十

添祝十二人ノ内一二ノ添祝、北宮添祝三人ハ、清酒一升宛、粽六ツ宛、以上十

八、余十一人ハ、白酒一升宛、粽五宛、以上五十五

田樂九人ノ内大夫一人ハ、清酒一升、粽六、 余八人ハ、白酒一升宛、粽五アテ、

以上四十六

沙汰ノ者分 一人 小宮司 白酒一升、粽五
一人 次郎貫主 白酒一升、粽五
一人 美濃の次郎 白酒一升、粽五

公文分清酒瓶子片々、粽六

御子馬乘二騎 白酒瓶子片方ツ、粽五宛、已上十ヲ

勿馬乘一騎 清酒瓶子片方、粽六

同口取ニ粽五、酒三盃宛

御子馬乘
勿馬乘

金武名
西豆札
手野

宮廊
戸魔智三騎

一騎金武名役清酒瓶子片方、粽六
一騎西豆札役、右同
一騎手野ノ役、右同

添ノ祝あうらいの粽、以上四十二

廳屋

廳屋之御酒一獻一盃
殿上之供僧六人
神官權官ノ内騎
添馬ノ人鉢六人

粽都合八百五十九ノ内 一方ノ分二百八十七

一方ノ分二百八十六 一方ノ分二百八十六

一御五斗一升 一方之分一斗七升

一方一斗七升 一方之、一斗七升

一自公方中司三人請取米金フセ二石五斗ノ内

一方ノ分八斗三升三合宛以上

一同日鎗流馬之次第

一番 裏手 二番 南坂梨 三番 北坂梨

四番 野中 五番 熊崎 六番 井手

流鎗馬ノ
次第

七番	竹原	八番	<small>あを野の 立小(倉)の はく方</small>	九番	倉原
十番	湯之原 <small>惣領分</small>	十一番	くら原	十二番	下田
十三番	市下	十四番	大野	十五番	<small>(柏) うい</small>
十六番	<small>草部 巳さから 早奈息</small>	十七番	高森 村山	以上	

同時還御之御供神官役

六月

一六月一日御祭禮儀式如右、

法燈六太夫

一同月初卯御神樂田二段二丈中ニ付テ御神樂ヲ勤ス、法灯同人

一同月中卯御神樂米御年具斗從大宮司殿樂所別當ニ下行、頭人樂所別當

一同月廿日臨時之御祭禮、山風流有リ、南坂梨之役、爲南原上浪野加地子分奉

勤仕、御甘酒如恒例、人料清酒一升宛、饗膳一前宛下行、

一同日無田ノ口一二ノ蒲牟田ヨリ蒲十七束、湯之浦ヨリ納之、

一同月廿六日御田(植)殖之御祭禮米自金武名下行、

米下斗三斛一斗 一石五斗一太夫方下行

一斗ハ修理方下行御こゝの修理料

田植ノ祭

山風流

一 御殿之御供神官役

一 御泔酒七斗五升之内 三斗七升五分合、一太方ヨリマール、二太方ヨリマール、

一二ノ御宮御供五升盛、御甘酒五升宛、三ノ御宮ヨリ金凝御宮諸神御宮ハ、

御供三升盛、御甘酒同前、鶴原中央兩社矢村御宮、御供二升盛、御泔酒二升宛、

諸神祝滿桶一斗五升、公方分 清酒瓶子片方、粽十ヲ、以上

社家廿人、清酒一升宛、粽六宛 已上百二十

供僧十五人、清酒一升宛、粽六宛 已上九十

御灯三人、清酒一升宛、粽六宛 已上十八

本神人十人、清酒一升宛、粽六アテ 已上六十

下神人七人、白酒一升宛、粽五アテ 已上三十五

御供添神人三人、白酒一升宛、粽五アテ 已上十五

御供添御灯二人、白酒一升宛、粽五宛 以上十ヲ

樂所十六人内一坐四人、清酒一升宛、粽六アテ、已上廿四

余十二人ハ、白酒一升宛、粽五アテ、已上八十四

田樂九人ノ内一人ハ、清酒一升宛、粽六、余八人ハ、白酒一升アテ、粽五アテ、以

田樂

本神人

下神人

官廊戸覺
智

獅子舞

沙汰ノ者

駕輿丁昇

早乙女

上四十六

宮廊戸魔智清酒瓶子片方、粽六ツ、馬ノ口取粽五、酒三盃ツ、已上十一

獅子舞頭持、尻振四人ハ、清酒一升宛、粽六、以上廿四

同々いおい四人、白酒一升宛、粽五アテ、已上廿

鼓持二人、白酒一升宛、粽五ツ、以上十ヲ

沙汰ノ者、小宮司、次郎貫主、美濃次郎、御酒二前ツ、粽五ツ、

荷輿丁(昇)十六人、白酒一升宛、粽五宛、以上八十

早乙女十五騎、白酒一升宛、粽六宛、以上九十

公方早乙女之供、口取二人、笠サシ二人、沙汰ノ者二人、以上六人

白酒一升宛、粽五アテ、以上三十 余十三騎口取、笠サシ、粽三宛酒三盃宛、已上七十八

添祝十四人ノ内三人ハ、清酒一升宛、粽六アテ、以上十八

余十一人ハ、白酒一升宛、粽五宛、以上五十五

諸神祝滿桶一斗五升、六粽、十八束、以上百八

同時御供屋 らいの粽九十、已上

神ノ御粽

一 神之御粽、一二御宮粽廿宛、くゝての御供五升宛、三ノ御宮ヨリ金凝諸神御宮ハ、粽十ヲ宛、クボテノ御供三升宛、鶴原中央兩社矢村御宮、粽十ヲ宛、くほての御供二升宛、

先拂ノ神人

一 先拂ノ神人五人くゝての御供一升宛、白酒一升宛、御[□]ちぬき五束、三拾一七十二所之御神名ノ内十七社之外五十五社ハ、くゝての御供一升盛奉備、已上七十二社

御田木ノ屋形

一 御泔酒鳥瓶子、くゝての御器七十二奉備、泔酒ノ塵ヲ給ル人數、殿上之供僧六人、御供添之御燈二人、樂所一座四人、先拂之神人五人、同添祝、あうらいの粽三宛、御酒一獻、御供ひろけ打^(折)ヘキニ盛テ、御供屋ニテスハル、
一出仕之宮人ハ、御田木之屋形ニテ、何レモ三々九度、出仕ナキ方ハ御酒粽、如日記下行ス、

一 一太夫方ヨリ瓶子一具、粽十ヲ送物

二 太夫方ヨリ瓶子一具、粽十ヲ送物

一 粽數一千四百九十八

御神名ヲ奉讀、一和尚供僧役

祭禮目錄
出仕規式
出仕供奉
ノ次第

一 還御之御供、神官役

一 天供之樂、惣官役

一 惣禮廻向、供僧役、是ハ御殿之御供奉備時ノ規式也、

一 同御祭禮之目錄、并出仕之規式、御祭役々人數之支

一出仕之供奉ノ次第

惣官神官權官廿一騎

供僧十五騎

爲惣官役、早乙女二騎

爲神官役、早乙女二騎

爲權官役、天宮祝早乙女一騎

爲金武名之内南原之役、宮廊戸魔智一騎

一 駕輿丁カキ之次第

一ノ御輿者 一 太夫方ヨリ四人

二ノ御輿者 二 太夫方ヨリ四人

三ノ御輿者 三 太夫ヨリ金凝祝迄一人宛、以上十八人、此内二人ハ

駕輿丁昇
ノ次第

別役勤

太鼓持ノ次第

一太鼓持之次第下宮社太鼓持ハ、前ノ口ハ春神主ヨリ一人出之、前ノ口一人ハ、春神主ノ頭人自權大宮司出ス、後之口一人ハ、冬神主ノ頭人ヨリ差繩以テ出ル、

田樂

水火王ノ面

屋形造在所ノ次第

一田樂九人、御神之前拂ノ樂ヲ勤、
一神人十八人、御銚水火王ノ面ヲ以テ御前拂ノ役ヲ勤ス、
一樂所十六人、前拂ノ樂ヲ勤ス、
一屋形造在所之次第
應永年中ヨリ、南坂梨ヨリ由來アリ、
一口一間 北坂梨二十五町ヨリ作

其次一間

豆札六町七反
三反
三町三反
古字津
みうは拾二町

合二十二町ヨリ作

其次一間

野中十町
大もん五町
古閑四町
ひる石一町

合貳十町ヨリ作

其次一間

明應年中ノ比ヨリ、廿町ニ被成候へ共、三十町ノ時ノマ、勤候畢、
あそ品三十町ヨリ作ル
(阿蘇)

御輿修理料

二ノ田屋ノ形作在所ノ次第

其次一間

(赤仁田)
あらに廿町
くまさき五町

合貳十五町ヨリ作

一松木二町七段松崎一町、山鹿、生産山爲東浪野之役、御輿之修理之料ニ(黄)
六十六連皮ノ錢一貫五百文、南方ヨリ一年、北方ヨリ一年納之、

一二ノ御田之屋形作在所ノ次第

一口一間

くら原五町
下竹原五町
あやの五町
小くらは五町
ほうはん方五町

合貳拾五町ヲ作ル、

其次一間 上竹原四拾町より作ル、

其次一間 湯之浦三十町ヲ作

其次一間 小里三十町ヲ作

南ノ破風、役犬原五丁之役

一同御祭御幸ノ時前拂獅子舞之出ル在所ノ夏

從南坂梨

男獅子一頭 一役大鼓持一人
女獅子一頭

次年

從北坂梨

男獅子一頭 一役大鼓持一人
女獅子一頭

次年

獅子舞奉仕ノ在所

從赤仁田 にゑるゝ 女男獅子一頭 一役大鼓もち一人

次年

從古宇津 女男獅子一頭 一役大鼓持一人

次年

從野中大門 女男獅子一頭 一役大鼓持一人

次年

從阿蘇品 女男獅子一頭 一役大鼓持一人

次年

熊崎古閑廣名寄合 女男獅子一頭 一役大鼓持一人

次年

手野南郷 男女獅子一頭 大鼓持一人

次年

井手本主方ヨリ女男獅子一頭

次年

阿屋野小倉立田方ヨリ男女獅子一頭 大鼓持一人

自小里

女獅子一頭

供屋

奥休屋形

早乙女ノ屋形

四面ノ内沙汰者

二ノ御田ノ獅子屋形

次年

湯之浦 惣領方女獅子一頭 大鼓持一人

次年

自藏原男獅子一頭 大鼓持一人

自下竹原女獅子一頭

次年

從上竹原 女男獅子一頭 一役大鼓持一人

一同時御祭ノ時御供屋ハ 神官役

一同興休屋形ハ 神官役

一同早乙女之屋形十二騎 神官役

一同惣官御分之早乙女屋方、東方西方沙汰ノ者、四面之内沙汰ノ者、美濃次郎

地引十郎太郎、三人之役

一同天宮祝之早乙女ノ屋形、天宮祝役

一同獅子屋形、小里シツケ蘭ヨリ作

一同二ノ御田ノ獅子屋形、井手本主方、小島之村ヨリ作

七月
御神樂田

一 七月一日御祭禮每月如朔日、法灯七ノ祝

一 同月初卯ノ御神樂田二段二丈中ニ付テ御神樂ヲ勤ス、法灯同人

一 同月中卯乙卯ノ御神樂米、從大宮司殿樂所別當ニ下行、法灯樂所別當

一 同月七夕ノ御祭禮、御供御甘酒奉備様、朔日如御祭、宮人豆ノ葉ノアツモノ
ニテ三々九度、法灯一太夫

蓮華會

一 同月十五日蓮華會之御祭禮料六斗、金武名役トテ納之、法灯權大宮司

御供神官役御泔酒七斗五升、御神樂一斗二升、人料ナシ、參リ立ノ御祭、但出

仕ノ宮人ハ御酒三々九度、於拜殿如恒例、御^甘酒ノ塵ヲ給ル人數殿上ノ供

僧六人、御供添ノ御灯二人、樂所一座四人、添祝、

一 同時爲供僧役法花八講有、同饗膳注文

一 太夫御^口供二膳饗十膳

五太夫饗十膳

一 和尚供僧饗五膳

法華八講
饗膳注文

九ノ祝饗十膳

千代供僧饗五膳

八月

宮藏

放生會

檢校饗五膳

王別當年神菌饗五膳

小宮司饗五膳

酒頭人權大宮司

一 八月一日朔幣米六斗^{下斗}、從金武名爲權大宮司役八ノ祝、下行、法灯八ノ祝

御供御泔酒其外、如每朔御祭禮、

一 同月初卯御神樂田二段二丈中ニ付テ御神樂ヲ勤ス、法灯八ノ祝

一 同月中卯乙卯御神樂米、宮藏御年貢二斗、從大宮司殿樂所別當ニ下行

法灯樂所別當

一 同月十五日放生會御祭爲惣官役米二斛^{下斗}五斗、中司三人ニ下行

御殿ノ御供神官役神官役同御殿ノ御泔酒、中司役、一二之御宮御供五升盛、

御泔酒五升宛、三ノ御宮ヨリ金凝諸神御宮ハ、御供三升盛、御甘酒三升宛、鶴

原中央兩社矢村御宮、御供貳升盛、甘酒二升宛、御甘酒之塵ヲ給ル人數、殿上

ノ供僧六人、御供添之御灯二人、樂所一坐四人、添祝、塵之御酒一獻ニ三盃宛、

一大明神二階之樓門ニ御幸ノ時クテの御供、中司三人ノ役、御甘酒樽ノ葉

ノクテ御盃鳥瓶子之御甘酒、五月會ニ同前、くほてさす役人、美濃次郎樽

之葉納ル、在所上井手三町三反ノ役也、^{クホテ}菘^{十七}御坏之菘七十二

七十二所ノ神奉讀備、御神名ヲ讀吏、一和尚供僧役、御供ノ昨赤ヒモロキヒ御料うちへきニ盛テ、塵ヲタマハル時可備、

同時樓門天井之薦、逆敷ニシクコモ、十二府懸アミ立四尋三尺、狩尾ヨリ納之、

村ノ舞
細男舞

同時村之舞、五太夫役、裝束ハ立烏帽子ニ狩衣、沓キンケン刀、檜扇ヨウノ太刀帶候、頭ニハ絹ニテ一幅ハタカリニ烏帽子ノ着際ニ引廻シテ垂候、是ハ細男せいなふと云舞ヲ表シ候、七尺五寸ニ新敷鉾、毎年作立被持候、支度ハ經坊本堂ニテ被仕候、扱北之廻廊之俵いとふより、舞殿のとく舞いらを候而、夫ヨリ四（足）あゝまであらこもを敷候而、其上ノ儘四（一）舞入候而、樓門のとく被舞入候、

榊葉にゆふしく乾きて、誰り世に神之社と祝初ケン、

千岩破我カ心ヨリスルワサヲ何ノ神カ余所ニ見ルヘキ、

右成就シテ後、本ノ如ク後ウシロシザリニ逆ニ舞廻リテ、舞殿ノ如ク舞入テ、御鉾

ヲハ一ノ御宮ニ奉納、五太夫ハチャウノ屋ノ如ク出仕ス、其後爲供僧役、法

花八講有、其后社家出仕之人々、右ノ所ニ下向、

放生會相撲ノ次第

同放生會相撲之次第

- | | | |
|---|---|----------------------------|
| 一 番 裏手 <small>北坂</small> 梨 <small>北坂梨</small> | 二 番 山 <small>一太夫</small> <small>（鳥）</small> | 三 番 高 <small>二太夫</small> 森 |
| 四 番 大 <small>三太夫</small> 野 | 五 番 小 <small>四太夫</small> 野 | 六 番 小 <small>五太夫</small> 野 |
| 七 番 小 <small>六太夫</small> 野 | 八 番 草 <small>七ノ部</small> 祝 | 九 番 草 <small>八ノ部</small> 祝 |
| 十 番 市 <small>九ノ下</small> 祝 | 十一番 二 <small>十子</small> 石祝 | 十二番 高 <small>國造</small> 崎祝 |
| 十三番 長 <small>金凝</small> 野祝 | 十四番 松 <small>村</small> 崎山 | 十五番 野 <small>野</small> 崎中 |
| 十六番 下 <small>野</small> 竹原 | 十七番 湯 <small>黒</small> ノ浦石 | |
- 同時還御御供神官役

九月

一 九月一日朔幣米六斗下斗自金武名爲權大宮司役九ノ祝方へ下行、

法灯九ノ祝

- 一 二ノ御宮御餅三百枚宛、三ノ御宮ヨリ金凝之御宮諸神ノ御宮矢村御宮
- 百五十枚宛、鶴原中央兩社百枚宛、御供御酒、其外規式如每朔、
- 一 同月初卯御神樂田二段二丈中ニ付テ、爲神官役御神樂ヲ勤ス、
- 一 同月中卯乙卯御神樂米、宮倉御米、爲惣官役樂所別當へ下行、

馬場ノ役

一 同月九日御祭足酒料自金武名納之一斛二斗、御餅料一斛三斗、爲年祢預役奉勤、一二之御宮餅三百枚、三ノ御宮ヨリ金擬諸神矢村御宮ハ、百五十枚宛、鶴原中央兩社百枚宛、御殿ノ御供神官役、御甘酒法燈之役、萬事如恒例、

一 同時二階ノ樓門ニ御幸ナラセ給フ時、神之御膳廣ウイキ七重積七十二膳あり□ふ盛テ奉備、御甘酒七十二ノ弊弊之土器ニテ烏瓶子ノ御甘酒奉備、其后供僧役トシテ仁王八講アリ、

一 同時馬場之役トシテ鎗流アリ、五月ニ同、

一 同時くらうとまちあり、五月ニ同、

一 同時相撲アリ、番組五月ニ同、

一 同時鉾ノ舞アリ、三太夫役、裝束ハ立烏帽子ニ狩衣襪子沓、きんぞん刀檜扇、ようの太刀帶、頭ニハハタハリの絹ニシテ、烏帽子ノキハニ引廻シテ垂候、是ハ細男いふと云舞ヲ表シ候、七尺五寸ニ鉾ヲ毎年ニ仕立被持候、支度ハ經坊本堂ニテ被仕候、扱北之廻廊のいとふより、舞殿のとく舞いらせ候而、夫より四あり迄荒薦を敷候而、其上ノ儘四ありニ舞いらせ候、

鉾ノ舞

社家競馬

一 社家競馬

初ノ四太夫諸神祝相役
次ノ一ツカイ

五太夫

六太夫

擬大宮司

權擬大宮司

流鎗馬ノ時廳屋出仕ノ次第

三 依りい悉成就ノ、其次ニ御子馬乗二騎通ル、其次相撲、其次十烈、其后裏手通ル田樂アリ、發手ハ田樂ナシ、其後鎗流十七騎成就ス、

肥後國阿蘇御社鎗流之時、廳之屋ノ出仕ノ次第

一 神官權官等競馬之人、躰六人者、十七騎之鎗流馬、闕不闕爲知、檢見、若一騎モ闕時ハ、庄屋權大宮司所ニ可被訴申、自權大宮司大宮司殿仁可訴申、同時同射手人躰氏姓ヲ可糺、

一 殿上供僧六人役之事

表手ヨリ發手及十七騎、爲祈禱三解脱之文、返五人役、爲馬之祈禱、馬頭呪、反宮司役

一 廳屋敷蒔之事

殿上供僧六人役

九月九日
第 饗膳ノ次

社家方ハ一太夫ヨリ可出、同蒔ヲ敷、敷頭役、同酌敷頭役、御酒一獻、
 一 供僧方ハ一和尚ヨリ可出、蒔敷、御供添御灯役、同御酌御灯役、御酒一獻
 一 廳屋作、夏神人役
 一同 九日饗膳ノ次第
 一 太夫饗十膳 二 太夫饗八膳 三 太夫饗七膳
 四 太夫饗六膳 五 太夫饗五膳 六 太夫饗五膳
 七 之祝饗五膳 八 ノ祝饗五膳 九 ノ祝饗五膳
 十 ノ祝饗五膳 國造祝饗五膳 金凝祝饗五膳
 權大宮司饗四膳 歲祢祝饗四膳 諸神祝饗四膳
 修理檢校饗四膳 擬大宮司饗四膳 權擬大宮司同四膳
 天宮祝饗四膳 北宮祝饗四膳
 國造神護寺給人方よりきやう (饗) 三膳
 金凝神護寺給人方よりきやう 三膳
 一同 月十五日菊會之御祭、六斗、自金武名下行、法灯擬、御供神宮役御甘酒七斗、
 五升、御神樂一斗二升、人料八十八人、一升宛、組肴ニテ瓶子一具送物、

菊會

爲供僧役仁王八講アリ、饗膳ノ次第
 四 太夫御口供二膳饗十膳 八 ノ祝饗十膳
 國造祝饗十膳 諸神祝饗五膳
 吉丸供僧饗五膳 樂所檢校饗五膳
 宮司供僧饗五膳

十月

一 十月一日朔、弊米六斗、下斗、自金武名下行、 法灯十ノ祝
 一 二ノ御宮餅三百枚、三ノ御宮ヨリ金凝諸神矢村御宮百五十枚宛、鶴原中
 央兩社百枚宛、御供御甘酒、其外何モ如每朔御祭、
 一 同月初卯御神樂田二段二杖中ニ付テ御神樂ヲ勤ス、神宮役
 一 同月中卯乙卯御神樂米惣官役、宮倉御年貢二斗、下斗、樂所別當ヘ下行、
 頭人樂所別當

紅葉會

一同 月十四日紅葉會御祭禮 法灯修理檢校
 御供神宮役、御泔酒、鳥瓶子、餅ツクエ、一二ノ御宮餅三百枚、三ノ御宮ヨリ金
 凝諸神矢村御宮百五十枚、鶴原中央兩社百枚宛、宮人ハ白酒一升宛下行、廻

廊座敷ニテ三々九度、

一 同日饗膳之次第

三 太夫御^口供二膳饗十膳

七ノ祝饗十膳

國造祝饗十膳

定樂^常供僧饗五膳

御供添ノ檢校饗五膳

おとくそ次郎といはる神人饗五膳

もちのくろ饗五膳 おのの木饗五膳

一 同月十五日紅葉八講御祭

法灯一太夫

御供神官役御甘酒烏瓶子餅ツクエ、

一二ノ御宮餅三百枚、三ノ御宮ヨリ金凝諸神矢村御宮百五十枚宛、鶴原中

央百枚宛、宮人出仕方、廻廊坐敷ニテ三々九度、爲供僧役仁王八講、

同日御饗膳ノ次第

一 太夫御佛具二膳

餅机二膳

饗一膳

二 太夫餅机二膳饗一膳

三 太夫餅机一膳饗一膳

四 太夫餅机一膳饗一膳

五 太夫餅机一膳饗一膳

紅葉八講
御祭

十一月

一 十一月一日朔^幣米^{下斗}從金武名國造祝へ下行、

御供神官役、甘酒其外、如每朔日、

御餅一二ノ御宮三百枚宛、三ノ御宮ヨリ金凝諸神矢村御宮迄百五十枚宛、

鶴原中央兩社百枚宛、人料八十八人ニ白酒一升宛、下行、瓶子一具^{送物、}

一 同日^{法灯權大宮司}御祭足酒料一石二斗、御餅料一石三斗、御供神官役御甘酒七

斗五升、御神樂一斗二升、是ハ御殿ノ分、其後於御陣九積七十二膳、御甘酒、烏

瓶子土器七十二人料九積一膳宛、清酒一升宛、此時贄之鹿、御料水平田狩藏

ヨリ參ル、魚七カケ郡之浦三町島ヨリ參ル、此御祭料國衙米三斛三斗、從在

應納、同緒被出注文在別紙、

同日御幣立之御祭之御酒餅下行ノ次第

御あはら七斗五升白酒

御料水平
田狩藏

御かくら御酒一斗二升白酒
人料之次第

一御惣官之分清酒瓶子片方九積一膳二重積

一太夫 二太夫 三太夫 四太夫 五太夫 六太夫

七ノ祝 八ノ祝 九ノ祝 十ノ祝 國造祝 金擬祝

權大宮司 年祢預 修理 諸神ノ祝 擬大宮司

權擬大宮司 天宮祝 北ノ宮祝以上廿人ニ清酒一提九積一膳宛、

供僧十五人、何モ清酒一提宛、九積一膳宛

御灯三人ハ、清酒一提宛、九つミ一せんツ、

こくそのことう二人ハ白酒一提宛、九ツミ一前宛

神人ノ分

一檢校 ひとまへハ清酒一提九積一膳 一玄うくうし ひとまへハ清酒一提九積一前

一次郎貫主 ひとまへハ御酒一提九つミ一せん 一年神菌 ひとまへハ清酒一提九つミ一せん

一敷頭三まへ ひとまへハ清酒一提九つミ一せん 一灰塚菌 清酒一提九つミ一膳

一かむち神人 清酒一提九つミ一せん 一芝原神人 清酒一提九つミ一せん

一急不の木神人 白酒一提九つミ一せん 一山もと神人 白酒一提九つミ一せん

一みな口神人 一かちの木神人 一玄もをー 一かせの祝

一もどノ木神人 南坂梨 一をるさ神人 何も白酒一提九積一膳宛

樂所ノ分十六人

一そ のいち 一玄 さのいち 一か このいち 何も清酒一

提九ツミ一前宛、余十二人ハ白酒一提九積一前宛

添祝十四人 分

一ノ御宮添ノ祝 清酒一提九積一膳、二ノ御宮ノ添祝同前

北ノ御宮添祝同前、殘ル十一人ハ何モ白酒一提宛、九ツミ一膳宛

一同月初卯御祭右ニ同、

一同月中卯乙卯御祭禮如右、

一同月廿日臨時之御祭、爲惟時御願南郷下田御年貢六斛六斗八升、元弘元年

ヨリ御祭禮米納、御甘酒御供鳥瓶子、同流鎗馬十七番如恒例、爲供僧役仁王

講讀、年具權大宮司ニ奉納勤仕、

同日くらうとまち 金武名ヨリ一騎

十一月廿日
御祭南郷
臨時
惟時
下田
御祭
年禮
貢米
寄ス

十二月

一同月廿四日 供權現御祭也、

一十二月一日朔(幣)弊米六斗下斗從金武名金凝祝方へ下行、御供御甘酒諸事如每朔、

一同月初卯如右、

一同月中卯乙卯右ニ同、

一同月初卯駒取之御祭禮ノ作法

一鷹牧之神馬ヲ放チ御座ス現、權現ト神農舞官之御寵愛之神馬也、權毛ハ鶉

毛ナル龍ヲ放玉フ、神農ハ鹿毛ナル龍ヲ放チ玉フ、舞官ハ栗毛ナル龍ヲ放

給フ、此中ニ鶉毛ハ殊ニ勝レタル故ニ、月毛ノ龍ハ鷹山ノ地主吉松ニ給玉

畢、依此儀月毛之駒ハ凡眼ニハ不拜見、

一鷹牧ノ駒ヲ師走初卯ニ奉懸現、阿蘇ノ御嶺ヨリ宮地仁御社ヲ作宮遷ヲナ

ス、此時鷹牧ヨリ神馬十五匹奉牽、肥後國府里ヨリ在廳卅三人、阿蘇下宮社

へ參ル、メウシキヲ着テ、ヒフツノ太刀ヲ差ス、彼在廳等神馬ニ鞍ヲシキ、弊

神葉ヲサシ、御嶽北之御門迄奉幣、大明神即御幸ナラセ給フ、此時屋立ノ女

肥後國府
ヨリ在廳
卅三人
阿蘇下宮
ニ參ル
屋立ノ女

鷹山ノ地
主

鷹牧ノ神
馬

駒取ノ御
祭ノ作法

大明神御
嶽ヨリ下
ル

屋立ノ女
房百日籠
ノ雜用
山野役

房ハ大宮司殿ノ一家之息女、不犯ノ人ヲ撰テ、御宮ノ後ニ籠屋ヲ作り、百日
之精進、師走之初卯之日、二ノ御宮ノ御殿ニ御座テ、大明神御嶽ヨリ御幸ナ
ラセタマヘハ、此屋立ノ女房大明神之御膳ヲ備マシマス、扱御神馬ハ御幸
ノ后、職本下給ル、此内ニ卯添ノ明神之職本ニ付テ、下田方一匹下給ル、依
此例毎年師走ノ初卯ニ駒取之祭ト号ス、

一屋立ノ女房百日御籠之間之雜用、籠屋ハ役犬原ヨリ作、簀子疊共ニ、

薪ハ竹原四十町、井手本主方兩所ハ爲山野、役百日之間薪納、タキ炭ハ田尻

産山爲山野之役、炭籠三十三納、油者國衙役、百日ノ間雜用ノ國衙米六石六

斗八升、從權大宮司籠所ニ納、百日ノ間之御加用、庄内惣郷ヨリ一日一夜宛

三町三段、當十二月初卯ノ日、神官權官御嶽北御門迄御迎ニ參ル、此中ニ天

宮祝三七日前ヨリ御嶽へ籠テ、神之御幸之時、筒筒桶ヲ請取、御酒奉備、其後於

下宮御殿之御供、御甘酒七斗五升、爲二太夫役奉備、人料之分、饗膳一膳宛、御

酒一升宛、是ハ神官權官神人樂所神官權官之内ノ者半饗膳、

一國衙之御祭料六斛六斗八升、北岡諸司爲先在廳ヨリ納御酒下行之分

一六斗 露拂之酒在廳ニ下行、

國衙ノ御
祭料
露拂酒

千歲懸
萬歲懸

- 一 瓶子五十、千歲懸ト申テ、神官權官方へ下行、
- 一 瓶子五十、萬歲懸ト申テ、^(屋)矢立ノ女房ニ下行、
- 一 六斗馬屋内ノ酒在廳ニ下行、

筒桶

- 一 清酒三斗八升、神人樂所ニ下行、

堅狀

- 一 一斗、桶十七、百日精進之御酒、在廳ヨリ納、十二社ニ一掛宛、上宮一掛、北御宮
- 四掛、是ハ送狀ヲ相副、在廳ヨリ彼所之奉行
- 通、權大宮司ヨリ一通、神官一太夫ヨリ一通、文言別紙アリ、
- 一 屋立ノ女房御歸宅之人夫輿昇ノ夏、四面ノ内四十八ヶ村之役トシテ一人宛、御俱ハ神人樂所ノ役、

屋立ノ女
房歸宅ノ
人夫ノ内
四十八箇
村

- 一 同月晦日、祓之ノトノ散米一斗_{下斗}二升

己酉丑三
年ニ一度
駒ヲ休ム

- 一 己酉丑三ヶ年ニ一度駒ヲ休ル夏、口傳有別紙、

河登役

- 一 肥後國爲河登之役、御馬用途二十四貫、引注連之用途六貫文納之、

毎月ノ大
明神講

- 一 每月上ノ卯ノ日大明神講有リ、

阿蘇北宮
四社并兩
伽藍二社
寫事次第

北宮四社御祭并兩伽藍二社

正月

一 正月朔日御祭

法灯北宮祝

下野御狩

- 一 四社之分御供五升盛、御泔酒五升宛、兩伽藍者、御供三升盛、御甘酒三升宛、
- 一 社之宮人集リ、御神宮諸事如下宮社、

踏歌會

- 一 同月初卯下野御狩之御祭禮有リ、
- 一 同月十三日踏歌會ノ御祭禮下宮社ニ同、

二月

一 二月朔日御祭禮右同前、

一 同月初卯、春神主御祭禮足、金武名田地三町所當米ヲ以テ奉勤仕、

一 同時注連下之次第、御酒瓶子三具、斗入ノ俵ニ九積ノ餅十二膳、御盃ノ土器

三膳、月日ノ餅二前、天人御鏡十二前、杵形餅二前、ノトノ散米三升三合、幣串

五尺二寸、阿蘇三社 片角大明神四社 下宮十二社奉勸請、

一 郡浦御贄使時ノ次第

御飯三升盛、八數之御膳二前 二升盛一膳、一升盛一膳、御酒一斗五升下行、

一 酒開次第

一家見次第、何モ御供御甘酒上注、同宮人下行、上同、

家見

酒開

片角大明
神郡浦御贄
使

一夜直宿御祭ノ夏、御供御甘酒、御神樂、宮人御酒下行如恒例、
 一日之晴御祭料、御年具^(貢)二斛、御供御甘酒如恒例、九積之御餅四百八十膳、同時
 饗膳一升盛、九積一膳ツ、下行、北宮祝役、

三月

一 三月朔日御祭禮如前、
 一 同月初卯如右、

四月

一 四月朔日御祭禮右ニ同、
 一 同月初卯御祭禮如右、
 一 同月四日風追御祭如下宮社、

風追御祭

五月

一 五月朔日御祭禮如前、
 一 同月初卯御祭同前、

六月

一 六月一日之御祭禮右同、

御田會

一 同月初卯御祭右同、
 一 同月廿四日御田會之御祭料米^{金伏}一斛五斗、爲惣官役、當庄之年貢之内北宮祝
 方へ下行、

一出仕之規式、御幸供奉之次第、諸事下宮社之規式ニ同前、
 一 駕輿丁昇之次第

前ノ口^{左ハ春神主之頭人ヨリ一人出サル、右ハ冬神主之頭人ヨリ一人出サル、}後ノ口二人ハ北宮祝ヨリ被
 出、

一大鼓持之事

前ノ口ハ春神主之頭人權大宮司方ヨリ被出、
 跡ノ口ハ冬神主之頭人ヨリ差繩以テ被出、

一 北之御宮之御田木ニ屋形ヲ作在所ノ事

一口一間 井手本主方ヨリ作、

其次一間 手野本主方ヨリ作、

其次一間 大津留方ヨリ作、

其次一間 國造神護寺ツリ、^{金擬神護寺瓦籠}、^{匂らい}寄合作、

北宮御田
木ノ屋形

其次一間 不動塚 寄合作、

一 彼材木梁三尋三尺 一柱長三尋三尺一丈間五間

一座敷配之次第

上座ハ惣官御座敷 左坐ハ神官ノ坐敷

右座ハ權官ノ座敷 中坐ハ 天宮祝 左右

後供僧座敷同末座ハ御灯座

一 同時御供屋ハ神官役

一 同時御こゝやすめ屋形、神官役

一 同時早乙女十二騎屋形、神官役

一 同時惣官御分之早乙女屋形、東方西方沙汰ノ者、四面之内沙汰ノ者、美濃次郎地引十郎太郎三人ノ役

一 天宮祝之早乙女ノ屋形、天宮祝役

一 獅子屋形、小里シツケンノヨリ作ル、

一 獅子屋形

七月 一 七月朔日御祭右同、

東方西方沙汰ノ者

獅子屋形

風逐祭

一 同月初卯御祭右同、

一 同月四日風逐御祭四月風追御祭ニ同、

八月

一 八月朔日御祭右ノ如、

一 同月初卯御祭禮如恒例、

九月

一 九月朔日御祭禮同前、

一 同月初卯御祭禮如前、

十月

一 十月朔日御神事如前、

一 同月初卯御祭禮同前、

一 同月中卯冬神主御祭禮、御供御甘酒御神樂人料之注文在別紙、

法燈 諸神祝 冬 北宮神 主 廻頭人

十一月

一 十一月朔日御祭禮同前、

火迎御祭

高橋大明神
火宮大明神

兩社御祭足

同月初卯御祭如右、
一同月中卯火迎御祭ノ次第

霜月中酉ノ日酉ノ時、高橋大明神、火宮大明神兩社宮人、御社ニ籠候而、毎日
毎夜々宿直、丑ノ日之丑ノ時迄舞奉ル、宮原ヨリ火迎ノ木マテ舞上テ、寅ノ
日ノ刁ノ時、兩社宮人阿蘇山之火迎ノ篠マテ送り奉ル、

一兩社御祭足之事

冠形ノ郷

空志津里

平瀬

北里

宮ノ原

灰原

北河内

室原

波津田

冠形ノ内

西里

東郷

江古尾

尻江田

荒倉

注連内

北郷

秋原

田原

脇戸

中敷

垂水

赤濱

椎屋

下城

其余郷迦

寄合四解八斗、御祭足以テ奉勤、

火迎ノ篠

一阿蘇十二社宮人、刁ノ日寅ノ時、火迎ノ篠マテ參リ、兩社ヲ舞□取奉、此時兩
社之御供御甘酒、阿蘇小國宮人饗膳、下斗ノ一升宛、御酒三々九度、宮人ニ備、

日晴御祭

郡浦御贄
小里内ノ
牧

幣草紙

其后北ノ御宮ニ兩社ヲ奉納、寅日夜宿直舞奉ル、火迎之御祭頭人冬神主奉
勤、

一夜宿直御祭頭人、諸神祝役、御酒清酒三々九度、饗膳下斗ノ一升盛、八數膳檜
物土器、諸神祝役、饗膳、夜中曉三度、何モ三々九度、御甘酒白酒、

一夜宿直薪、下宮十二社神官役

一日晴御祭幣絹膝跪絹膝免田二段二丈中、并手次本主方ヨリ二御宮御供田
ニ付テ、二太夫知行ヨリ絹出ス、

一薪受取役人、十二社添祝、立明役人、平七障子兩人、膝跪絹取次、檢校役、夜宿直
祭、催促立明奉行、小宮司、次郎貫主、美濃次郎三人、日晴之祭奉行、數頭、美濃次
郎、御馬引役人、次郎貫主、請取役人、北御宮添祝、其後大宮司殿參轡、北宮祝給
ル、

一郡浦御贄、眞口魚三喉貫二掛、小里内ノ牧狩藏ヨリ參御贄、猪鹿左脇ニ掛奉
ル、

一火迎御祭ノ時、幣草紙(幣下同)廻神主職本ヨリ參ル、

一夜宿直御祭之時、幣草紙、諸神祝役

日迎御祭
十九年ハ
ルニ廻リ來

小苗代

日晴御祭

檜物土器

十二月

鶴原社

毎月初卯
ノ御神樂

一日晴ノ御祭弊草紙、北宮祝役
一日迎御祭頭人、神官權官廻神主田ニ付テ、十九年廻來ル御祭勤ス、同郡浦費御使ウケトル、

一夜宿直御祭田小苗代古苗代、諸神祝職役

一日晴御祭米御年貢二石受取、北宮祝役、清酒一升宛、九積餅一膳宛、宮人下行、同時七十五膳饗膳、七十五提白酒、中司三人下行、

一檜物土器何モ三人祭ノ法灯役

一神官權官座敷右廻廊、供僧座敷左廻廊、神人樂所添祝坐敷舞殿、神人ハ樂所ノ上、樂所ハ添ノ祝之上タルヘシ、

一十二月朔日御祭禮如右、

一同月初卯御祭同前、

鶴原

一十二月朔(幣)米一斗二升宛、同御供七社ニ二升盛、御□ニ奉備、毎月初卯御神

濱宮七社

鶴原七社

樂八升宛奉備、三月三日五月五日七月七日九月九日中ノ卯師走初卯此六ケ度之御祭、御供甘酒、何モ七社同分ニ奉備、六月廿日ニ南坂梨ヨリ、下宮十二社臨時之祭ノ時、南坂梨ヨリ濱宮七社之御供甘酒奉備、役田ニ付テ、御祭一年ニ三十一度、南坂梨臨時之祭、以上三十二ケ度之御祭也、職本山部一ノ祝法頭之役、於末代不可有懈怠、鶴原七社則是也、
一湯ノ浦狩尾田地開始テ、土貢ノ年具(真)、毎年不闕、遂結解、鶴原七社之御服、同御寶物、同御社造立、毎月式日御祭料御供甘酒奉勤仕、

法灯山部一太夫

一濱之宮、右同前之御祭也、

霜宮御祭
ノ次第

霜宮御祭之次第

一正月朔日御祭

一同月十五日御祭

一二月初卯御祭

一三月三日御祭

三人ノ祝役

二ノ祝

火燒屋

一五月五日御祭
 一七月一日御祭米、宮藏御米一斗_{下斗}五升、紙一帖、七五三別之号御祭祝ノ所ニテ
 増水ニテ酒三獻、其后門ニテ清メ之御祓アリ、酒三獻、籠屋ニ被參、又酒三獻、
 一同月七日御祭足、宮藏御米二斗、籠屋所ニテ_{祓神酒ヲ備三獻、火燒屋ニ明神御遷被成}御供御甘酒ヲ奉備、宮人ニ食蓼
 寒汁ニテ酒三獻、

綿ぬくめノ

籠女

一八月朔日ニぬくめ_綿御綿奉着、御供御酒ヲ備清之御祓ニテ酒三獻、次ニ籠
 屋所ニテ宮人ニ飯酒三獻、右御祭祈一斛一斗五升、内三斗ハヌクメノ御綿
 ノ代、一斗ハ御祭米、七斗五升ハコモリ女ノ扶持方、
 一九月六日ニ御宮移被成候時、神酒奉備、宮人ニ酒三獻、コモリヤ所ニテ吸物
 ニテ酒三獻、次ニ肴ニテ酒三獻、家顔ニテ謠明シ申候、

火神ノ舞

一同七日籠屋所ニテ餅ヲ宮人ニ備、酒三獻、火ノ神之舞殿ニテ灌頂之祝詞、花
 米一升三合、神酒奉備、酒三獻、籠屋所ニテモ酒三獻、

宣命

一同八日宣命中集リ_幣弊帛ニ打立申時、紙五帖、花米一升三合、酒一獻、次ニ押餅
 宮人ニ備、酒三獻、次ニ著餅ニテ三獻、夷祭籠屋部やまてお餅ニ鱒蓼ノヌ
 タ膾、部や之神ニ備へ、宮人ニモ同前、酒三獻、又宮ニ參、花米一升三合、神酒ヲ

夷祭

ふたけ祭

氏神祭

酒部屋
籠屋夫婦

精進祓

供シ、酒三獻、神樂成就ニ酒三獻、次ニコモリヤ所ニテ飯酒三獻、次ニ舞殿ニ
 テ酒三獻、次ニ花ノ御酒取肴ニテ三獻、次ニコモリヤ所ニテ小豆粥ニ餅入、
 酒三獻、次ニ火神成就之時、籠屋所ニテ宮人ニ押餅ヲ備、ヌタ膾ヲ引、酒三獻、
 吸物ニテ三獻、肴ニテ三獻、次ニ朝飯酒三獻、次ニやぶけ祭、花米一升三合、御
 供御酒備、次ニ氏神祭押餅四枚、酒ノ糟、神酒ニテ八日ヨリ九日迄成就、次ニ
 酒部屋ニテコモリヤ夫婦酒ヲ飲、其盃ニ白米ヲ入、折敷ノ内ニフセ、盃ノソ
 コニ白米少入、神酒を上申候而、籠女宮司兩人ニ酒三獻ニ而九日之御祭成
 就仕候、九日之朝馬草片稻一把上ル、
 右、九月六日ヨリ九日迄御祭料ニ神田三反ニ而仕舞申候、
 一七月一日ヨリ九月九日マテ精進祓七十余ケ度、散米九斗九升九合也、
 一八月十五日御祭 阿菴南郷進ノ米ニテ コモリヤ
 一霜月十五日御祭 同

今按ニ、此書ハ權大宮司歟、又ハ社方ノ自記ナルヘシ、但本書ウツシ
 ト見ユ、又此ニ鶴原霜宮ハアリテ、矢村社ヲハシメ、其餘ノナキヲ思
 ヘハ、スエ脱シナルヘシ、

〔阿蘇文書寫 第二十〕

(年 月 日 未 詳) 阿蘇社四季神事諸役次第寫 阿蘇家文書上 第三二二號
天文六年六月十八日 阿蘇社早乙女雇在所注文寫 阿蘇家文書上 第三〇九號

左ノ書付、始ノ方脱落シテ傳ハラヌ、

阿蘇社寶
前文永十
年長札注
文寫ノ檢
書夜ノ檢
見使ノ檢
番衆不參
ノ科砂ハ
人別砂ハ
本並木一

- 一 太夫ヨリ初テ權官ニ至マテ、以結番晝二度夜二度檢見之使ヲ可參、番衆ノ有無ヲ知シ爲ナリ、若不參ノ仁アラハ、人別ニ砂二駄可弁申、御宮後竹林ヲ南へ通シテ、高サ四五尺、若ハ二三尺木ヲ人別ニ二本ツ、并木ニ可植申、柳櫻槻杉の木間ナルヘシ、加様定ヲカレ候へとも、此之外も植木可然候、
- 一 供僧參詣之事
天供之時、天上之供僧六人不足之条、依其恐候、特ニ穢氣ナカラントキハ、可參、若差合アラントキハ、人ヲ雇可勤、爲如在入籠ハ、就一和尚可錄申候、
- 一 御宮四壁倒木落木之事
御宮ニ向テ臥タル木ハ、修理檢校沙汰トシテ可計、タマカキノナミキナリトモ、御宮ヨリ外へ向テフシタル木ハ、權大宮司爲沙汰可計、

御宮四壁
木ノ倒木落

社内ニ牛
馬ヲ放チ
近道スル
ヲ禁ズル
科ノ料ニ
營ノ料ニ
微ノ料ニ
ス

廻廊拜殿
ノ掃除

阿蘇社神
事注文寫
社家ノ關
職ノ關
御宮田
免田

- 一 於御社内牛馬ヲ放入、又者權殿御供屋御後近道仕候スルモノハ、見合ニ宮番之者搦取候て、庄家ニ可渡、爲其料御宮ノ爲造營、方六寸ナカサ三尋三尺木一本ツ、人別ニ可納、
 - 一 於四廻廊コソレ候スル木竹坂風情取候する者、其分ニシタカイ材木トラスヘシ、
 - 一 廻廊并拜殿之塵ヲ可掃之事
毎月式日之御神事之時者、敷頭之役トシテ可掃、其外ハ宮番之者毎日朝清スヘシ、
- 右、此條々加催促、或狼籍之事アラントキハ、加制止、或庄家ニ可申狀如件、
文永十年四月日御宮長札面之注文
勝善寺殿自筆ニ御書置候間、御社頭之也、
- 一 社家二十人之内關職候時者、爲權大宮司役御祭禮取次申候事
 - 一 御宮田之事、預申候而分別仕候支
 - 一 免田之事、仕程候共、作立候而、宮藏ニ可納置、爲御建立可仕候爲ニ末代之一

五月會

一五月會御祭禮之時、社家競馬次第

初ノ一はういハ

一太夫 一騎

權大宮司 一騎

次ノ一はうい

二大夫 一騎

歳預祝 一騎

次ノ一はうい

三大夫 一騎

修理檢校 一騎

一九日會御祭禮競馬次第

初ノ一はうい

四大夫 一騎

諸神祝 一騎

次ノ一はうい

五大夫 一騎

擬大宮司 一騎

次ノ一はうい

六大夫 一騎

權擬大宮司 一騎

九月會

十一月廿日臨時祭禮

一十一月廿日臨時之祭禮競馬之次第

初ノ一はうい

七祝 一騎

北宮祝 一騎

次ノ一はうい

八祝 一騎

天宮祝 一騎

次ノ一はうい

九祝 一騎

新檢校 一騎

右、此條不可有異儀、可守先例者也、

若一大夫出仕解怠候時者 (解下同) 二大夫可乘、

二太夫出仕解怠候時者 三大夫可乘、

三太夫出仕解怠候時者 四大夫可乘、

四大夫出仕解怠候時者 五大夫可乘、

五大夫出仕解怠候時者 六大夫可乘、

六大夫出仕解怠候時者 七祝可乘、

七祝出仕解怠候時者 八祝可乘、

十一月廿八日
弘安元年
祭禮時
惟元
時創

八祝出仕解怠候時者 九祝可乘、
 九祝出仕解怠候時者 一大夫可乘、
 一權大宮司出仕解怠候時者 年預可乘、
 年預出仕解怠候時者 修理檢校可乘、
 修理檢校出仕解怠候時者 諸神祝可乘、
 諸神祝出仕解怠候時者 擬大宮司可乘、
 擬大宮司出仕解怠候時者 權擬大宮司可乘、
 權擬大宮司出仕解怠候時者 北宮祝可乘、
 北宮祝出仕解怠候時者 北宮祝可乘、
 天宮祝出仕解怠候時者 山口新檢校可乘、
 新檢校出仕解怠候時者 年預可乘、
 如此以結番無解怠可勤出仕者也、
 一十一月廿日臨時之御祭禮、元弘年中ヨリ初ル、惟時之御願、御祭米南郷下田
 郷御年貢六石六斗八升御寄進、御供米同酒祈下行、
 御供米

流鑄馬射
手次第

三斗一太夫下行 三斗二大夫下行
 一斗五升三大夫下行 一斗五升二大夫下行
 一斗五升五大夫下行 一斗五升六大夫下行
 一斗五升七祝下行 一斗五升八祝下行
 一斗五升九祝下行 一斗五升十祝下行
 一斗五升國造祝下行 一斗五升金擬祝下行
 一斗五升羈原之分 一斗五升中央之分
 一斗五升諸神祝下行 一斗五升矢村祝下行
 二斗北宮祝下行 二石九斗
 三斗裏手さうせり米
 八升御泔酒之分 檢校下行
 三石四斗酒祈權大宮司請取
 一鑄流、如恒例射手次第
 一番表手 二番南郷田中
 三番下田 四番市下

五番大野

七番(早奈良)
くさわり(草壁)

九番北坂梨

十一番熊崎

十三番竹原

十五番藏原

十七番高山發手

六番(柏)

八番南坂梨

十番野阿蘇品中

十二番井手

十四番(野)立田方

十六番(小)小田

御田御祭具足注文

一 御馬二疋

一 御くらくそくふきのまりかい

一 きやう□うのかさひら二

一 こうをいかさひら二

一 ふとたひ二

一 ちさうは二

一 あふき二やん

一 へに

一 もとゆひ二

一 あやるかかさ二

一 からかさ二やん

一 ひきさしあひ二すち

一 かけのたひ二すち

一 さうじ二そく(雑色) 御まやの人(南郷)あんかうの御とも

かいまやく御とも
りのやくまて候

大概注文如件

一 流(馬) 五月五日右兩度の御まつり

一 三月十五日(櫻會)の御まつり

一 九月十五日(菊會)の御まつり

一 七月十五日(蓮華會)の御まつり

一 十月十四日(楓葉)の御まつり

一 十月十五日(薄紅)の御まつり

阿蘇家文書下

一下野御狩(狩) 正月廿日、二月うの日

文明四年十月十二日阿蘇社并本堂修造棟別壁書案寫

應永廿八年八月 日
應永廿六年九月廿四日

神事祭料諸役等捷書寫
阿蘇社寶前文永十年長
札注文寫

阿蘇家文書上 第二四〇號
阿蘇家文書上 第二三七號

三文充ノ棟別

棟別壁書案 定 三文充棟別事

十一月申中ニ進納スベシ

右爲 阿蘇十二之社并本堂修造任舊例所促之也、各領内不殘一字相調、十一月中可令拜進、萬一至無沙汰輩者、忽招 神罰於其身歟、抽信心而宜馳走者也、
文明(四年) 壬辰冬十月 日

文安五年八月十八日

阿蘇社造營木屋勤仕人數番定寫

阿蘇家文書上 第二六三號

正平十八年閏正月廿五日

阿蘇社造營料木納帳寫

阿蘇家文書上 第一七三號

應永九年四月 日

阿蘇社造營料木郷村支

阿蘇家文書上 第二一六號

正長二年八月廿一日

阿蘇社造營料木郷村支

阿蘇家文書上 第二五三號

長祿二年七月廿五日

阿蘇社造營料木郷村支

阿蘇家文書上 第二七〇號

天文廿三年八月七日

阿蘇社造營料木郷々支

阿蘇家文書上 第三一九號

〔阿蘇文書寫 第二十一〕

(年) 月 日 未 詳) 阿蘇社上葺等次第寫 阿蘇家文書上 第二七九號
自元德二年正月十四日 阿蘇社造營文書寫并記錄 阿蘇家文書上 第二九一號
至明應八年八月 日 寫
○右ノ造營文書寫ニ、既刊阿蘇文書之一第八七四頁、赤丹田分二本内云
々ノ行ニ續キテ、左ノ記事アリ、併セテ載スベキモノナリシモ、今コ、ニ
收ム、宜シク參看スベシ、

一 琳臺房跡分

倉原二本内 一本(一宮母屋)長一丈一尺七寸口一尺二寸五分
一本(四宮母屋)長一丈一尺七寸口一尺二寸五分

一 万力分

西里二本 四宮母屋長一丈五寸口一尺二寸五分

一 勢得分

宇步山一本 四宮母屋長一丈五寸口一尺二寸五分

右、守注文、遂檢見可被注申之狀如件、

元德二年二月廿三日

一 和尚 宮司 同丸 定禾 勸力

阿蘇文書之二

阿菴家文書下

福樂 得万 財得 勢得 神用
千徳 吉丸 万歳 萬力 長壽丸

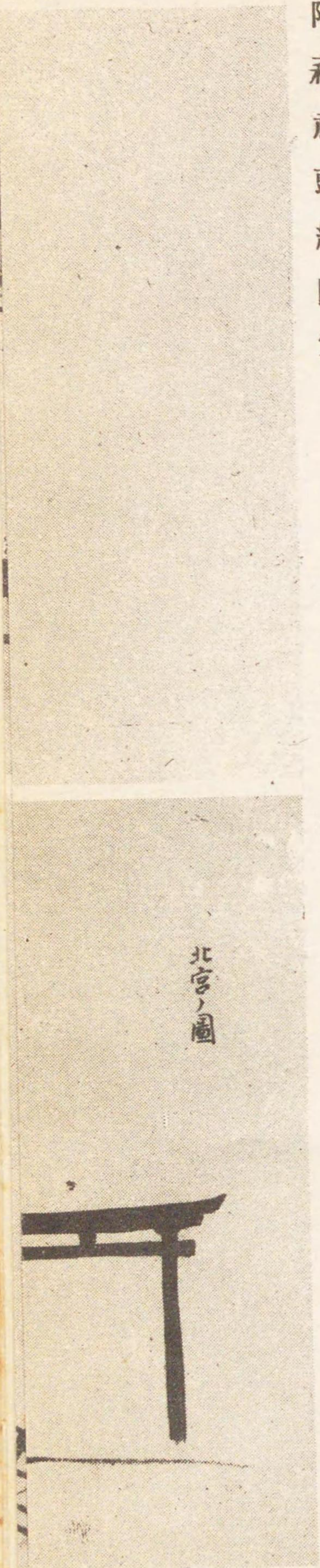
合點分、天上供僧也、六人、

權大宮司

觀應二年十一月廿五日	阿菴社廻廊下行稻注文寫	阿菴家文書上 第一四三號
正平七年八月 日	阿菴社廻廊役人并料足下	阿菴家文書上 第一四四號
天文十七年九月十日	阿菴社經坊所食堂料木切	阿菴家文書上 第三一五號
享祿元年閏九月十八日	阿菴社下宮經坊食堂再興料	阿菴家文書上 第三〇六號

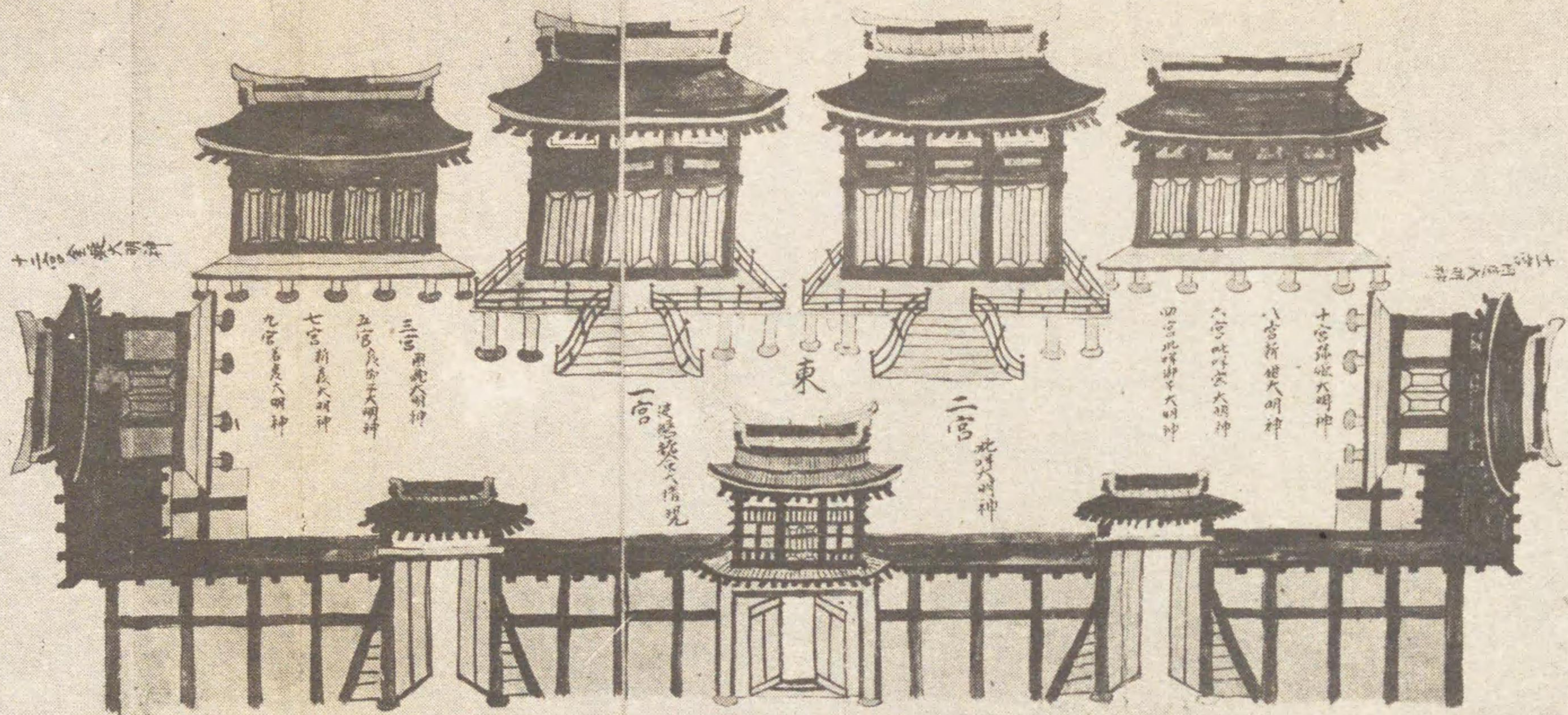
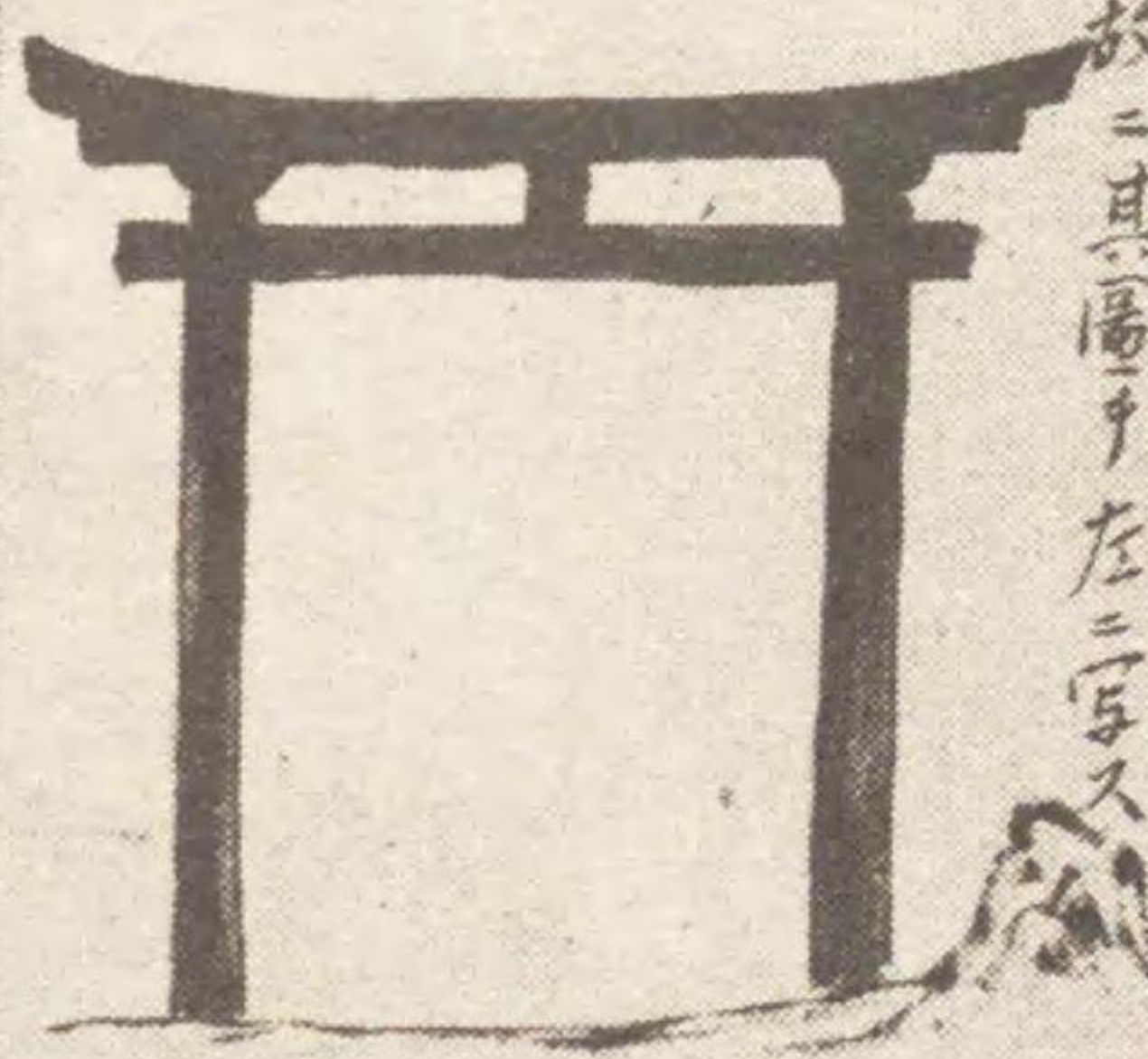
○コノ次ニ、阿菴社縁起繪卷斷簡ノ寫アリ、圖版トシテ左ニ挿入ス、

阿菴社頭繪圖寫



北宮ノ圖

宮殿ノ圖永享此書名卷物アリヤ中
 東故上ノ御所ノ圖在事ヲ記セリ是殿中
 姿モ大概シラレ故ニ其圖ヲ左ニ寫ス
 按ニ鳥居ノ横ニ記シタルハ
 儀ノ前ニ圖スルコト成
 難キ故ナリ

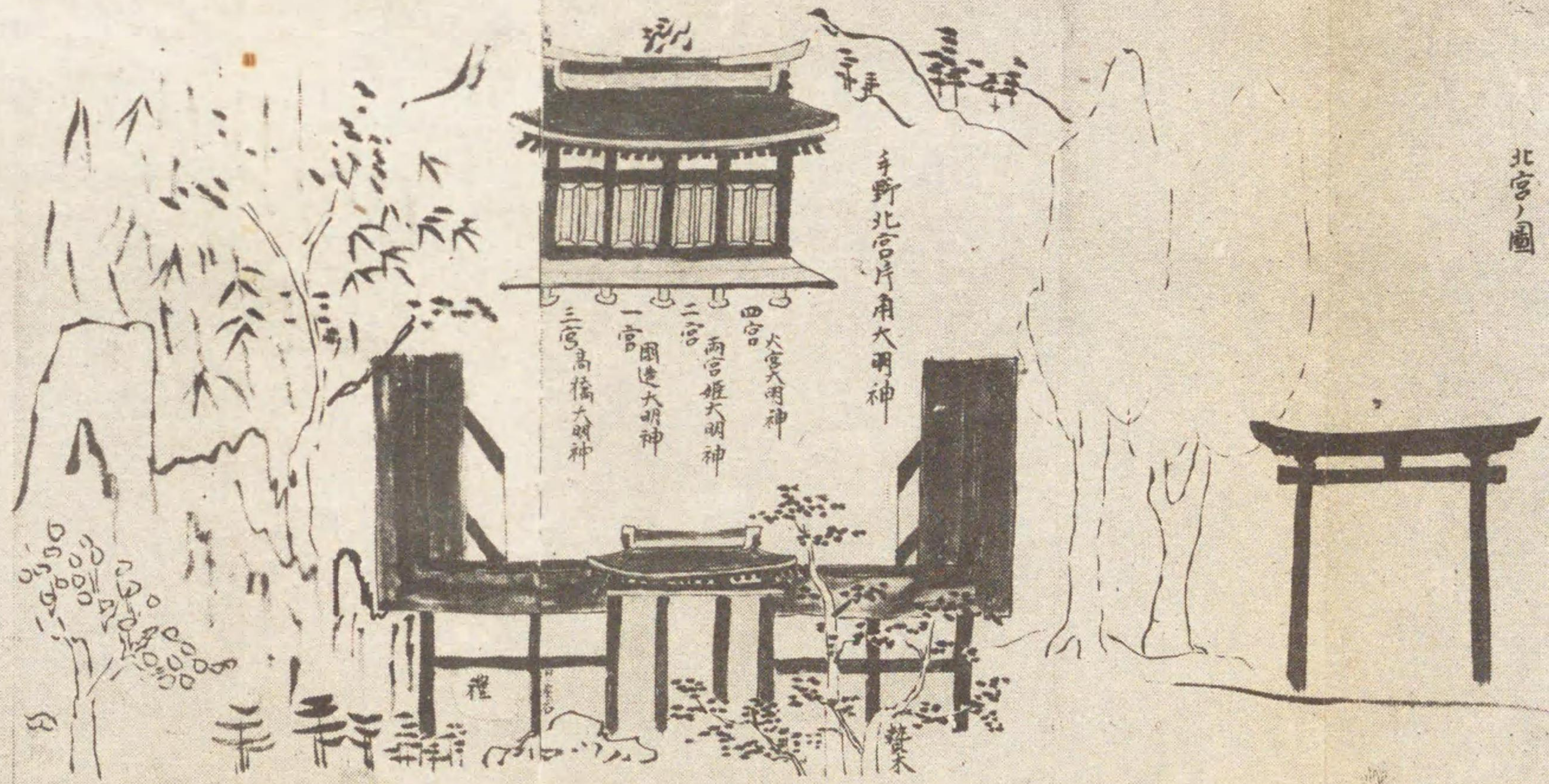


建武二年五月十三日二三四五六九宮御所ノ圖トシテ寫ス

一宮

二宮

北宮ノ圖

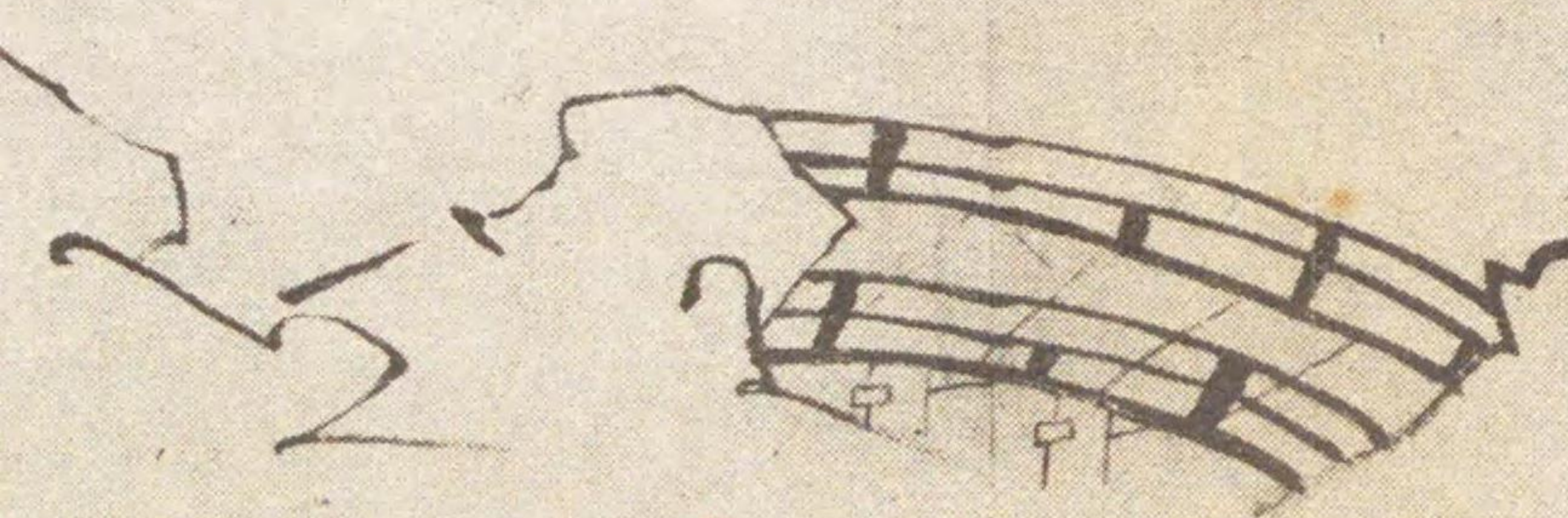


北宮ノ圖

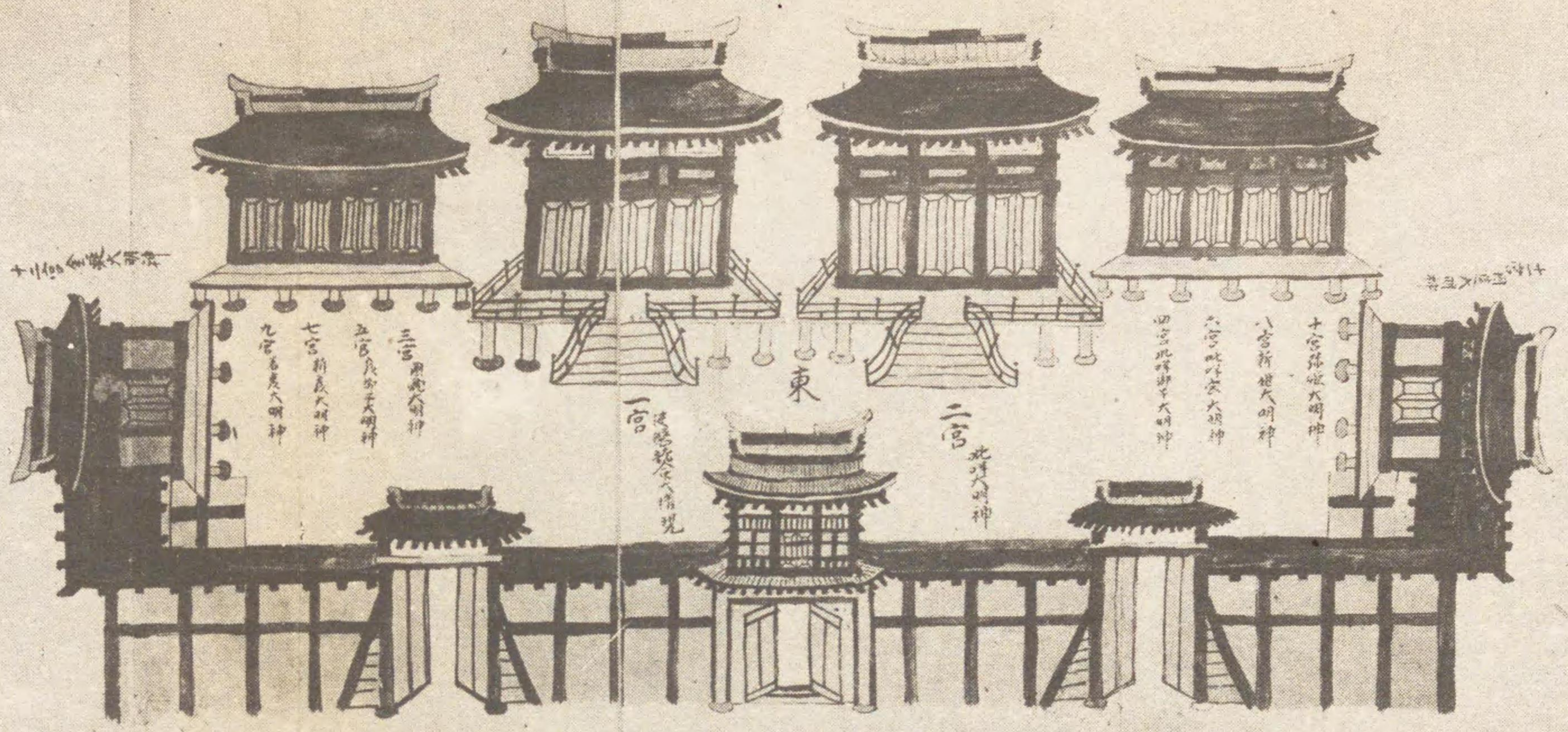
一宮
二宮
三宮
四宮
五宮
六宮
七宮
八宮
九宮
十宮

右圖中ノ殿舎永享中抄書ノ趣ヲ以テ考レハ并
 殿所構殿等ハ思ヒリト見エ只神殿近ノ圖ニ九
 宮

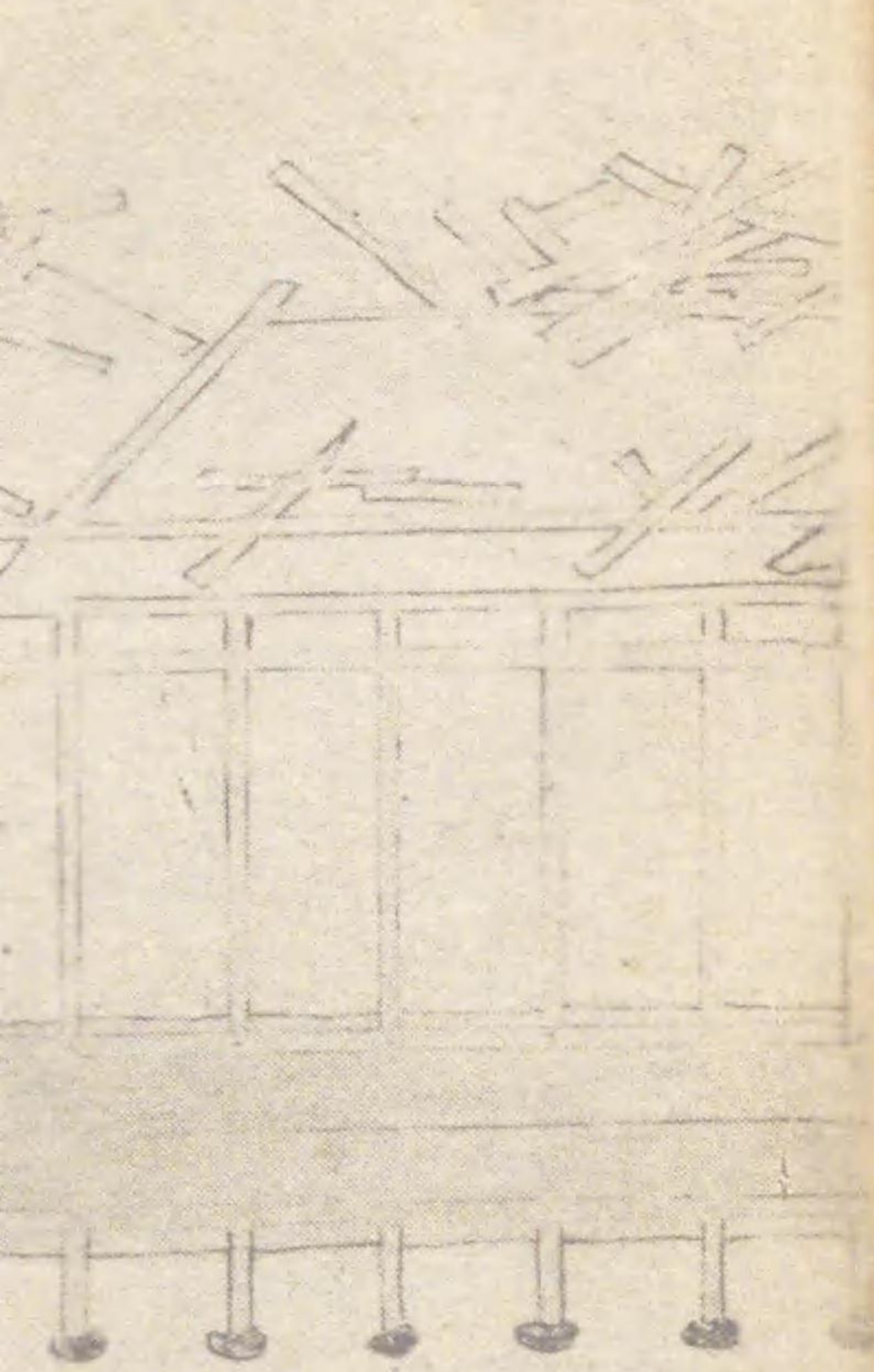
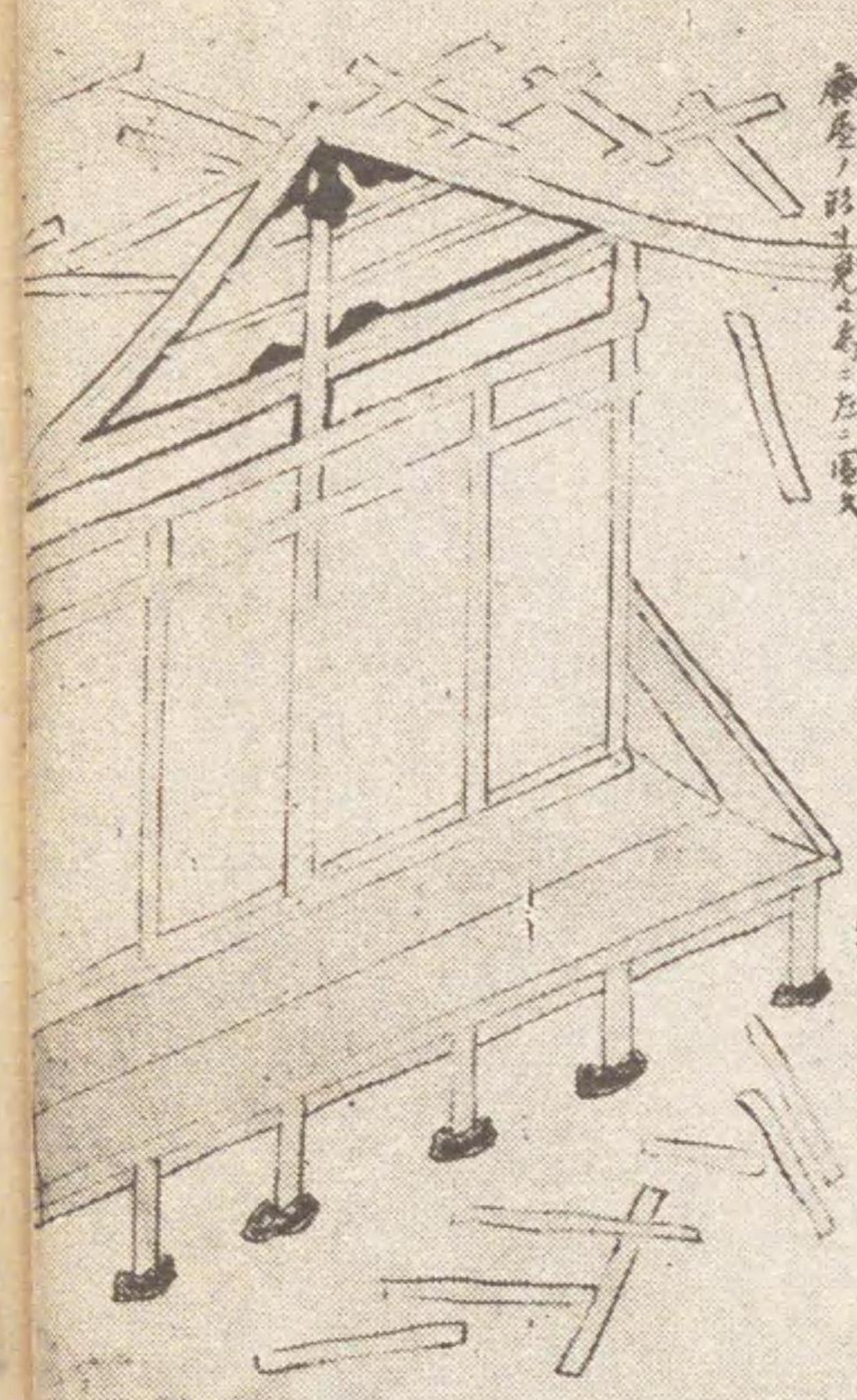
建武二年四月記ハ二宮ノ門ノ趣ヲ以テ考レハ并
 四ノ所中ノ一ノ所ノ趣ヲ以テ考レハ并
 相違キ一ノ所ノ趣ヲ以テ考レハ并
 年ノ一ノ所ノ趣ヲ以テ考レハ并
 山上ノ一ノ所ノ趣ヲ以テ考レハ并
 一ノ所ノ趣ヲ以テ考レハ并
 本ノ一ノ所ノ趣ヲ以テ考レハ并
 上ノ一ノ所ノ趣ヲ以テ考レハ并



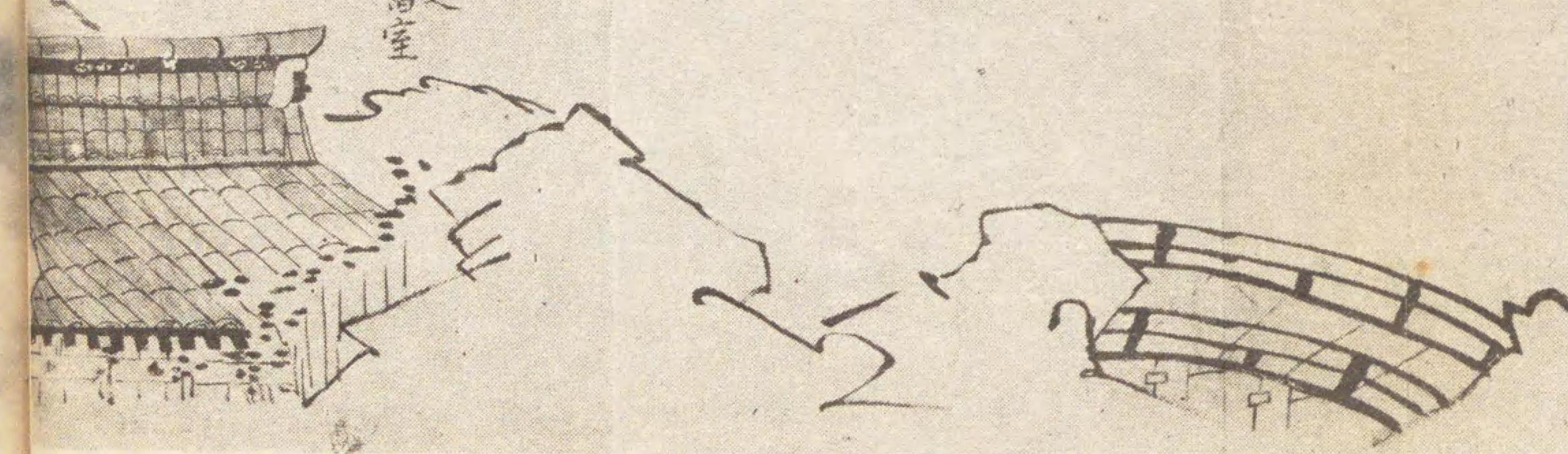
此之大概シテハ故ニ其圖ヲ左ニ示ス
 依テ小ノ新ニ圖スルコト成
 難キ故ナリ



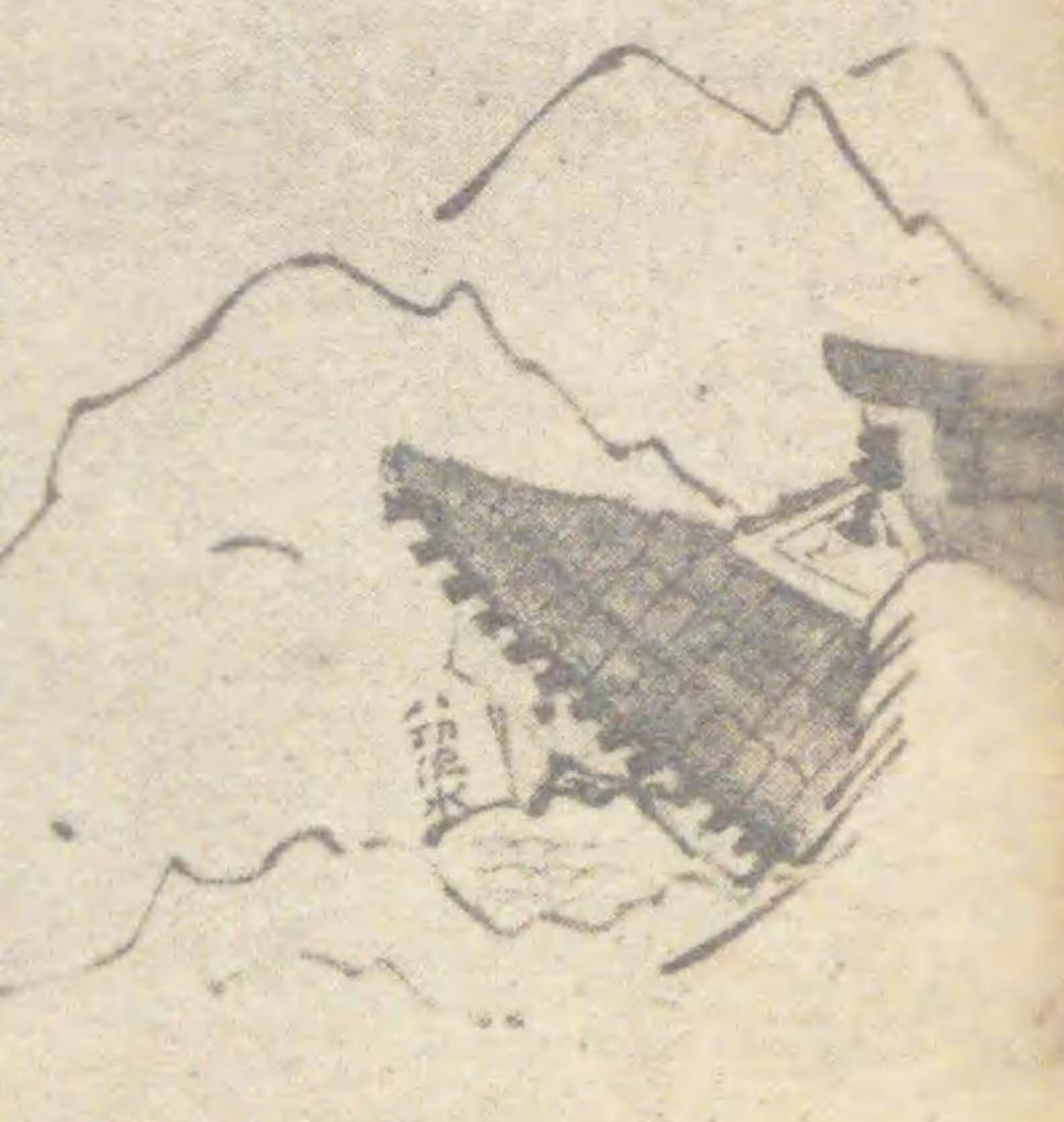
同建武二年五月十三日風十ノ下宮殿御所圖



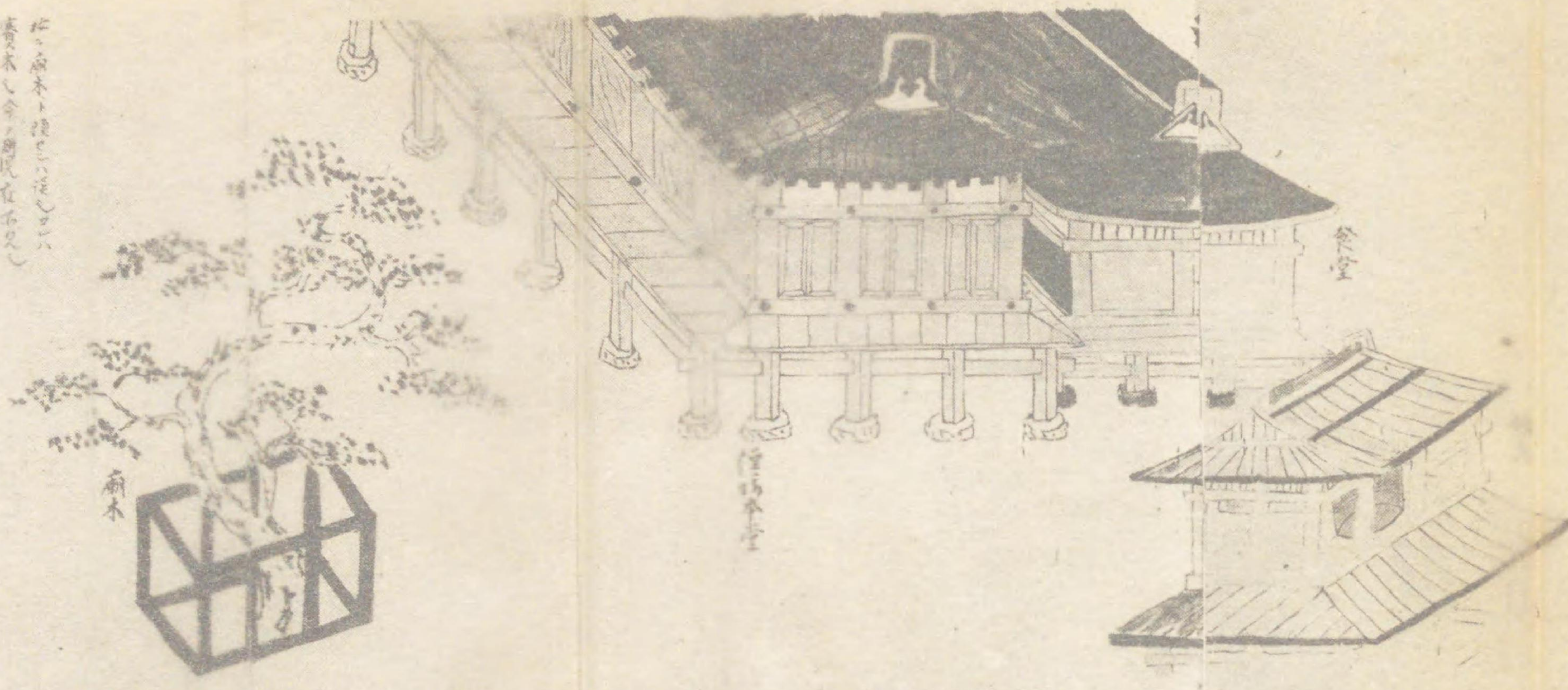
右圖中ノ殿舎永享中圮害ノ類ナリテ考レハ并
 殿祈禱殿等ハ畧セリ見工只神殿近圖ニ示
 歟
 同建武二年五月十三日二三四五六九宮御所圖
 同建武二年五月十三日二三四五六九宮御所圖
 同建武二年五月十三日二三四五六九宮御所圖



本堂西殿殿最榮師之
 高室

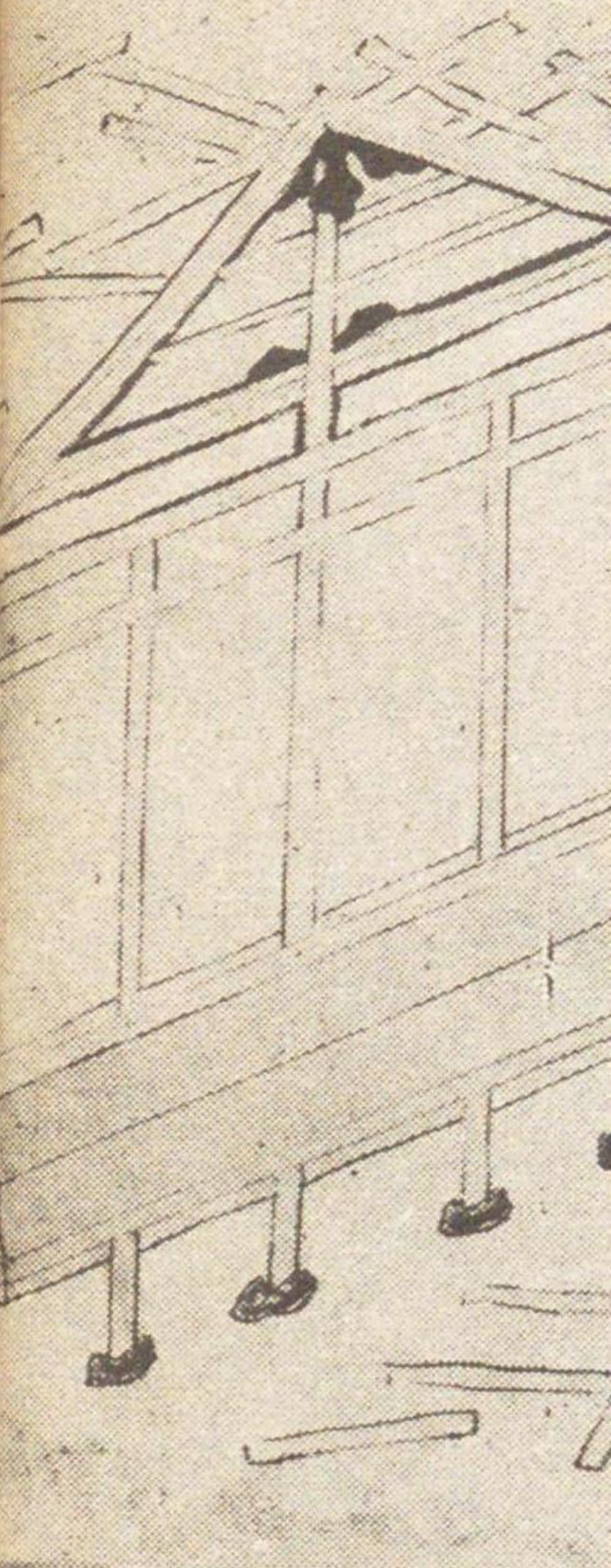
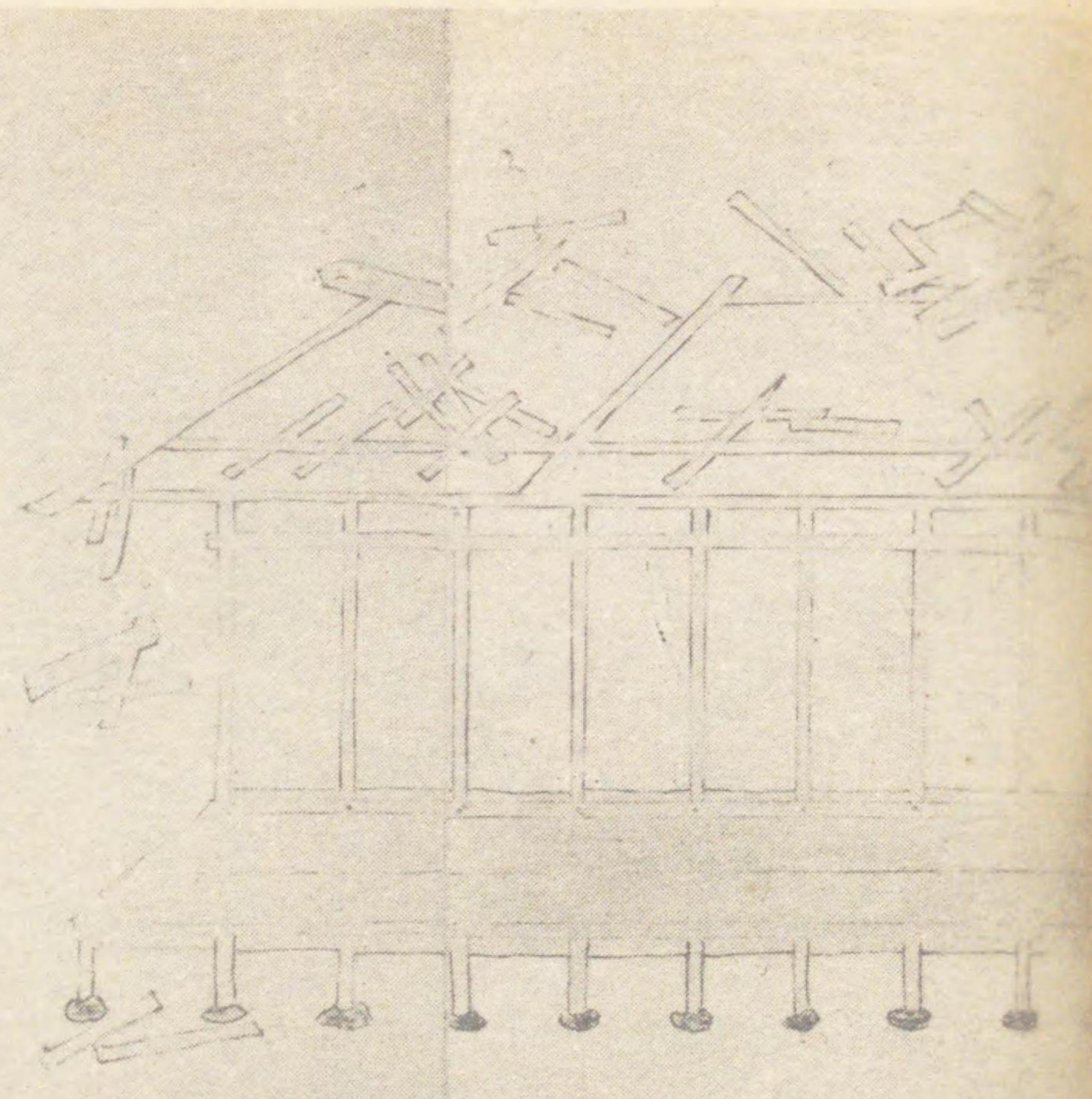


此の庭木ト樹々トシテ
春ニ木々今ノ時ノ民
在ル也



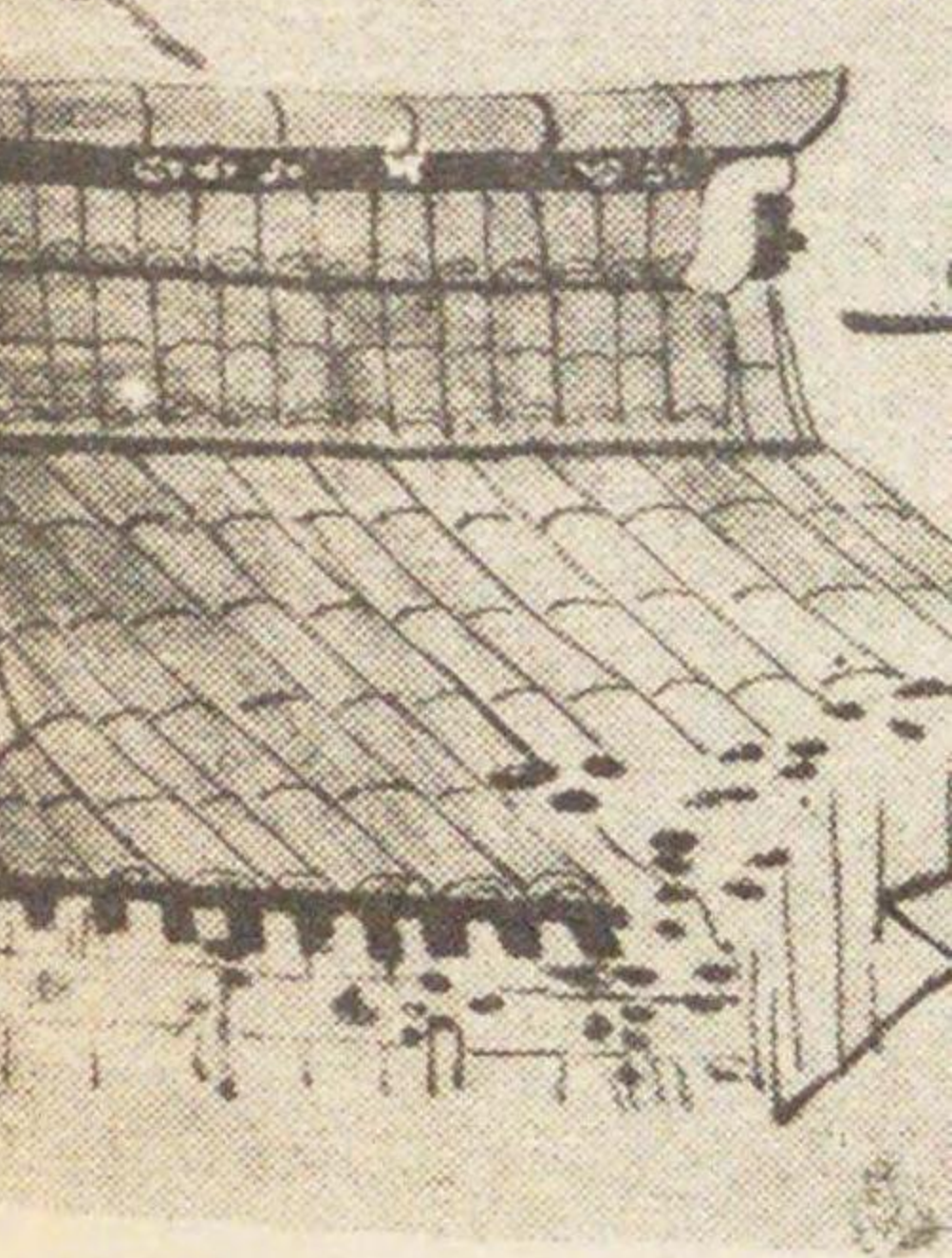
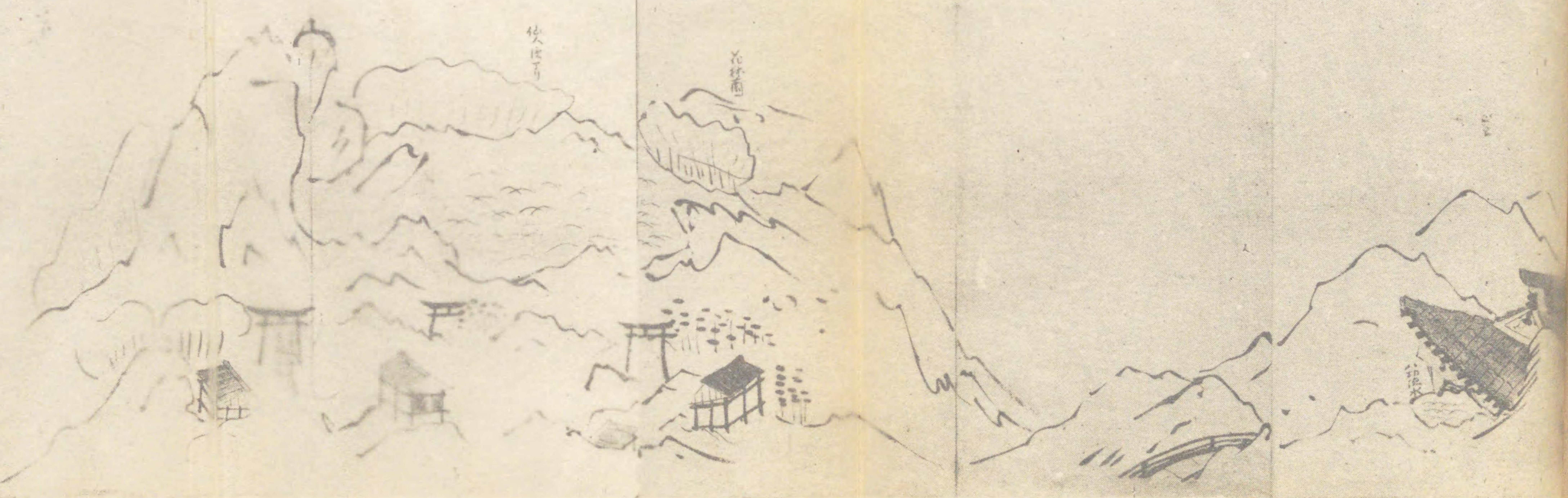
経坊食堂ノ圖

此圖ハ新嘗ノ時トシテ
今ノ此ノ國ニ在ル
ノ民ニ示スル
ノ意ナリ

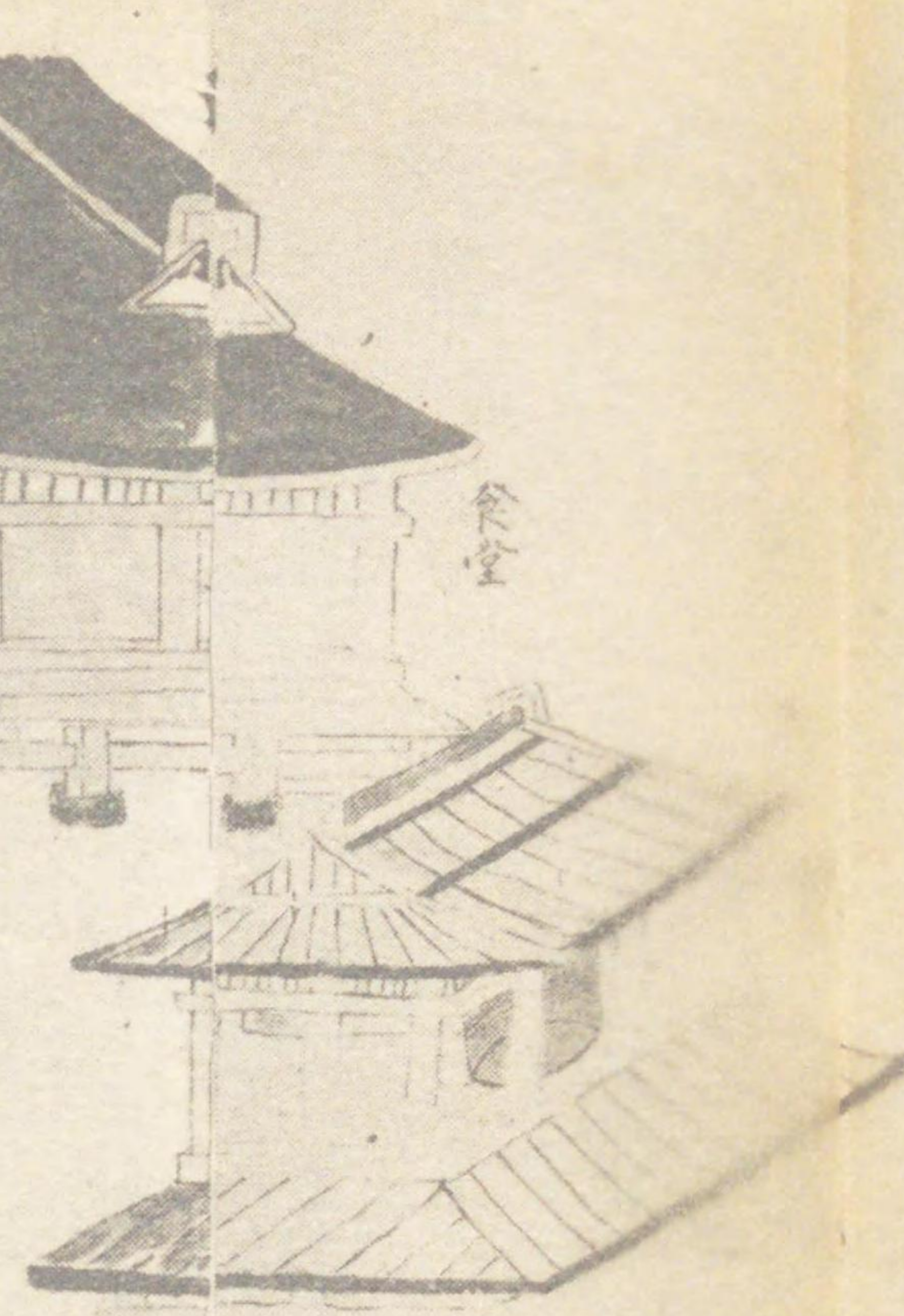


此ノ山ノ頂ニ
神ノ宮ニ在リ
世ノ人々
皆之ヲ敬ミ
奉ル也

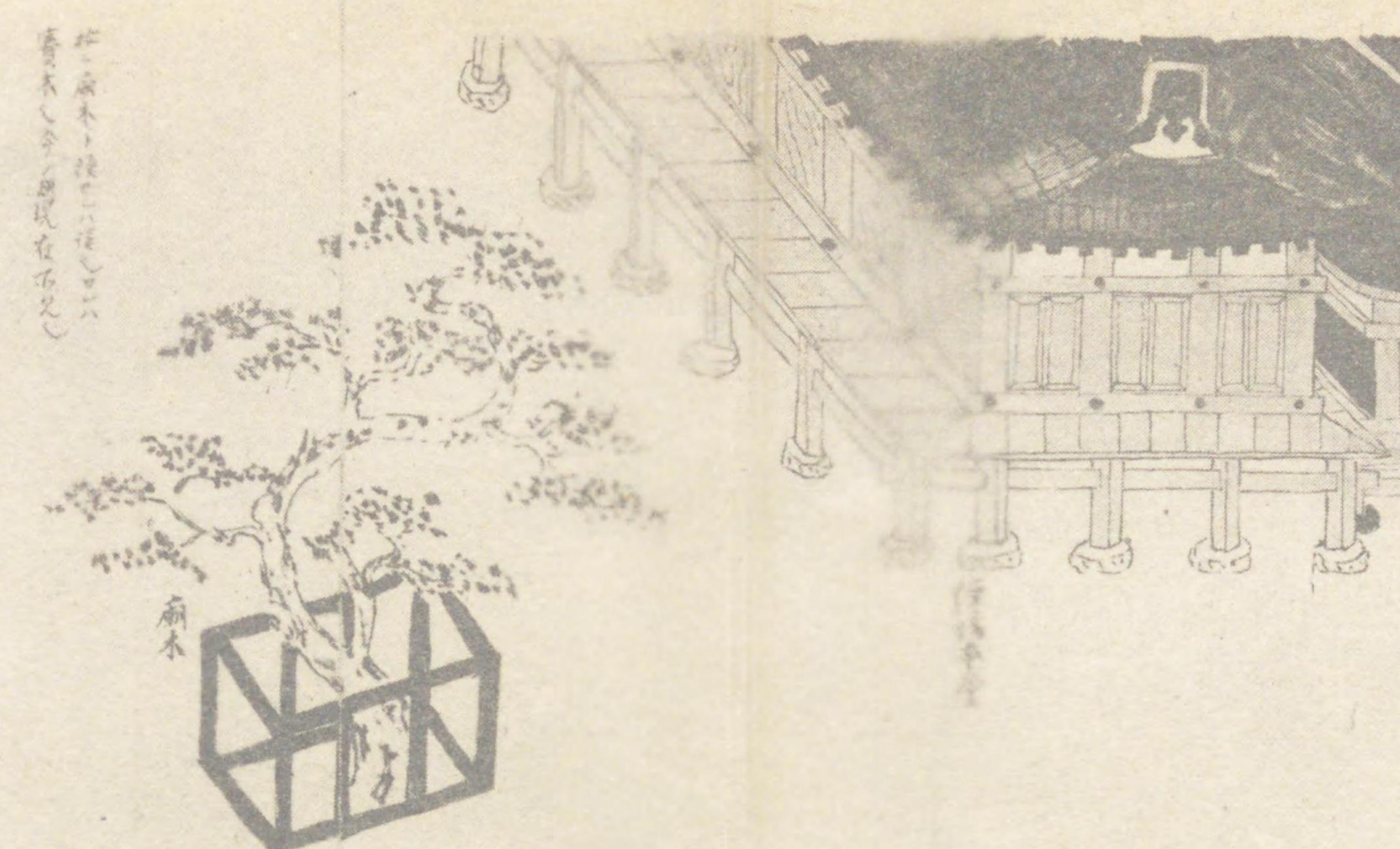
此ノ山ノ頂ニ
神ノ宮ニ在リ



此の建物は、
今も残存する
と云ふ事



食堂



廟木

此の廟木、
今も残存する
と云ふ事

此の建物は、
今も残存する
と云ふ事



斎庭



花壇



依止り

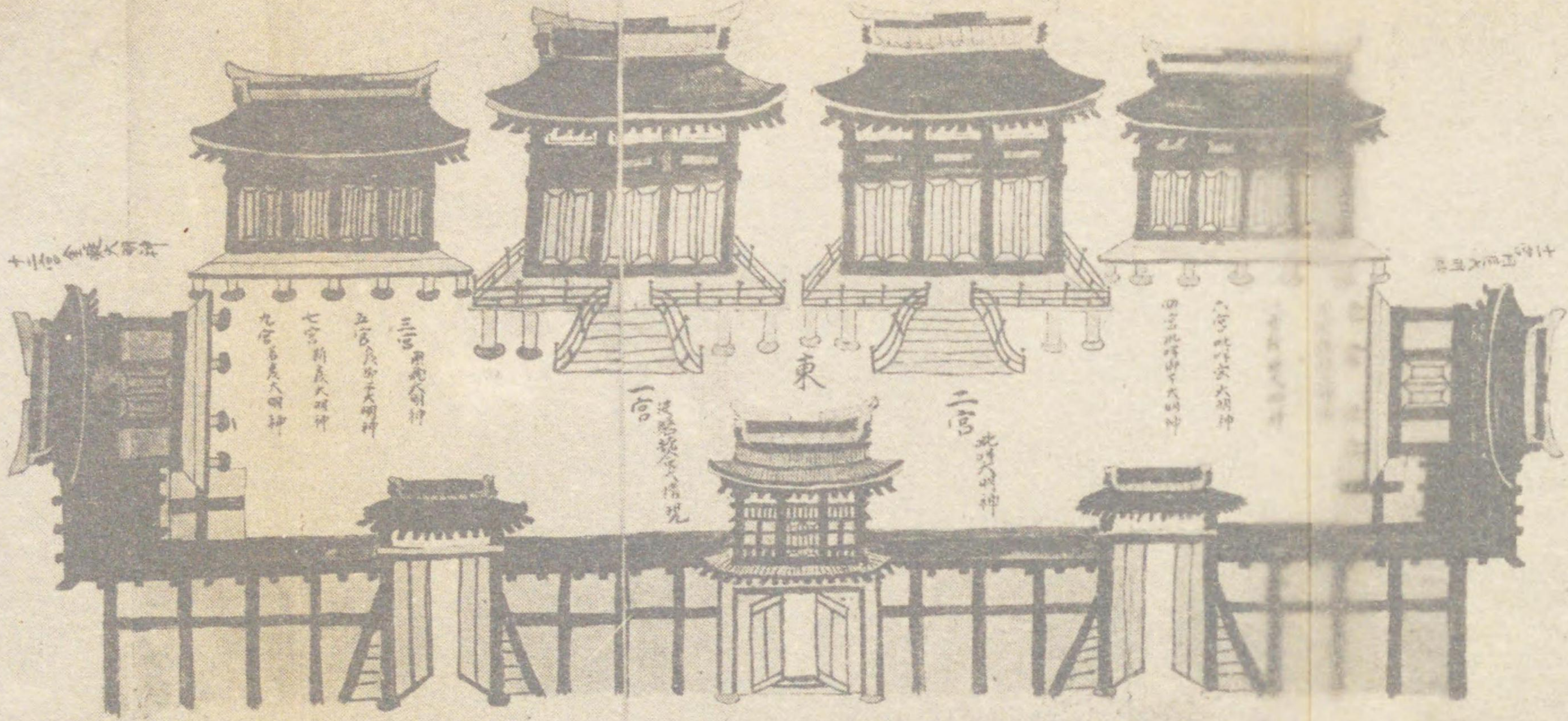
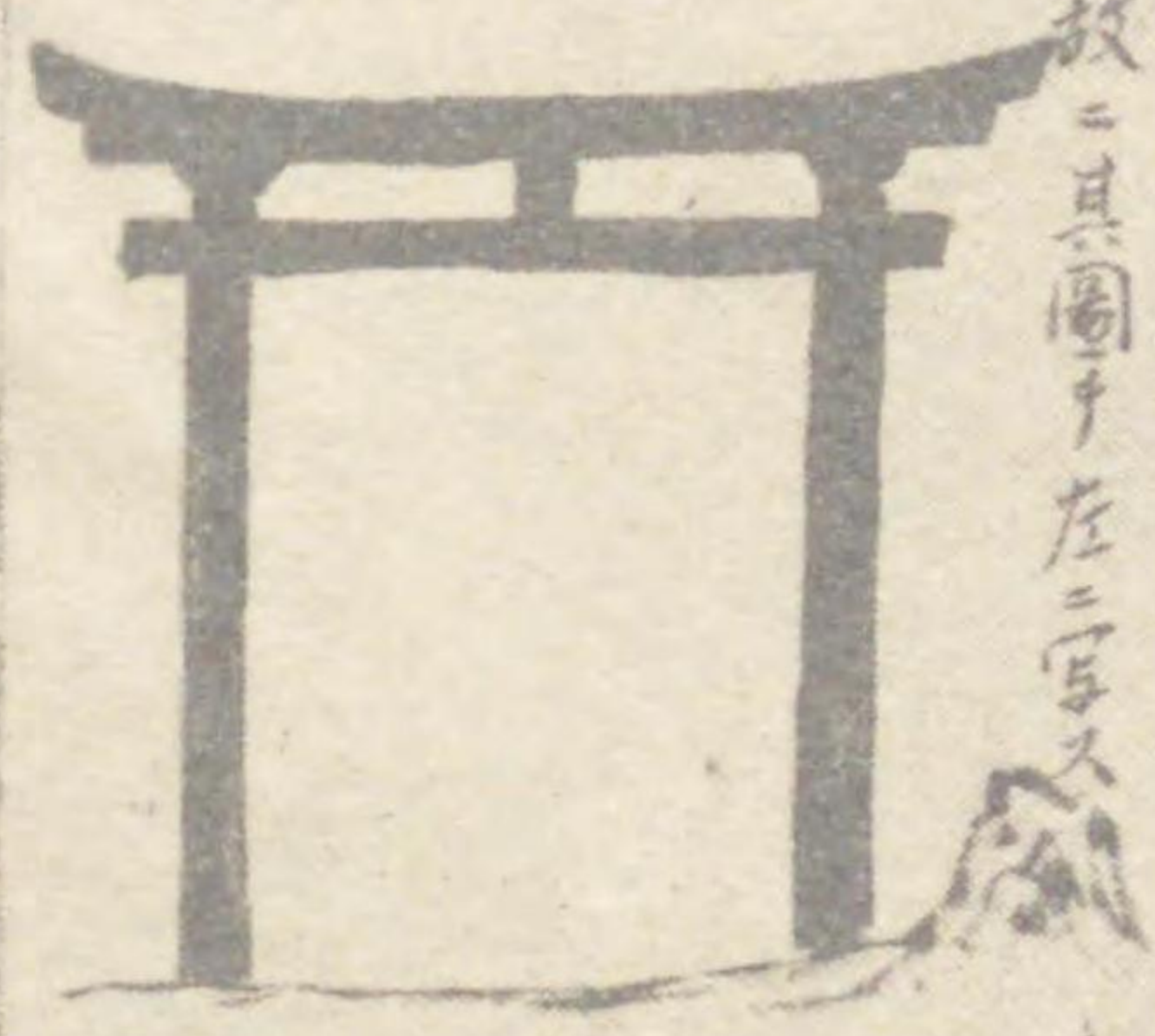
此の中、
煙囪の圖



此の石、
今も残存する
と云ふ事

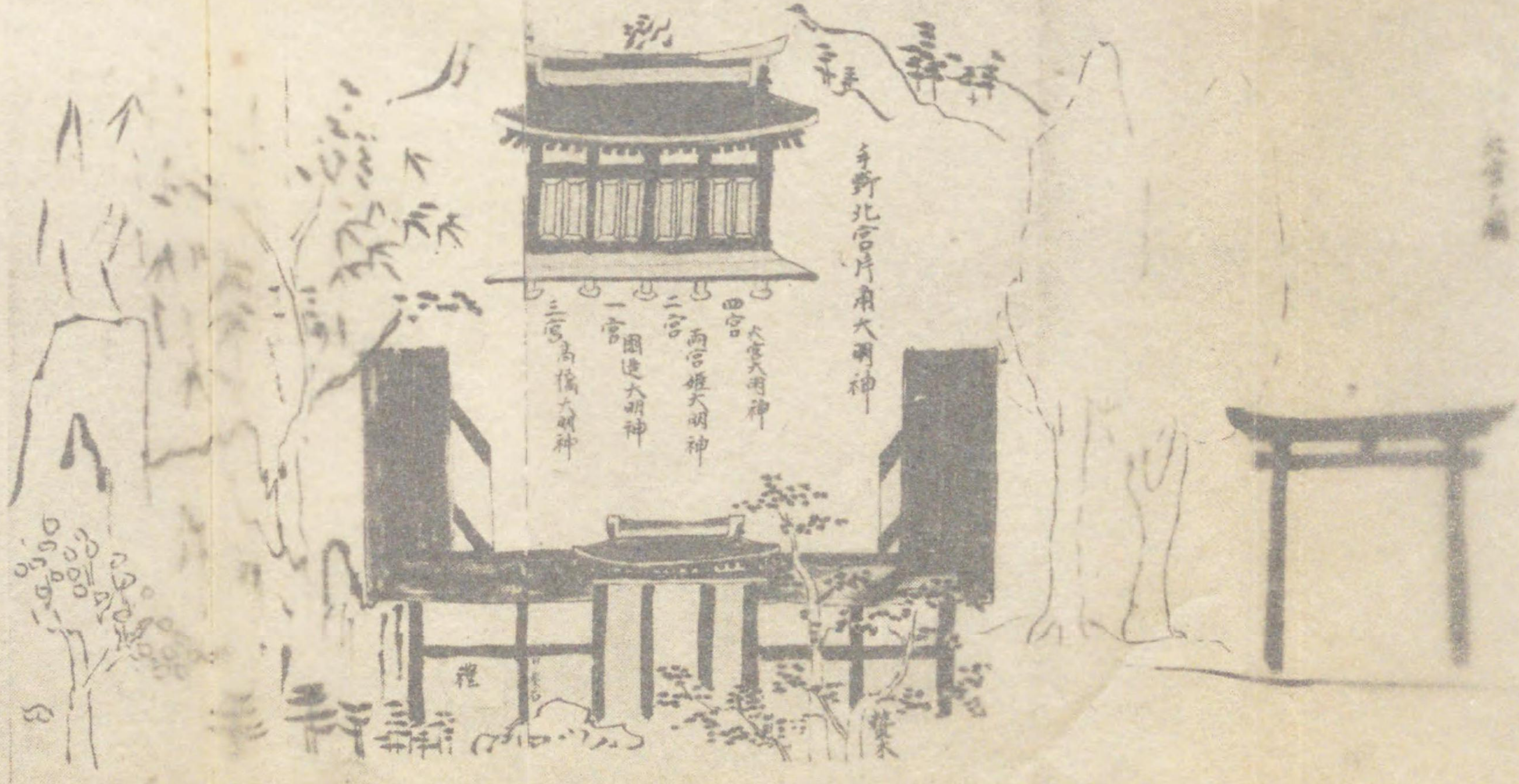
右ハスヘテ、
此の園ナリ、
其の詳ナルコトハ、
此の圖中、
不見シ、
木石ハ、
未ダ、
殿舎ノ、
ミ、
ナリ

宮殿ノ圖永享此書名卷物アリヤイ
 東殿トシテ御所前ニ在リト記セリ是殿中
 汝モ大槩ニシテ故ニ其圖ヲ左ニ寫ス
 城ノ鳥居ト儀ニ記シスハ
 後小ノ前ニ圖スルト成
 難キ故ナル

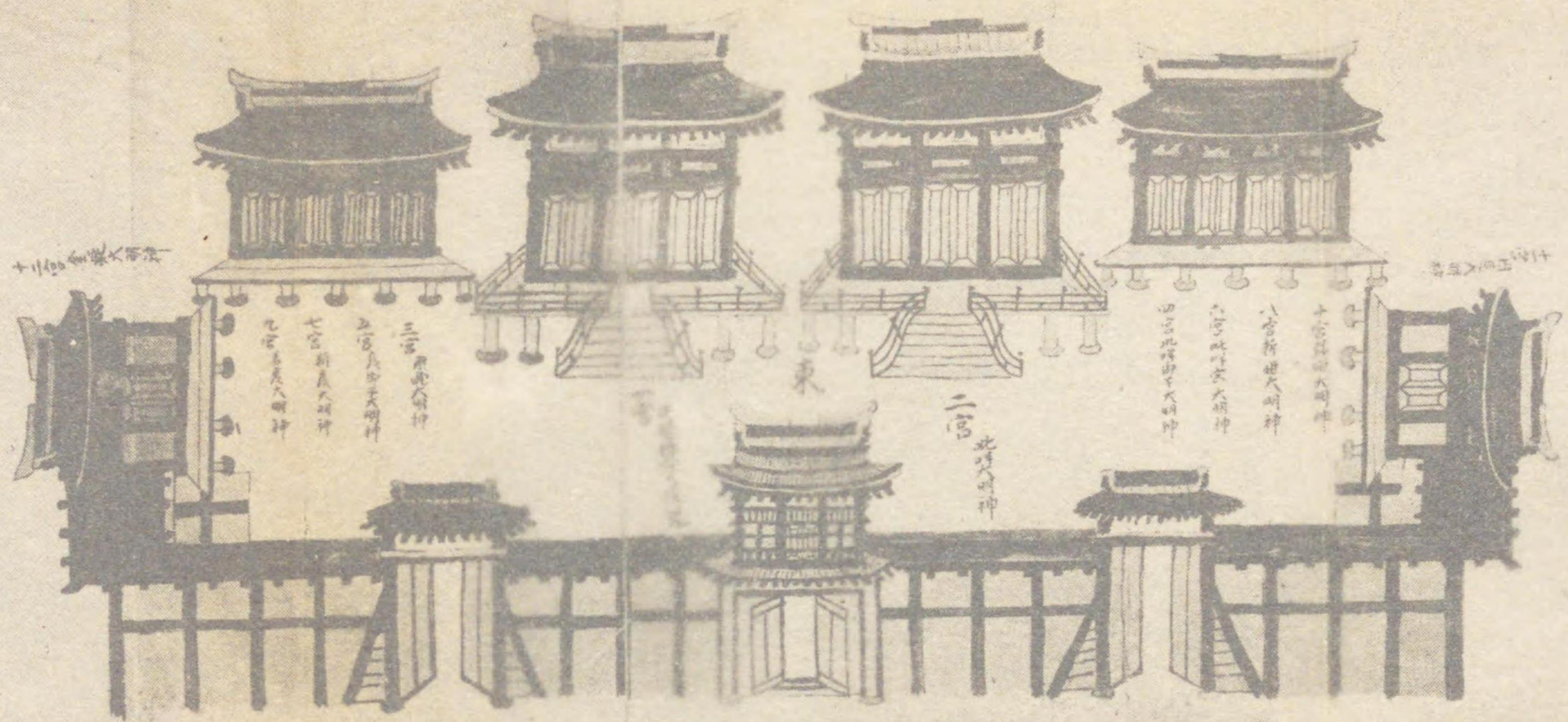


武長二年五月十三日一三三五六九宮前戸開トシテ

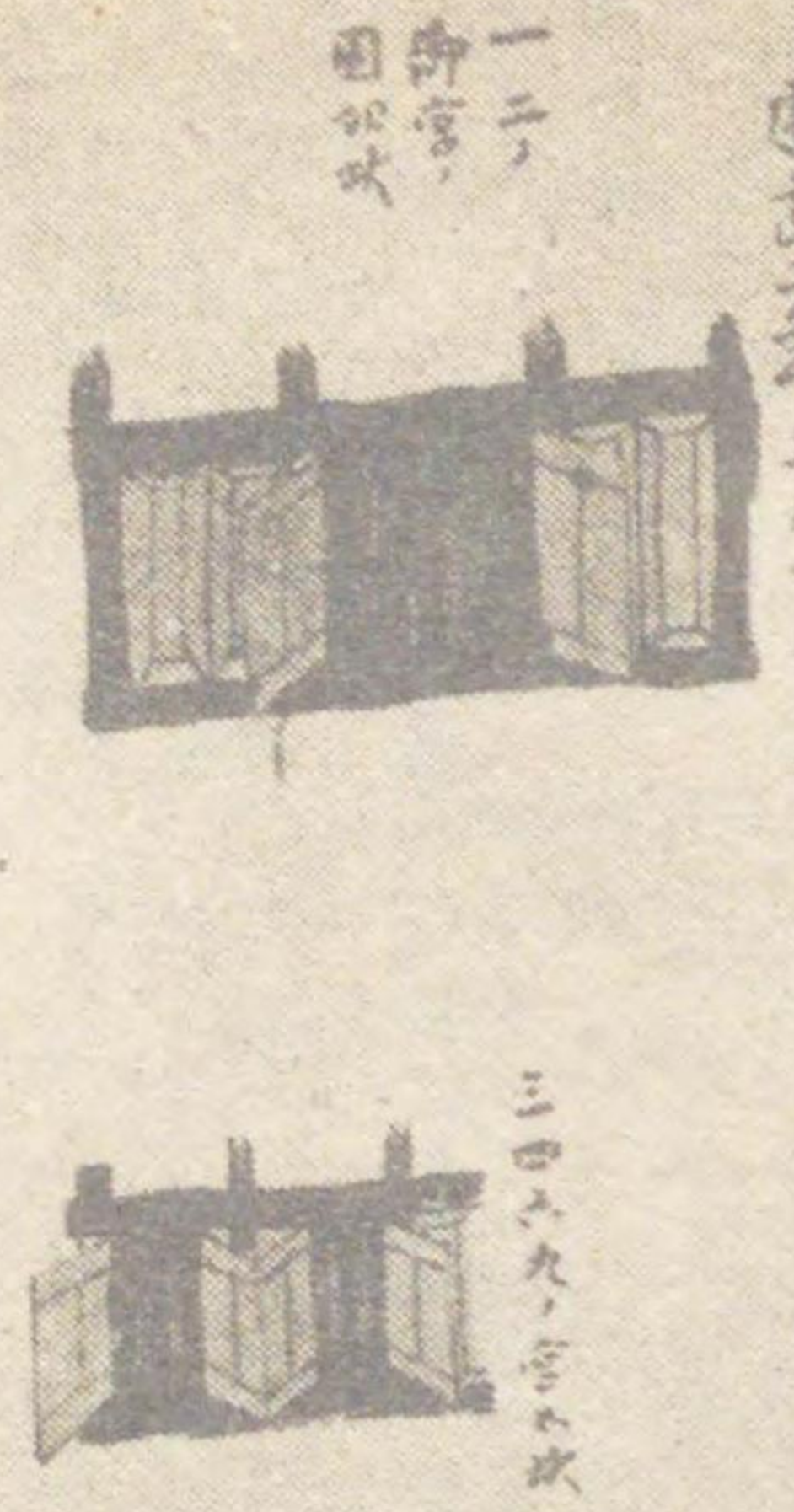
右圖中ノ殿舎永享中抄書ノ趣キ以テ考ルニ
 殿前構殿等ハ畧セリト見エ只神殿近圖ニ在
 歟
 〔永享〕十年四月八日此殿ハ二内門ト云フ
 廻廊中ノ乃之ノ中ノありハ右ノ圖ノ廻廊トモ
 相違キハ此ハ此圖ニ示レラレドモ
 多クノノ又ナリト云フ
 山上ノ九 三秋ノ神殿ハ
 一ノ一 永長年中修造トありハ
 本ノ一ノ一 園ノ宮殿トありハ
 上抄此ノ一ノ一 園ノ宮殿トありハ



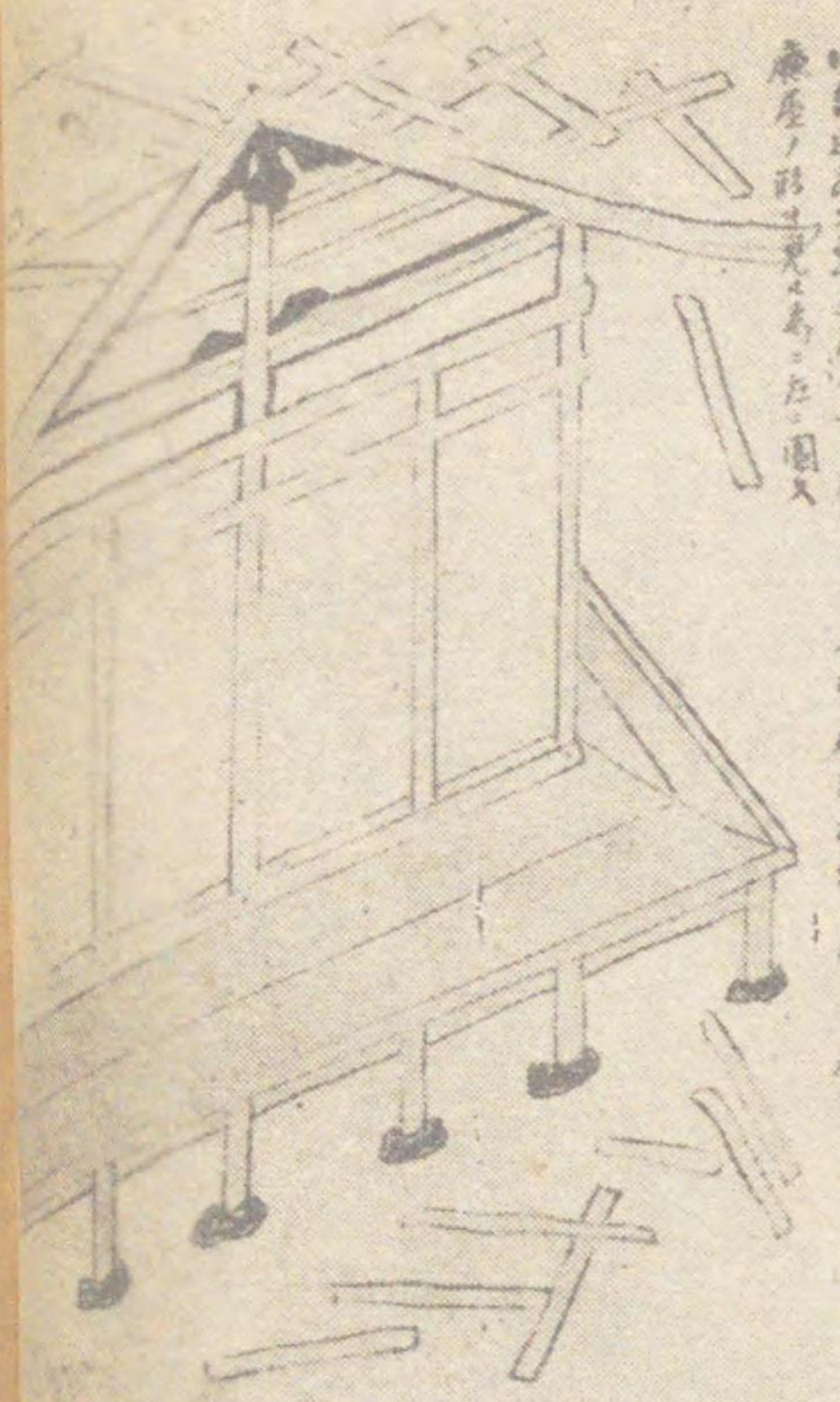
宮殿ノ圖永享此古本卷物ノ一ノ中
 東ノ門ノ外ニ有リテ
 西ノ門ノ外ニ有リテ
 南ノ門ノ外ニ有リテ
 北ノ門ノ外ニ有リテ



建武三年五月十三日二二五五九宮御所同レトノ御所



同建武三年三月十二日凡十ノ下宮殿屋敷院ノ圖アリ破損ノ用ナレバ
 廢屋ノ形ノ圖又



右圖中ノ殿舎永享中掇書ノ趣ナリテ考レハ并
 殿所積殿等ハ吾セリト見エ只神殿近ノ圖ニ
 示ス
 同建武三年四月九日凡二ノ門ノ外ニ有リテ
 四ノ門中ノ外ニ有リテ
 五ノ門中ノ外ニ有リテ
 六ノ門中ノ外ニ有リテ
 七ノ門中ノ外ニ有リテ
 八ノ門中ノ外ニ有リテ
 九ノ門中ノ外ニ有リテ
 十ノ門中ノ外ニ有リテ
 十一ノ門中ノ外ニ有リテ
 十二ノ門中ノ外ニ有リテ
 十三ノ門中ノ外ニ有リテ
 十四ノ門中ノ外ニ有リテ
 十五ノ門中ノ外ニ有リテ
 十六ノ門中ノ外ニ有リテ
 十七ノ門中ノ外ニ有リテ
 十八ノ門中ノ外ニ有リテ
 十九ノ門中ノ外ニ有リテ
 二十ノ門中ノ外ニ有リテ

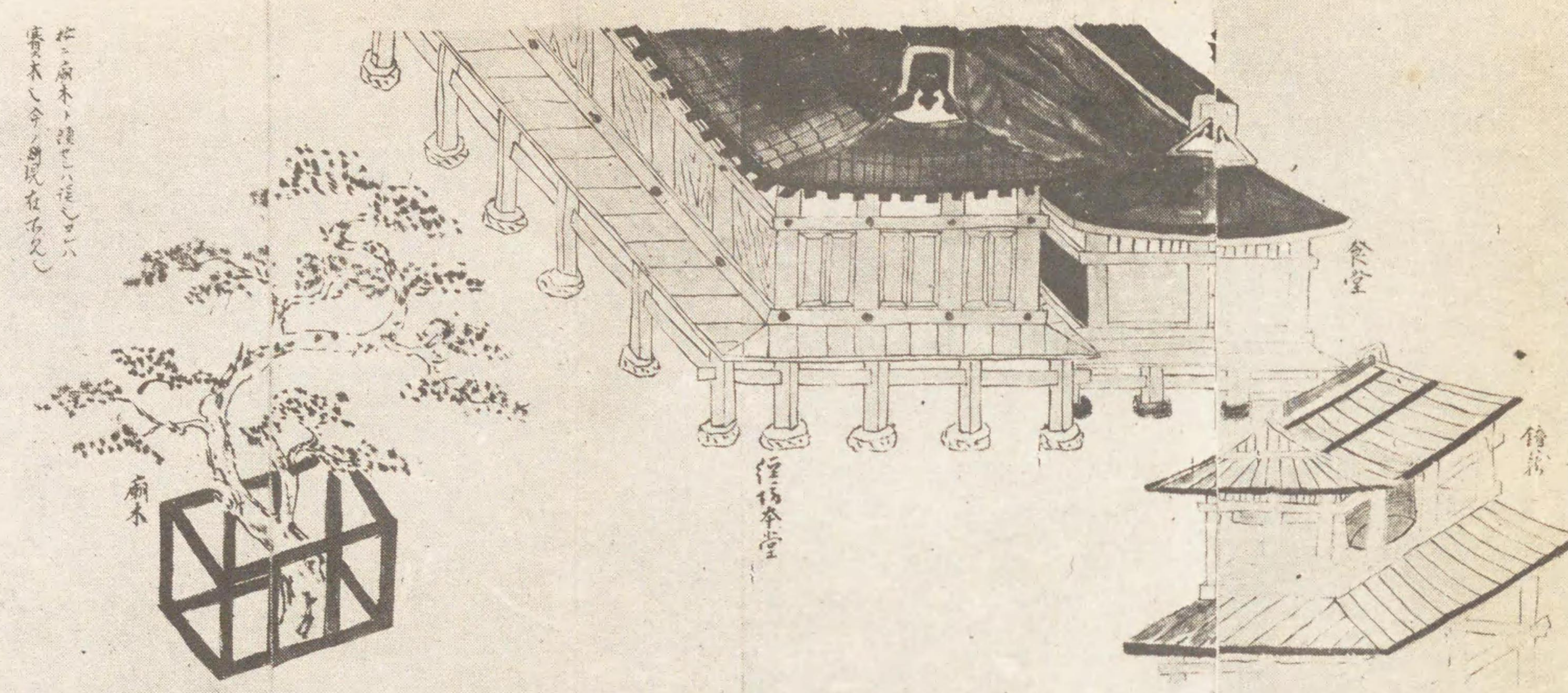


本堂西殿殿最末繪師之
 高室

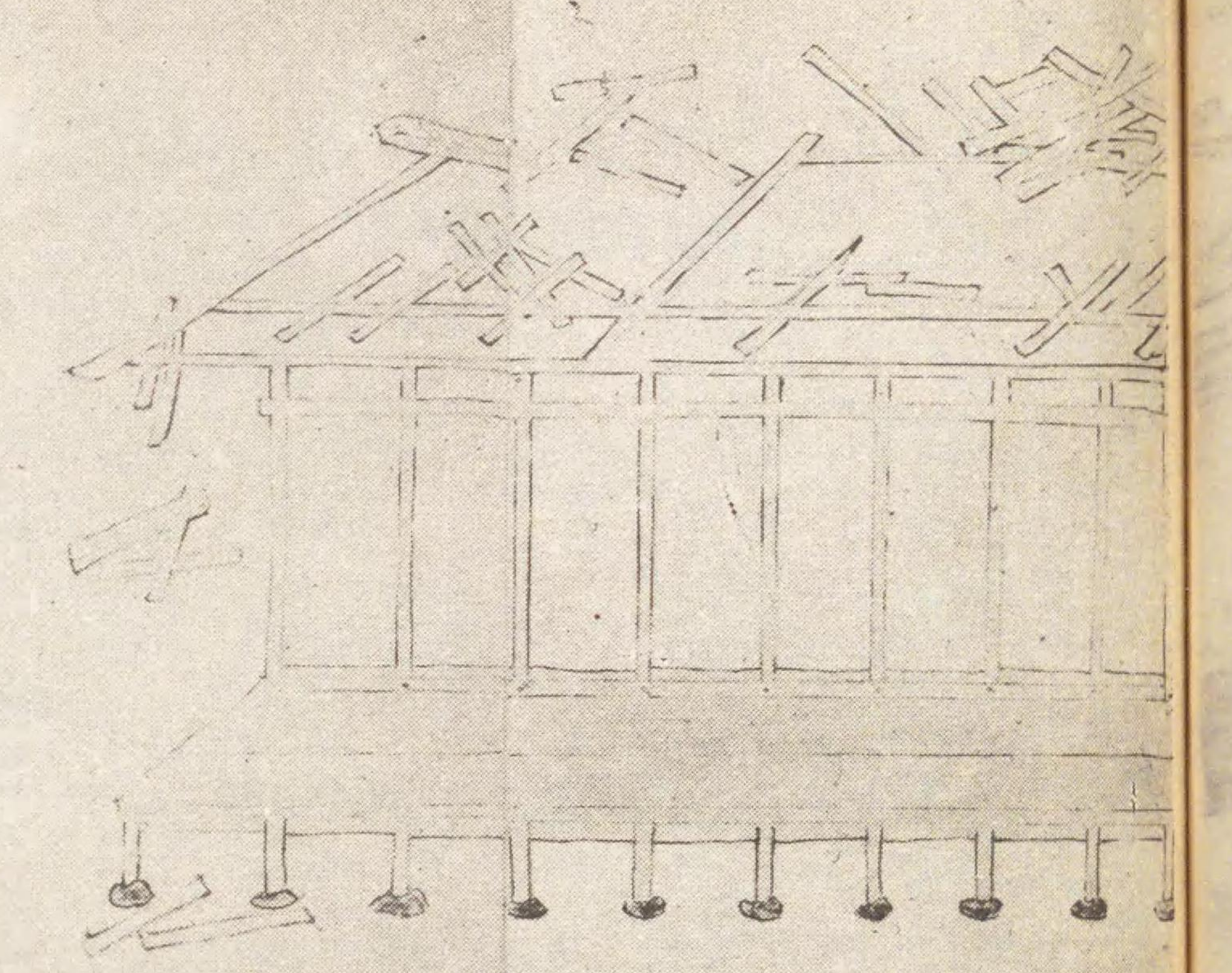


按此後在所之上
白鳥トヒトレハ

松ニ麻木ト建テハ後ニモハ
實木ト今ノ所現在不欠



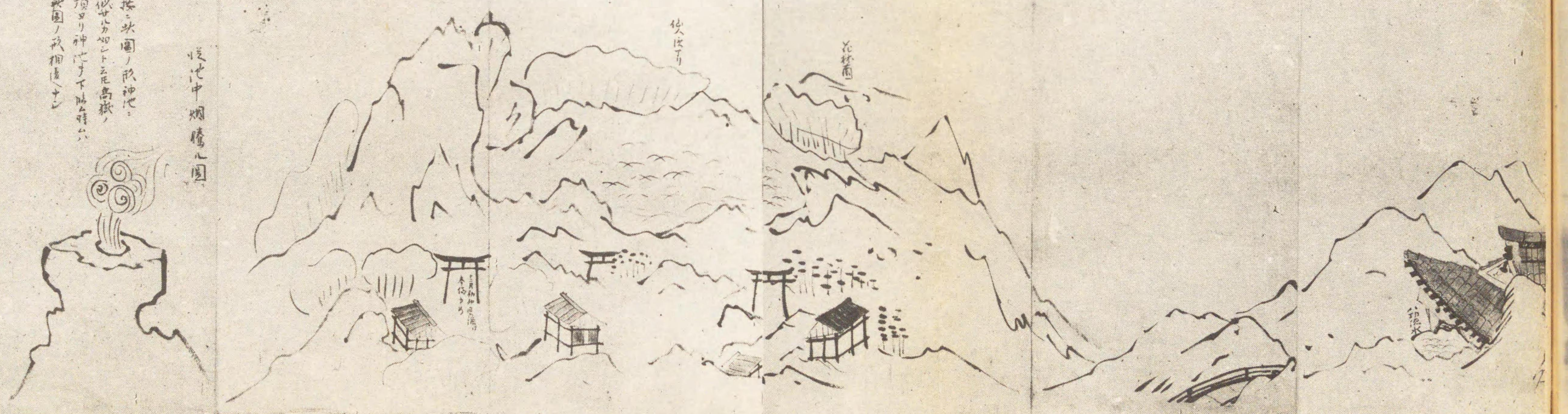
經坊食堂ノ圖
此圖ハ即宮ノ圖トツキテ今ノ所ノ圖ニ
ソノ中ニ記シテ九段ノ所ニツキテ今ノ所ノ圖ニ
テコ



右ハスヘテ畧圖ナリ其詳ハ九ノトハ就中其
不見ニ未ダハ未ダシテ不敷余ノミ未ダ

按此圖ノ形神池
似此カ如シト云云高嶽ノ
頂ヨリ神池ニ下ル時ハ
此圖ノ形相違ナシ

後世中烟燻ノ圖



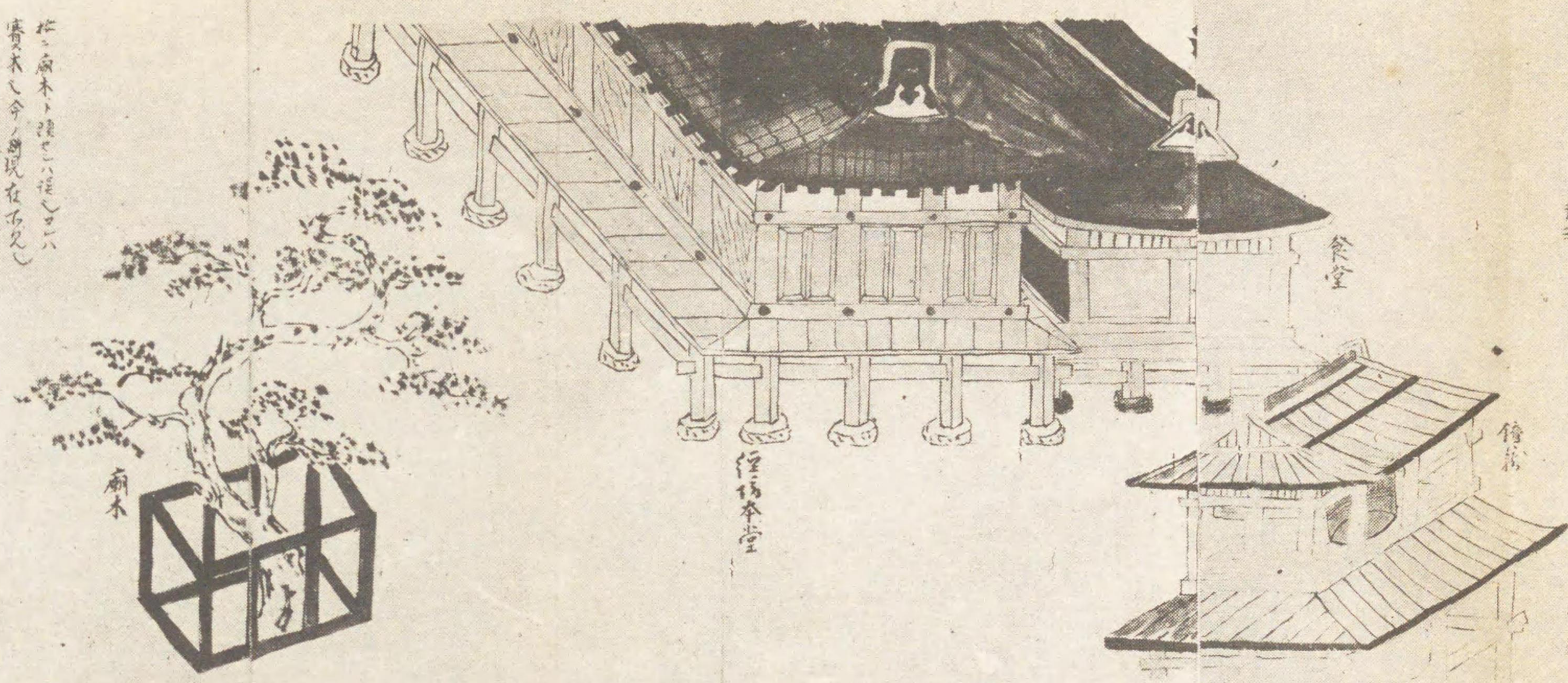
後世中

花野園

印徳水

經坊食堂圖

此圖ハ即宮ノ廟トツキタレド今殿内ノ圖ニ應座ノ圖ト
ソノ中ニ記シタル致サレキニナリ人共ハ其ノ
テヨ

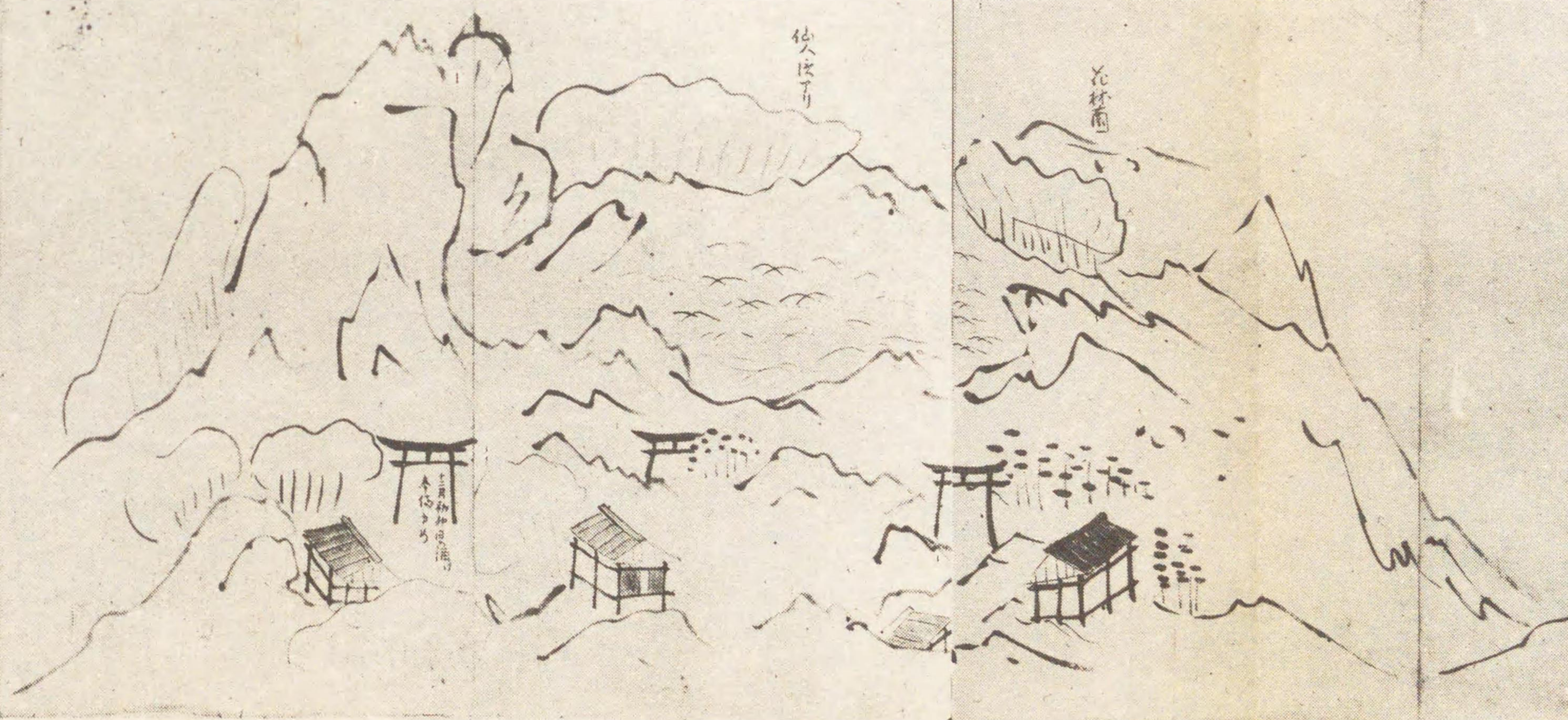


此ノ廟木ト雖モハ佳シマハ
實ニ木ノ今ノ所見在ナク

按此後ノ在所ト上ノ
鳥居トヒトシレカレ



花林園



後世中烟燻園



按此園ノ取神池ニ
似タカクシト云ニ高嶽ノ
頂ヨリ神池ヲ下ル時ハ
此園ノ取相違ハナシ

右ハスヘテ畧園ナリ其詳ナルコトハ就中書
不見シ未若ハ来ナ神ノ殿舎ノミ来ナ
スルナリ

〔阿蘓文書寫 第二十二 本堂〕

文明八年四月廿五日
阿蘓山營足
本堂造
棟別料
日記寫
家數

阿蘓四面

內

坂梨

野中

北坡梨

豆札

阿蘓品

古家

牛峯

荻迫

手野

山田

綾野

小藏

湯浦

狩尾

的

石

竹原

黑河

棟別析足日記
一家數九百七十五 代九貫七百五十文

一所四面之內

一所坂梨 家數三百五十

一所北坡梨 家數三百 野中

(豆札) まめうゝ 代三貫

一所阿蘓品 家數二百 古家 牛峯

荻迫 隈崎 代二貫

一所手野 屋敷二百 代二貫

一所山田 (綾) あい野 小藏 家數二百 代二貫

一所湯浦 家數二百五十 代二貫五百

一所(狩)か?尾 的 家數百 代一貫

一所竹原 黑河 家數四百五十 代四貫□(五百)□

阿蘓文書之二

新樂坊契
下田能政
小陣惟典
中司

文明四年八月廿八日
阿蘇山
本堂造營
棟別料足
日記寫

阿蘇家文書下

已上三十貫二百五十文
文明四年八月廿五日

新樂坊契 弁花押
下田山城守能政同
小陣玄番尉惟典同
中司

家幸同
宗弘同
能安同

□(文)明四年之□
阿蘇山本たうの(棟別)むきへ□
(大野郷)おのゝかうふるいちれところ□
(家)いる五
いる十八
いる十二

みやううその
さいちやう寺

いる廿三
いる十八
いる十四
いる廿一
いる廿五
いる十二
いる十一
いる十一
いる十七
いる八
いる十二
いる廿
いる八
いる四
いる十二
阿蘇文書之二

ぬまる殿
にまの□いりをやし殿

い
とちわら殿
おうとね
ぬくぞる
こなかたけ
へらき
きわらたに
ならひら
めり□
□
□
□
□

いゑ五
いゑ四
いゑ十
いゑ十
いゑ卅
いゑ九
いゑ廿九
いゑ七
いゑ三
いゑ二
いゑ八
いゑ十六
いゑ十五
いゑ九
いゑ四

おか
すのこ
さうけひら殿
けすのき
おの四り
とまの
一のかけより
ひんか
さいふく寺
うめぬきはる
あまふその
一のをる
たまらい
せんまやう
に

いゑ三
いゑ卅一
いゑ九
いゑ十六
いゑ卅
いゑ六
いゑ十二
いゑ十五
いゑ十
いゑ卅
いゑ十
いゑ五
いゑ三
いゑ廿
いゑ四

いりけり
かまのまゑ
ま
ちと
けの
くろをる
やないをる
まもつる
ふるその
やうかの分
とろ